

# 建築と社会

Architecture and Society

# 01

vol.97 No.1126

2016

特集：

## 都市の記憶をたどって

Trace the memory of city

01  
大津閘門と  
第一トンネル東口

02

03

04

05

06

07

08

09

10

11

12

## お客様と共に、これからも

間仕切の総合メーカーとしてお客様と共に歩んできました。  
豊富なラインナップで、これからも快適環境のあくなき追求にお応えします。

### カームドア

バリアフリードアの定番、カームドア、  
軽やかな動作は、高いホスピタリティを提供いたします。



### マイティ-70

豊富な実績と豊かなパネルバリエーションが特長の  
機能美あふれるスチールパーティションです。



### ハフコーウォール

空間を有効活用。遮音性タイプのスライディングウォールです。



### トイレブース

スタンダードから、ハイグレードまで豊富にラインナップ。



**小松ウオール工業株式会社**  
<http://www.komatsuwall.co.jp/>

本 社 / 石川県小松市工業団地 1-72  
大阪市場開発部 / 大阪市西区土佐堀 2-2-4  
大 阪 支 店 / 大阪市西区土佐堀 2-2-4  
大阪第一支店 / 大阪市西区土佐堀 2-2-4

☎ (0761)21-3131 (代)  
☎ (06)6447-0421 (代)  
☎ (06)6447-0971 (代)  
☎ (06)6447-9261 (代)

# 2016年を迎えて

一般社団法人 日本建築協会 会長 香西喜八郎

新年あけましておめでとうございます。

日本建築協会はいよいよ来年3月30日に創立100周年を迎えます。大正6年（1917年）片岡安をはじめとした武田五一ら関西在住の建築家によって「関西建築協会」として創立され、大正8年に「日本建築協会」と改称し現在に至っています。この間、戦前戦後を通じ「建築を通じて社会に貢献する」ことを目的に様々な活動を続けてまいりました。

協会の中心事業である「建築と社会」誌の発行をはじめ、時代に応じたテーマによる催しや新建築・古建築の見学会、講演会、講習会、出版物の企画・発行、建築関係団体との交流・連携事業、若手技術者の発掘・育成など、数々の活動は100年というその歴史を刻んだ証です。引き続き取り組んでまいります。

100周年を目前にした今年は、それらの総決算というべき年と位置付け、意義深いものとするため、様々な催しを企画し具体化してまいります。来年の創立記念日に向け広く社会にアピールする企画や他の団体が催すイベントとコラボするなど、協会内だけにとどまらず幅広く取り組み、100周年の機運を盛り上げていきたいと考えています。

創立記念日当日は大阪市中央公会堂で「記念式典」を予定しています。中央公会堂は、当時大阪市の助役であり後に大阪市長になる関一を構師に招き協会の第1回大会を開催した思い出深い会場です。当日は式典だけでなく講演会や若手技術者によるシンポジウム、パネル展示なども行い100周年を大々的に発信したいと考えています。また、100年を集大成した「記念誌」等の出版物の企画も具体化してまいります。

過去の集大成だけでなく、将来に残せるもの、次代に引き継ぐものは何か、智慧と技術を結集し、さまざまな仕掛けを考え、未来志向で進めてまいります。会員の皆様には、ご支援、ご協力をお願いいたします。

朝の連続ドラマ「あさが来た」が好調です。幕末から明治にかけての大阪商人の姿をいきいきと映し出しています。大阪商人独特のユーモア、人情味あふれる商い、新しいものに取り組む進取の気風がよく表れていると思います。建築や土木、文化、教育に関心が高く、中央公会堂や大阪府立図書館の建設、淀屋橋をはじめとする数多くの橋の架設、美術館や漢学の懐徳堂などに私財を投入するなど、大阪商人の独自性、心意気を感じます。今も脈々と息づいていると言えましょう。我々建築にたずさわるものにとって、大阪商人のこのような生きざまは通じるものがあり、教訓となるものではないでしょうか。

環境を形成し文化の発展に寄与する「建築」の重要性をアピールする活動は建築をつくる側の義務です。この意図に賛同され、会員の方々にはぜひとも協会の活動に参加し、協会を通じて社会に貢献していただきたいと思います。

本年もご支援、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

日本建築協会・常設委員会

## 本年の抱負

編集委員会

## 創立100周年に向けて

編集委員長

米井 寛

日本建築協会は、来年（2017年）3月に創立100周年を迎えます。本会は、1917年に「関西建築協会」として設立されましたが、2年後の1919年には「日本建築協会」に改められ、設立当初から発行されている会誌は、1920年に「建築と社会」という名称を与えられて、今日に至っています。本会は、この会誌名のとおり、設立当初から、「建築を通じて社会に貢献する」ことを活動の重要な柱としており、創立100年を迎えるにあたり、本会のいわば設立理念であり、本会の諸活動に通底していると思われる「建築と社会」をテーマとした連載「建築と社会を考える」を

昨年10月にスタートさせました。建築と社会の様々な関係を理解し、本会の社会的役割をさらに深めていくことができればと期待しています。また、100周年を記念した出版も計画していますが、「建築と社会」誌にこれまで連載していた「関西の建築界／群像」と「再読 関西近代建築」は昨年のうちに連載を終了し、これらを再構成した記念誌の企画を進めています。「建築と社会」誌は会員の皆さまと社会とをつなぐメディアでもあります。皆さまの建築作品、論考、活動報告などを掲載する場を用意していますので、積極的なご投稿をお待ちしています。

事業委員会

## 繋がる・気づく・行動する

事業委員長

児玉 謙

若手会員のグループU-35委員会による企画も回を重ね、2月には「共のレシピ」と銘打った学生アイデアコンペティションを予定しています。若手会員が活動の場を教育機関・学生にも拡げるのは初の試みで当協会のプレゼンスをいっそう向上してくれることと期待していますが、ここで呼びかけられているアイデアも興味深いものになっています。スマートフォンの登場、SNSやシェアリングサービスなどの普及により「いつ・どこにいても」繋がることのできるようになった個人がコミュニティを再定義する、場の拘束からいったん離れた個の集合体が、敢えて共有するつなが

りの場「共（きょう）」とはどういったものだろうか？と問いかけています。私たち社団法人とか協会とかいうのもいわばSocial Networkのはしりといえるかもしれません。「建築と社会」というしっかりとしたメディアをさらに充実させながらも、繋がり、シェアし、気づき、行動する「場」をつくるのが事業委員会の役割です。みんなで少しずつ進化させていきましょう。100周年にむけて準備の年となりました。各事業へのご理解ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

出版委員会

## 正しい技術の伝承を

出版委員長

西 博康

昨年は、建築に関する施工や製品の製造の問題で社会に対して大きな不安や不信を与える事象が多数生じました。建築に携わる者として、その様な事態を決して生じさせてはいけないものと考えます。設計や施工、あるいは保全に携わる方が、正しい技術的な知識や能力を維持・向上させ、社会に対する使命と責任を果たしていくことが重要です。出版委員会では、これまで「プロのノウハウ」シリーズをはじめ、多くの出版物を社会に提供を行って参りました。今年も、昨年度来、企画・編集を続けてまいりました、意匠系・構造

系・設備系の各分野の作品などを提供し社会への貢献を図りたいと思います。今年は、その活動を一步踏み込んで、書籍ではなく、講習会の企画といった「生の声」として伝える活動にも取り組んでみたいと考えております。これまで交流が無かった団体へも交流を図り、読者層の拡大と協会の活動の教宣、建築を通じた社会への貢献を図りたいと考えます。出版委員会では、その様な活動に協力頂ける専門知識を持たれた方を求めています。是非とも皆さん、当委員会から、専門書を出版してみませんか！

教育委員会

## 101年目からの展開

教育委員長

山形政昭

昨秋大阪で「生きた建築ミュージアムフェスティバル」が行われました。近代建築はもとより、ミナミの某商業建築、グランフロント大阪などなど、70数か所の様々な建築を一挙公開、見学案内するというイベントでした。仕掛けたのは、協会の事業でもお世話になっている橋爪紳也氏。建築の多彩な専門家と、街づくりに関心をもつ多くの協力者によって実現したもので、一般のマニアにとっては建築を見て、触れて、楽しむ又とない機会だったと聞きます。「イケフェス」と呼ばれたこの試みは、町と社会に

働きかける建築イベントとして、いろいろな可能性を示していたように思えました。本委員会の協力事業である、小中学生を対象とした「住まいまちづくり教育支援事業」のヒントになるかも知れません。さて協会100周年を目前にして、継続事業の「工高生デザインコンクール」「建築工事实務講習会」は夫々の担当委員のご尽力で、順調な歩みを続けていますが、加えて101年目からの展開も模索し工夫しなければなりません。今年もよろしくお願い致します。

# 若き創造者たちへ

## 「第63回青年技術者顕彰」のご案内

日本建築協会では、昭和29年から「青年技術者」を表彰してきました。これは、35才以下の優秀な設計者、技術者、研究者等を対象とするもので、若手建築技術者のいわば登龍門として定着しています。

今年も、青年技術者選考委員会を設けて、これまでどおり、計画・設計・構造・設備・施工およびその他の分野について青年技術者を表彰します。

選考は有職者による選考委員会が行い、選出された方は、本会総会での表彰、「建築と社会」への掲載等を予定しています。建築界の様々な分野で活躍されている皆様の積極的なご応募をお待ちしています。

### 応募提出規定

1. 応募できる人は満35歳（平成28年3月30日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。
2. 原則として、すいせん者を併記する。  
すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。
3. 応募分野は特定しない（建築に関するあらゆる分野を対象とする）。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等の分野にあって、なしたぐれた実績について、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。
4. 提出された資料は「青年技術者選考委員会」において選考する。
5. 「青年技術者選考委員会」において選出された青年技術者は本会総会において表彰し、「第63回青年技術者特集号」（平成28年6月号予定）に掲載する。

### 6. 提出資料

#### ■応募用紙

本会事務局で発行、またはホームページからダウンロードして下さい。

#### ■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

### ■選考資料

#### A：業績資料（A3版5枚以内／書式は任意）

- ① 設計の場合——鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料
- ② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）——上に準じた資料
- ③ 上記以外の分野の場合——それぞれの分野にふさわしい資料

#### B：青年技術者の思い（A4版2枚以内／書式は任意）

上記業績資料に記載した業績において、本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明をしてください。また、本人の建築、都市、環境などに対する考え方、取り組み姿勢や将来展望等について簡潔にまとめてください。文字だけでなく必要に応じて図表、写真等も用いてもかまいません。ただし、応募者本人の執筆に限りです。**この資料は、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えていますので、十分配慮して下さい。**

#### 7. 提出期限 平成28年3月28日（月）

#### 8. 提出先 （一社）日本建築協会「青年技術者選考委員会」

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31

大阪マーチャンダイズ・マートビル7階

電話 06-6946-6981 FAX. 06-6946-6984

E-mail : jigyoka@aaj.or.jp

#### 9. 提出方法 郵送（当日消印有効）または持参

#### 10. 青年技術者選考委員会（予定）

委員長 米井 寛／（株）東畑建築事務所  
常務取締役本社オフィス代表

委員 佐々木 栄／（株）昭和設計執行役員建築部門設計推進室室長  
高梨雄二郎／（株）竹中工務店開発計画本部長（西日本担当）

長尾 健／長尾健建築研究所代表

吉岡 聡司／大阪大学大学院キャンパスデザイン室准教授

辻 聖晃／京都大学大学院工学研究科建築学専攻准教授

山浦 晋弘／（株）安井建築設計事務所構造部長

小倉 良友／（株）日建設計エンジニアリング部門  
設備設計グループ副代表兼部長

阪井 聡／（株）大林組大阪本店建築事業部生産技術部部長

山辻 直樹／大成建設（株）関西支店建築部購買管理室課長

## 第15回 読者と選ぶ 「建築と社会」賞の ためのアンケート 回答募集

2015年 1～12月号  
「建築と社会」誌から

\*2015年の誌面詳細は、2015年12月号p48に掲載している総目録または日本建築協会HPをご覧ください。

「建築と社会」という本誌の趣旨にふさわしい地域性や社会性に配慮し、建築・環境技術の進展や文化の醸成に寄与する建築作品や建築にかかわる論文・記事などを顕彰する。選考にあたっては、会員の声を反映し、広く開かれた賞とする。

### ■選考対象

「建築と社会」2015年 1～12月号に掲載された作品、および論文・記事を対象とする。

- ・「作品作風頁」、「gallery頁」、「本会支部作品頁およびそれに準ずる作品頁」掲載の建築作品
- ・「特集頁」掲載の論文、特集の企画
- ・「シリーズ頁」の論文・記事（法令コーナー、構造の頁、設備の頁、再読関西近代建築、関西の建築界／群像、新建材の頁、素材最前線、REPORT頁、Member's Forumほか）

### ■会員読者による第一次選考

会員読者から投票された「作品」および「論文・記事」に、編集委員会の意見を加味して各部門10点程度選出。これを第二次選考対象とする。

### ■選考委員会による第二次選考

第一次選考を通過した選考対象を、選考委員会で選出。（該当者に写真、図面、設計主旨などの説明資料を求めることがある）

### ■第15回選考委員

田中直人（島根大学大学院・特任教授／選考委員長）  
阿部浩和（大阪大学大学院・教授）  
高砂正弘（和歌山大学大学院・教授）  
多賀謙蔵（神戸大学大学院・教授）  
弘本由香里（大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所・特任研究員）  
近本智行（立命館大学・教授）

### ■賞の部門

作品部門／1～4点  
論文・記事部門／1～4点  
その他部門（特別賞）

### ■発表と表彰

作品部門は建築主、設計者、施工者の中の代表者に、論文・記事部門は執筆者（複数の場合は代表者）に、賞状（記念楯）を贈呈する。表彰式は6月中旬を予定。入賞発表は「建築と社会」2016年 7月号予定。

### ■投票締め切り

2016年 3月 1日（火）

### ■送付先

（一社）日本建築協会  
FAX 06-6946-6984  
E-mail : jiggyoka@aaj.or.jp  
〒540-6591  
大阪府中央区大手前1-7-31  
OMMビル7階

日本建築協会ホームページ <http://www.aaj.or.jp> からも、ご投票いただけます。

## 「建築と社会」賞 読者アンケート

送付先  
（一社）日本建築協会  
FAX06-6946-6984  
E-mail:jigyoka@  
aaj.or.jp

「建築と社会」2015年 1～12月号で、よいと思われた作品・論文・特集企画・記事（特集の場合は個々の論文・記事を対象とする）、その他本誌に対するご意見を記入の上、E-mailまたはFAXで、（一社）日本建築協会へご投票下さい。

（2015年〇〇月号掲載の作品、論文・記事名及び同執筆者名を明記してください）

（1）お名前

（2）勤務先または連絡先

（3）とくによいと思われた作品とその理由

（4）とくによいと思われた記事とその理由

（5）本誌についてのご意見や、取り上げてほしい内容などがありましたら、ご記入下さい。

## U-35委員会企画 3rd action 「建築と共有」 第1回 学生アイデア コンペティション

## 公開審査&講評および交流会のご案内

と き 2016年2月20日(土)  
13:30~16:30  
と ころ デザイン・クリエイティブ  
センター神戸 (KIITO)  
アクセス 阪神「神戸三宮」駅、阪  
急「神戸三宮」駅、JR  
「三ノ宮」駅より、フラ  
ワーロードを南へ徒歩20  
分、国道2号線を越えた  
神戸税関東向かい



## U-35委員会企画 3rd action 「建築と共有」 第1回 学生アイデア コンペティション 作品募集要項

### ■開催詳細

日 時 2016年2月20日(土)  
13:30~公開審査  
15:00~交流会  
※12:00より受付開始

### 講 評

◎猪熊 純 氏 (首都大学東京助教、  
成瀬・猪熊建築設計事務所)

◎前田昌弘 氏 (京都大学助教)

会 場 デザイン・クリエイティブ  
センター神戸 (KIITO)  
3階 303号室

参 加 費 (交流会費込)

学 生 500円

個 人 会 員 500円

上記以外一般 1,000円

定 員 50名 (先着順)

申 込 み FAXまたはE-mailで

①催し名「U35アイデアコ  
ンペ講評会」

②氏名 (ふりがな)

③年齢

④学校名または職場名

⑤住所、電話番号

⑥学生・個人会員・一般の種別

⑦メールアドレス (※受付後、  
参加証を送付します)

参加申込締切日 2016年2月8日(月)

申 込 先 (一社)日本建築協会

(担当: 井筒)

TEL 06-6946-6981

FAX 06-6946-6984

E-mail: hensyu@aaj.or.jp

### ■「建築と共有」開催主旨

2015年12月より、大学院生・大学  
生・短大生・高等専門学校生らを対象  
に、「共のレシピ」をテーマとして、ア  
イデアコンペ作品を募集しています  
(要項は下記参照)。

寄せられたコンペ作品は、U-35委員  
会の事前審査を経て、上位数点の作品  
について、公開審査を実施。この公開  
審査では、応募代表者が作品について、  
プレゼンテーションを行います。次世  
代(スマホ世代)は、「共有」にどのよ  
うなイメージをもって語るのか…、果  
たして、どのような感性・感覚をもっ  
て「つながり」を「場」へと落とし込  
むのか…。

ゲスト審査員の猪熊氏、前田氏には、  
それらの作品について、たっぷりと講  
評を語っていただきます。

賞のほか内容等については、今後、  
U-35のfacebookや協会ホームペー  
ジで公表しますので、右記アドレスにア  
クセスしてください。

交流会では、軽食を準備します。学生、  
ゲスト審査員、来場者、U-35委員会の  
メンバーらが一堂に会し、それぞれが  
持ち寄った共有についてのアイデアを  
肴に、そこそこで生み出される「共有  
の場」を楽しんでいただければと考え  
ています。

### ■U-35委員会とは

日本建築協会における「若手設計者を  
中心とし業種・組織を超えた同世代  
をつなげるプラットフォームの創出、  
U-35世代の多角的な視野の獲得、建築  
における多様な価値の社会への発信を  
活動の目的としています。

1st actionは、2013年11月「建築と  
木材」をテーマに、「大阪木材仲買会館」  
の見学会および3名のパネリストを招  
いての講演会・交流会を実施しました。  
多数の方にご参加いただき、大成功を  
おさめることができました。

2nd actionは、2014年6月「建築  
と拡場」を開催。うめきた再開発のさ  
きがけ「グランフロント大阪」に携わ  
る4名のパネリストを迎え、そこでの  
体験を語ってもらい、ディスカッショ  
ンを行いました。参加者も増え、世代  
を超えた交流を生み、この企画自体が  
「拡場」になりえたのではないかと思っ  
ています。

◆ U-35委員会facebook

↓ ↓ ↓

www.facebook.com/U35.aaj

◆

日本建築協会HP

↓ ↓ ↓

http://www.aaj.or.jp/

### ゲスト審査員プロフィール

猪熊 純



1977 神奈川県生まれ  
1996 栃木県立宇都宮高校卒業  
2002 東京大学工学部建築学科卒業  
2004 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻  
修士課程修了  
2004-06 千葉学建築計画事務所勤務  
2007 成瀬・猪熊建築設計事務所共同設立  
2008 首都大学東京助教

建築をはじめ、プロダクトやまちづくりまで様々な  
デザインを手がける。近年「シェア」をテーマとし  
て、新しい運営と空間を一体的に捉えた活動を展開  
している。  
代表作に「柏の葉オープンインノベーションラボ (通  
称KOL)」。

前田昌弘



1980 奈良県生まれ  
1999 奈良県立奈良高校卒業  
2004 京都大学工学部建築学科卒業  
2006 京都大学大学院工学系研究科建築学専攻  
修士課程修了  
2012 京都大学大学院工学系研究科都市環境工学  
専攻博士後期課程修了 博士 (工学)  
2013 京都大学助教

地域コミュニティの継承・発展、および平時・非常  
時の関係という視点から居住空間づくりの研究を  
行っている。京都、東北、スリランカ等でフィール  
ドワークや実験的プロジェクトに取り組む。著書に  
「世界住居誌」、「自然災害と復興支援」、「津波被災と  
再定住」(近刊)等

### ◆応募方法

作品提出締切までに、A1 (パネル貼り・縦使い) × 1 枚 (裏  
面に代表者氏名・所属・電話番号・メールアドレス、およ  
び共同設計者名・所属を記載)、作品のPDFデータを納めた  
CD-R × 1 枚を下記まで送付ください。

〒540-6951 大阪市中央区大手前 1 丁目 7 番31号  
OMMビル 7 階B室

(一社) 日本建築協会「U-35コンペ係」

※講評会当日 (2/20) 模型持ち込み可。11:00までにKIITO  
内の審査会場に搬入してください。



## 『共のレシピ』

スマートフォンは、発売以来、私たちの生活を劇的に変化させ続けている。  
SNSやシェアリングサービスなどネットワーク上での個人同士の自由な繋  
がり、若者を中心に日常的コミュニケーションの重要な位置を占め始め  
ており、私たちは「いつ・どこにいても」必要な情報や繋がりにアクセス  
できる自由を手に入れた。

一方、私たちの社会が古来より培ってきたコミュニティ母体 (家族、集落、  
団地、公園、広場、学校、自治体、商店街、お祭りなど) の縮小化・希薄  
化・孤立化に対し、シェアハウスやFAB Cafe、エリアマネジメントなど  
は、既成の仕組みを掛け合わせることで「場所に根差したコミュニティ」を  
再定義し、新しい共同体としての価値を生み出していると言える。

場の拘束から離れ、自由の身となった個の集合体が、敢えて場を共有する  
ことで生まれる豊かな繋がりの場 (=「共 (きょう)」) とはどういったもの  
だろうか。素材の持ち味を掛け合わせて料理するときの「×」(掛け算)  
のメソッドで、次世代の社会問題に鋭くメスを入れる、独創的で美味しい  
『共のレシピ』を期待したい。

### ◆審査委員

猪熊 純 (首都大学東京助教、成瀬・猪熊建築設計事務所)

前田昌弘 (京都大学助教)

一般社団法人日本建築協会U-35委員会

### ◆応募資格

2016年2月20日時点で大学院、大学、短大、高等専門学校、  
専修学校などに属する学生の方。個人・チームは問いません。

### ◆作品提出締切

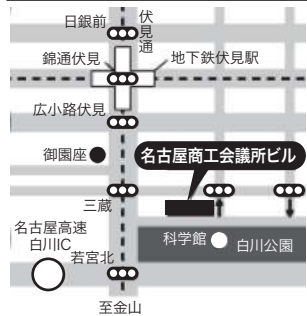
2016年2月8日 (月) 消印有効 ※送付のみ受け付けます。

# 会告 日本建築協会

## 日本建築協会東海支部主催 建築工事实務講習会

この講習会は、建築CPD情報提供制度認定プログラムです。  
(公社)愛知建築士会 (6単位)  
(公社)日本建築家協会 (6単位)

### ■講習会会場〈名古屋商工会議所ビル〉



## 日本建築協会中国支部主催 建築工事实務講習会

■講習会会場  
(広島工業大学 広島校舎)  
・広電市内電車 袋町または中電前下車  
・広島バス 平和記念公園前下車



この講習会は、建築CPD情報提供制度プログラムです。  
(公社)広島県建築士会 (6単位)  
(公社)日本建築家協会 (6単位)

日時：2016年1月28日(木)  
9:30~17:00  
会場：名古屋商工会議所ビル・9階  
(愛知建築士会内)  
名古屋市中区栄2-10-19  
定員：60名(先着順)  
受講料：15,000円(含テキスト代 税込)  
※テキスト当日配布

### ■申込方法

FAXまたはE-mailにて

- ①講習会名
- ②〒・住所
- ③受講者氏名(年齢)
- ④事業所名
- ⑤担当責任者
- ⑥電話番号
- ⑦FAX番号
- ⑧E-mailアドレス
- ⑨受講料支払方法(銀行振込等)

受講料は前払制となっていますので、併せて銀行振込等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講番号をE-mailまたはFAXで通知します。なお、日本建築協会東海支部HPから受講申込書のダウンロードができますので、<http://www.aaj-tokai.jp>をご覧ください。

■締切日 2016年1月20日(水)  
但し、定員に達し次第締め切ります。

日時：2016年2月18日(木)  
9:30~17:00  
会場：広島工業大学 広島校舎  
広島市中区中島町5-7  
定員：60名  
受講料：15,000円(含テキスト代 税込)  
※テキストは、当日配布させていただきます。

### ■申込方法

FAXまたは中国支部へ直接

- ①講習会名
- ②〒・住所
- ③受講者氏名
- ④事業所名
- ⑤担当責任者
- ⑥電話番号・FAX番号
- ⑦受講料支払方法(銀行振込等)
- ⑧CPDを申請される方は、申請先の団体名をお知らせ下さい。

受講料は前払制となっていますので、併せて銀行振込等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講票をお送りいたします。

■申込締切 2016年2月10日(水)  
(定員になり次第締切)

■受付時間 9:00~17:00  
(土、日、祝除く)

### ■申込先

(一社)日本建築協会 東海支部  
〒460-0008  
名古屋市中区栄2-10-19  
名古屋商工会議所ビル・9階  
(愛知建築士会内)  
TEL: 052-201-2201  
FAX: 052-201-3601  
E-mail: [info@aaj-tokai.jp](mailto:info@aaj-tokai.jp)  
URL: <http://www.aaj-tokai.jp>

### <振込先>

- 三菱東京UFJ銀行  
栄町支店(普通 0167157)  
一般社団法人日本建築協会  
東海支部

### ■趣旨と内容

- 本講習会は、官公庁・設計事務所・建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い分野の技術者を対象としたものです。
- とくに取り付きにくい施工計画と仮設見積、現場実務の基礎である積算業務に重点をおき、講義します。
- 都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。
- 積算業務では具体例より、その着工準備から完成に至るまでをわかりやすく解説します。

### ■申込先

(一社)日本建築協会 中国支部  
〒730-0805 広島市中区十日市1-1-9  
(相生通り鷹匠ビル4階山陽工業㈱内)  
TEL 082-232-6471  
FAX 082-291-2233  
E-mail: [info@aaj-chugoku.jp](mailto:info@aaj-chugoku.jp)  
URL: <http://www.aaj.or.jp>

### <取引銀行>

- 広島銀行  
本川支店(普通 3424438)  
シャ)ニホンケンチクキョウカイ  
一般社団法人日本建築協会

### ■趣旨と内容

- 本講演会は、官公庁・設計事務所・建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い分野の技術者を対象としたものです。
- とくに取り付きにくい施工計画と仮設見積、現場実務の基礎である積算業務に重点をおき、講義します。
- 都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。
- 「積算業務」では具体例より、その着工準備から完成に至るまでをわかりやすく解説します。

## 施工計画

### 日吉 智紀 氏

清水建設㈱名古屋支店  
建築技術部生産計画グループ主査

適切な施工計画を立案できることが、建築現場技術者の必須条件です。

安全で、経済的な施工計画を解説します。

## 仮設見積

### 福井 浩二 氏

㈱大林組名古屋支店  
建築工事部建築生産技術第二課長

仮設工事費は、非常に把握しにくい面があって、ついつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

## 積算業務

### 時武 治 氏

㈱竹中工務店名古屋支店  
見積部課長

見積業務のなかで基本となるのは、数量積算です。この手順、基準を基本に、より合理的で正確な積算業務を解説します。

## 施工計画

### 井上 昇 氏

清水建設㈱広島支店  
工事長

適切な施工計画を立案できることが、建築現場技術者の必須条件です。

安全で、経済的な施工計画を解説します。

## 仮設見積

### 尾野本 悟 氏

広島工業大学  
教授

仮設工事費は、一般には非常に把握しにくい面があって、ついつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

## 積算業務

### 横段 隆弘 氏

横段建築事務所

見積業務のなかで基本となるのは、数量積算です。この手順、基準を基本に、より合理的で正確な積算業務を解説します。

# 建築と社会

Architecture and Society

1

vol.97 No.1126

2016

特集予告

02 03  
月号 月号  
… 東海特集  
非日常の棲み処(すみか)〜寝泊まりの進化(仮)

今月の表紙

大津閘門と第一トンネル東口 (1890)



琵琶湖から京都に水を送る琵琶湖疏水。その出発地点のゲートとトンネルである。トンネルの入り口には伊藤博文の筆による扁額「氣象萬千」が掲げられている。

「風景や気候が変化する様はすばらしい」という意味であるそうだが、エンジニアリングの産物である土木構築物に文化的な意味を添える先人の心意気に、学ぶことは多いだろう。

対して大津閘門では、丸みを帯びた積み石と流れる水がつくりだす実利的な造形に、素直に心を打たれる。

表紙の写真は浚渫工事中の疏水の様子。京都へ続く隧道と対峙する重機の姿にも、技術と歴史の深みと重みを感じる。

(多田正治)

「人工水系をめぐる建築／土木／ランドスケープ」と題して、今号より12回にわたって水系沿岸の建築や土木、ランドスケープを紹介いたします。水の流れとともに行く、1年間の旅にどうぞお付き合い下さい。

表紙デザイン・撮影 多田正治  
(多田正治アトリエ)

## 特集：都市の記憶をたどって

目次

### 【座談会】

都市の記憶をたどって

| 本多友常 松田奈緒子 吉村英祐 米井 寛 田中直人(司会) 16

### 【投稿記事】

坂本勝比古 | 石田潤一郎 | 米井 寛 | 三谷帯介 | 高木秀晃 | 池上 明 | 倉渕奈千子 |  
ペリー史子 | 増田健一 | 稲垣和江 | 澤田純一 | 梅村宏尚 | 余田尚紀 | 黒柳 亮 |  
藤原光博 | 川合隆之 | 松田奈緒子 | 豊田充広 | 渡部 剛 | 酒井雅男 | 下坂浩和 |  
塚口眞佐子 | 加嶋章博 | 設楽貞樹 | 寺西興一 | 寺地洋之 | 上田正人 | 吉村英祐 |  
東井嘉信 | 米山剛史 | 野田隆史 | 村上幸三郎 | 安福賢太郎 | 鈴木克彦 | 小浦久子 |  
田中直人 | 梅田善愛 | 山形政昭 | 本多友常 22

|                                  |                                                                                         |                                                                                                                                                                          |                  |
|----------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------|
| 年頭の言葉                            |                                                                                         | 香西喜八郎                                                                                                                                                                    | 1                |
| 本年の抱負                            |                                                                                         | 常設委員会   米井 寛・児玉 謙・西 博康・山形政昭                                                                                                                                              | 2                |
| 連載                               | 会告                                                                                      | 第63回青年技術者顕彰のご案内<br>第15回読者と選ぶ「建築と社会」賞のためのアンケート回答募集<br>U-35委員会企画 3rd action「建築と共有」第1回学生アイデアコンペティション公開審査&講評および交流会のご案内、第1回学生アイデアコンペティション作品募集要項<br>平成27年度建築工事実務講習会（東海支部・中国支部） | 3<br>4<br>5<br>6 |
|                                  | 作品作風                                                                                    | 姫路ターミナルスクエア<br>京都リサーチパーク アステラス製薬 京都朱雀事業所 勢州楼                                                                                                                             | 8<br>10<br>12    |
|                                  | gallery                                                                                 | いこいの家   野口志乃                                                                                                                                                             | 14               |
|                                  | 法令コーナー                                                                                  | 駅周辺への都市機能集積に向けた都市計画の見直し   足立和康                                                                                                                                           | 43               |
|                                  | 構造の頁                                                                                    | HK淀屋橋ガーデンアベニュー   田代靖彦                                                                                                                                                    | 44               |
| 新連載 再読<br>関西近代建築<br>一論考・<br>記事編一 | 郷土建築座談会   酒井一光                                                                          | 46                                                                                                                                                                       |                  |
| 建築と社会を<br>考える                    | 建築・都市のユニバーサルデザイン   田中直人                                                                 | 48                                                                                                                                                                       |                  |
| 入賞発表                             |                                                                                         | 第61回工高生デザインコンクール                                                                                                                                                         | 54               |
| 新製品レビュー                          | 介助のためのL字型子扉が付いた居室内トイレ用ドア<br>クロスタ®   小松ウオール工業株式会社<br>超速硬化ウレタン防水クイックスプレー<br>  株式会社ダイフレックス | 62<br>64                                                                                                                                                                 |                  |
|                                  | information                                                                             | 生誕110年 村井正誠展 ひとの居る場所／特集展示 大坂出土の貿易陶磁／美と装い 新収蔵品とともに／奇想の版画家 谷中安規展 蔵出し！M氏コレクション／浮世絵・水彩画に見る新宿風景展 江戸から昭和まで                                                                     | 66               |
| 月間の動き                            |                                                                                         | 平成27年11月                                                                                                                                                                 | 73               |

所在地 兵庫県姫路市西駅前町73 他  
敷地面積 2,652.00㎡  
建築面積 2,063.76㎡  
延床面積 13,133.70㎡  
構造規模 S造、地上9階  
工期 2013年11月～2015年1月  
最寄駅 JR・山陽電鉄 姫路駅  
撮影 K's Photo Works



東側外観

# 姫路ターミナルスクエア

建 築 主 神姫バス株式会社  
 監 理 二神建築事務所  
 設 計 KAJIMA DESIGN  
 施 工 鹿島建設関西支店

世界遺産・国宝姫路城の平成の大修理完成に合わせ駅前周辺整備事業が進められてきた。当ビルは姫路駅北駅前広場に正対し、JR・山陽電鉄の姫路駅を結ぶ姫路市連絡デッキから直結する複合オフィスビルである。「地域との共生」をキーワードに、駅前に求められる機能・環境整備を行い、街づくりに大きく貢献している。

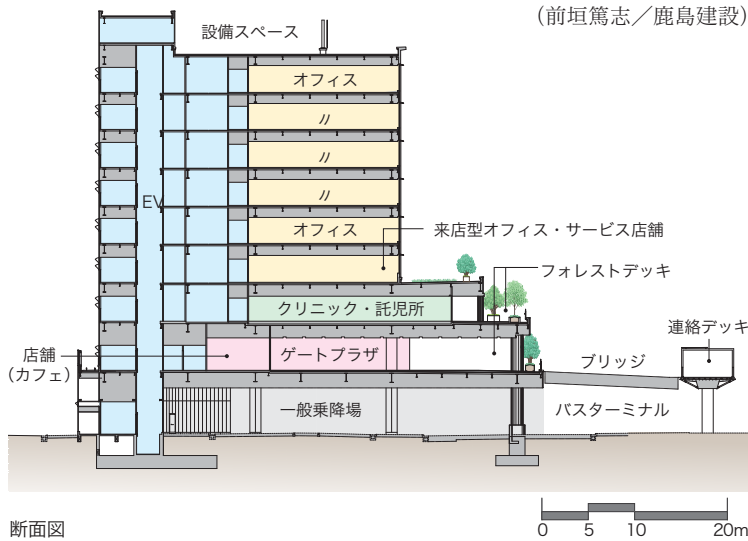
1階は一般車乗降場とバスターミナルからなる交通広場、2階は姫路市連絡デッキと2本のブリッジで接続し、共用空間のフォレストデッキを介して、オフィスエントランス・商業テナントを配した。3階はクリニック・託児所、4階～9階はテナントオフィス階という構成。

姫路駅前広場のコンセプトに相応しい自然あふれる緑・にぎわい空間づくりを目指し、駅前のキャッスルガーデンと一体的に連続する屋上緑化された積層デッキを設けている。市民やオフィスワーカーの憩いの場となると共に、マルシェ等のイベント空間にもなる。

建物配置では、基準階の高層部分を駅前広場からセットバックさせることにより、広がりのある豊かな駅前空間を創出している。

立体的な緑化空間の確保をはじめ、外装は窓面積を抑制し、LOW-E複層ガラス・日射遮蔽水平庇の採用により熱負荷低減を図ると共に、壁面ソーラーパネル、県産木材の活用、全館LED照明等の省エネ設備の採用により、CASBEEのSランクを確保した環境配慮ビルとなっている。

(前垣篤志／鹿島建設)



断面図



南側外観



北側連絡ブリッジ



3階フォレストデッキ



2階フォレストデッキ



スポーツ施設特有の屋根形状が、開放感と求心性を生み出している



エントランスロビーからオフィス入口を臨む



オフィス中央に設えられたリフレッシュコーナー



テニスコートから屋上設備機器置場へ



プールサイドが開放的な動線空間へ(※)

# 京都リサーチパーク アステラス製薬 京都朱雀事業所

建 築 主 大阪ガス都市開発株式会社、アステラス製薬株式会社  
 設計・監理 日建設計  
 施 工 (建築) 大林組、(電気設備) きんでん、  
 (空調設備) 新日本空調、(衛生設備) 須賀工業

ストックの大胆な転用によって生まれる新しい研究環境

京都リサーチパーク (KRP) 地区内の未利用のスポーツ施設を製薬会社の研究所へと大胆にコンバージョンする計画である。与えられた主たる空間は既存ビル最上階に位置する2層吹抜けの体育館、プール、そしてテニスコート仕様の防振床をもつ広大な屋上スペースであった。これらのスポーツ施設特有の空間特性と構造条件を読み解いた機能配置によって制約をメリットに転換し、一般的なオフィス・研究所とは一線を画する新しい研究環境の創出を目指した。

体育館においては1フロア分の上げ床により、適度な空間ボリュームと広大な床下設備スペースを獲得し、研究者が一堂に会する大空間オフィスを実現。一方で省エネにも配慮し、床下スペースと既存の露出ダクトを活用した床吹出空調システムの構築や、LED上下配光のペンダント照明を全般照明とするタスクアンビエント照明の採用等により、快適性と省エネの両立を図った。プールエリアにおいては床荷重条件と床形状を活かしたプレハブユニットによる保管庫エリアを構築。屋上においては約500tもの床シンダーコンクリートを撤去することで床荷重のバランスを維持しながら、研究環境に不可欠な受変電、非常用発電機、熱源、空調機、排気処理設備等の設備機器を集約したフレキシブルな設備スペースを創出した。これらが研究所全体の骨格を構成し、ブリッジでつながれた2棟の建物の最上階において、密接な機能連携と合理的なユーティリティ供給を実現している。

既存概念に捉われない発想によって新しいライフサイクルデザインの在り方を追求している。

(岡田泰典・荒川 寛/日建設計)

|       |                   |       |                           |
|-------|-------------------|-------|---------------------------|
| 所 在 地 | 京都市下京区            | 構造規模  | SRC造一部S造、RC造 地下2階、地上7階    |
| 敷地面積  | 38,417.86㎡        | 工 期   | 2014年4月～2015年6月           |
| 建築面積  | 4,564.46㎡         | 最 寄 駅 | JR山陰本線 丹波口駅               |
| 延床面積  | 36,413.01㎡ (建物全体) | 撮 影   | 東出清彦写真事務所、エスエス (大阪) (※のみ) |



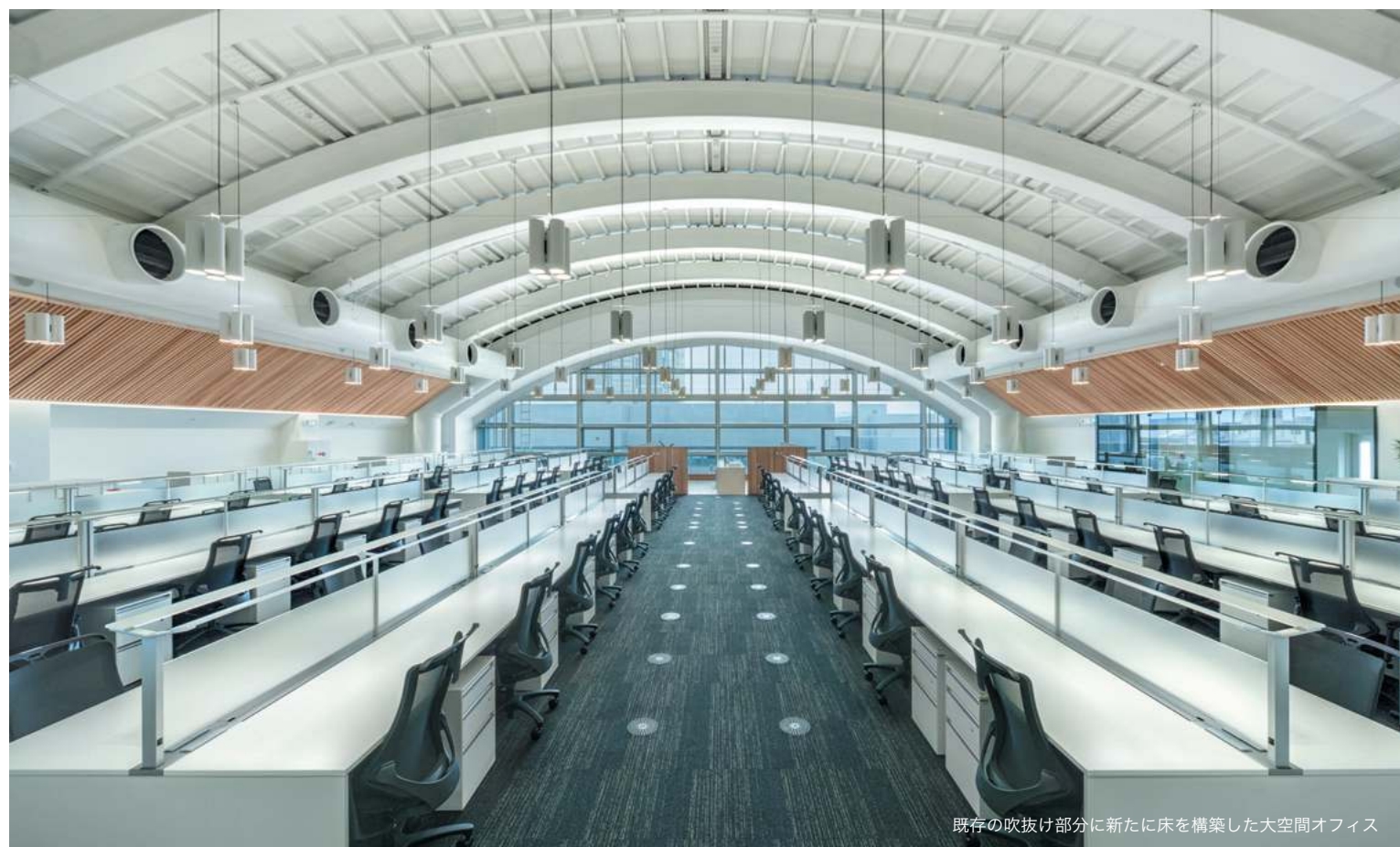
テニスコート仕様の屋上 (改修前)



プール (改修前)



2層吹抜けの体育館 (改修前)



既存の吹抜け部分に新たに床を構築した大空間オフィス



# 勢州楼

建 築 主 株式会社濱田カンパニー  
 設計・監理 清水建設関西事業本部一級建築士事務所  
 施 工 清水建設

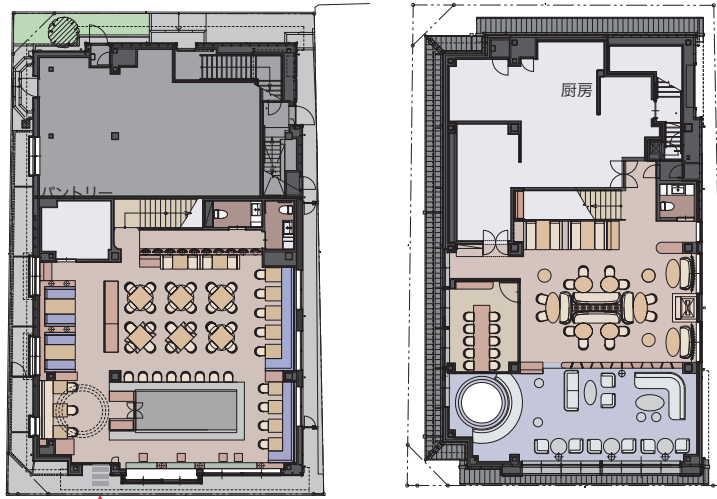
京都の歴史的景観保存修景地区である祇園町南側地区に位置する料飲施設の新築プロジェクトである。

全国的に著名な老舗の和菓子企業のグループ会社が長年夢見てきた京都初出店の飲食店であり、首都圏で幅広いジャンルの飲食店を開発経営している企業と組んで実現した、モダンでオーセンティックな空間と料理を提供する最新のスパニッシュ・イタリアン料理店である。

京都でも最も歴史と伝統を感じ、なおかつ華やかで艶やかな街並みに溶け込む町屋風外観（本二階茶屋様式＋高塀付茶屋様式）を鉄骨造で実現しながら、内部は一転して、京都の格子・御神灯といった伝統的なモチーフを利用したハイカラでモダンなインテリア構成となっている。

（大村昌聡／清水建設）

所 在 地 京都市東山区祇園町南側570-192  
 敷地面積 358.57㎡  
 建築面積 272.98㎡  
 延床面積 684.25㎡  
 構造規模 S造、地下1階、地上3階  
 工 期 2014年2月～9月  
 最 寄 駅 京阪本線 祇園四条  
 撮 影 エスエス（大阪）（左頁下）  
 ナカサアンドパートナーズ（その他）  
 インテリアデザイン SWeeT（代表 佐野岳士）



## いこいの家

設計

野口 志乃



今も江戸時代の「まち割り」を遺す兵庫津西出町の路地裏で、古きよき時代の「造船と商家のまちなみ」を今に伝える地域のいこいの拠点としてこの「西出町自治会館」は完成しました。

白壁と瓦屋根の佇まいや周囲の町家に合わせた建物のボリューム、千本格子を基調とした外観など、路地のスケールや風情を損なわないよう配慮しています。千本格子は、そのすき間から昼は外の陽が優しくこぼれ、夜は路地を暖かな灯が潤す — そんな情緒豊かな空間を演出しています。

寄り合いに、お稽古ごとに、葬祭に・・・今や地域のみなさんはこの下町らしく歴史ある西出町にふさわしい小さな建物を、大切な地域資産としてさまざまに活用しています。居心地の良い空間が、これからも地域のみなさんの「第2の家」としてあり続けるよう願っています。



野口 志乃 (のぐち しの)

1994年 神戸芸術工科大学芸術工学部  
環境デザイン学科 卒業

1995年 有限会社SD 設計室

2003年 北野工作室 開設

企画編集：澤田純一（作品作風小委員会）

## 特集

## 都市の記憶をたどって

この特集は、時間の経過とともに移りゆく生活環境にかかわるそれぞれの「記憶」をたどり、「人間」「都市」「まち」「地域」「建築」「文化」「歴史」……などさまざまな切り口から、建築と社会のこれからのあり方を展望しようとするものです。

例えば、大都市の開発が進む地区では、日頃から馴染み深く愛していた店舗や空間がいつの間にか姿を消しつつあります。地方都市では活気を失った商店街が多くありますが、「昭和のまち」として、多くの人の生活の記憶を呼び起こす注目のまちなどもあります。それらには計画してできない趣きがあります。

誌面の構成の中心をなすのはこれまで「建築と社会」に関わってこられた皆様からの「記憶に根差した投稿記事」と、それらの記事を総括し、これからの「建築と社会」に課せられた課題や夢を語る「座談会」です。

この特集から、現在の読者はもとより、次世代の読者が本特集誌面にふと目を落としたときに、変わってしまったものや変わらずに在るものから、何かを読み取り、これからの建築と社会に思いしていただくことを願っています。

計画系編集幹事 田中直人

## 【座談会】

都市の記憶をたどって：本多友常／松田奈緒子／吉村英祐／米井 寛／田中直人（司会）

## 【投稿記事】

東井嘉信／池上 明／石田潤一郎／稲垣和江／上田正人／梅田善愛／梅村宏尚／加嶋章博／川合隆之／倉渕奈千子／黒柳 亮／小浦久子／酒井雅男／坂本勝比古／澤田純一／設楽貞樹／下坂浩和／鈴木克彦／高木秀晃／田中直人／塚口眞佐子／寺地洋之／寺西興一／豊田充広／野田隆史／藤原光博／ペリー史子／本多友常／増田健一／松田奈緒子／三谷帯介／村上幸三郎／安福賢太郎／山形政昭／吉村英祐／余田尚紀／米井 寛／米山剛史／渡部 剛／五十音順

（記事掲載は順不同）

企画：計画系分科会

飯田 匡／鈴木克彦／田中直人／紅谷昇平／松田奈緒子／三宅次郎／守井 辰／吉村英祐

## 座談会

特集  
都市の記憶をたどって都市の記憶を  
たどって

実施日：平成27年11月2日（月）

場 所：東畑建築事務所  
大阪オフィス

## 本多友常

摂南大学  
教授

☆

## 松田奈緒子

アトリエ805主宰  
帝塚山大学 非常勤講師  
大阪産業大学 非常勤講師

☆

## 吉村英祐

大阪工業大学  
教授

☆

## 米井 寛

東畑建築事務所  
本社オフィス代表

☆

## 田中直人（司会）

島根大学大学院  
特任教授

## 変化する都市で保存・継承するもの

**田中：**今日のテーマは「都市の記憶をたどって」ということです。現在、地方再生とか創生とかいう話があります。地域の活性化や地域の文化、自然や歴史をどう生かすかなど議論されています。都市の中でも変化するもの、失われてしまうもの、その中で大切なものを見つめなおし、保存し、継承することも大切です。この座談会で建築の持っている社会的な意義とか作用をもっと見直すようなきっかけにもなればと思います。

**本多：**「都市の記憶をたどって」ということですが、大切なものがあつたはずだということとでそれを継承していくプラス面と、現在の状態は道を誤ったのではないかというマイナス面の2つが同時存在していると思います。戦後の変化の記憶は、大きく景観が変わった時期、人々の住まいの集まり方にある現象が起こってきた時期、それが少し分離し始めた時期、そして過疎化が見え始めた時期と、15年から20年おきに、ガラッガラッと変わってきています。それは凄まじいものです。私たちは都市であれ地域であれ変わっていくのが必然的だと捉えたうえで、その中で継承すべきものを選び取りつつ、新しい時代に合わせて新たに作り変えていく。そこでは住人や設計者も含めて、建築と社会の間での真剣なやり取りが起こってしかるべきだ。しかし、それが見えてこないところに問題があると思いますね。

**田中：**街に限りませんが、ずっとそこにいると、変化は分かりにくい。あるタームで離れていると、アッ変わったなと気付くことがよくありますね。変化すること自体はじわじわ起きている。かなり急激に変わっているような場合というのは、何か出来事がきつとある

と思うんですね。そこに突然大きな建物が建つ、再開発が進む、大きな災害がくる、相当に交通の状況が変わった、あるいは、大きなニュータウンができるような。都市も建築の作用する力が加わって変ることがあつて、それをずっと見ている人は、あまり変化を感じないかもしれないけれど、しばらく経って来た人は、アッこの街変わったな、ということがあると思うんですね。新しくできて変わるものと、前のものが消えてしまつて変わるものがあると思うんです。今回のテーマは、特に消えていくところに焦点を当てていますが、単に消すのではなくて、継続するとか、継承するとか、発展させるとか、そういうつくり方の建築なども最近はある、これからは、街とか地域全体を捉えなおすことも大切ですね。どういうものに価値を認めて、継続させるか、発展させるかとか、そういう計画とかデザインのあり方がもっと求められるのかなと思います。

**本多：**全体的にみると、私たちがつくり上げてきた生活環境は、経済システムや、技術的な問題などいろいろありますが、基本的には私たちの感性がそこに表されると思った方がいい。どこかの都市や地方に行つて、何らかの特徴があるとすれば、そこに住んでいる人たちの内面的な特徴がきつとあるからそこに生まれている。必然性があるとみています。

**田中：**街は、眺めるような姿ではなくて、生活している人はその中で、普通に暮らしていて、それがそのままの姿で表れて、そしていつしか懐かしい街になる。例えば大分県で、「昭和の町」がありますが、どこにでもあつた町なんですよ。当時は別に取り立てていうことはなかったけれども、そのような町が周辺になくなってくると、価値が出てきて、観

光資源になり、観光の街になる。そういう街の残り方が気になりますね。この間の大阪の地下街の人気店の撤去でも、普通にあつたら誰も話題にしないと思うんですけど、もうなくなるぞ、最後だぞ、という頃になって、みんな急に食べに行ったり、写真を撮ったりしますよね。あれって一体何なのか。鉄道でも



SLが無くなるとなると押しかけるファンがいたり、それまでじゃあどうしていたの？と思う。ノスタルジック的な思いでやっているのか、もっと本質的に大事だから取り上げているのかわからないんですけど。

**吉村：**梅田地下街は古いですけど、大阪花博の時に、柱の周りで売ってた新聞屋さんもなくなりましたよね。海外からお客さんが来るというのが本音ですけど、名目上は防災上の問題でなくしているんですね。市民は反対もするけどすぐに忘れてしまう。忘れるからこそ変われるというのもあると思うんですが、一方そこに人間のエゴみたいなものもあって、星新一さんのショートショートだったと思いますが、世の中からゴキブリを全部駆除しようとなって徹底的に駆除してはっと気づいたら地球でたった一匹になって、絶滅危惧種にしたという、そういうところがあって。あれは何なのかなと、私も思います。単なるノスタルジーではないと思います。効率優先でどんどん綺麗になっていくことに対する、抵抗もああいふ形で表れているかなと思うんです。一方で、街に限らないけれど、伝統は変わらないと生き残っていけないという面もあって、いつまでもずっと古いものにしがみついてもいかんと。そうすると、何を残すべきで、何を变えていくべきかの見極めがないといけない。為政者がやるのが常に正しいとはもちろん限らないので。歌舞伎の世界も変わるからこそ残ってきた。江戸時代の人が今の歌舞伎を見たらびっくりする。街並みも、京都の街並みを保存しようというけれど、あれは幕末に京都はほとんど焼けて、応急プレハブ的に造ったためにわりと軒も揃ってる。それを我々は街並みが綺麗と言うが、焼けた町から応急復興したような街を我々は評価しているんですね。私は、今の文化住宅とか建売住宅も結構いいなと思っているんですよ。ひょっとしたら数十年後、これが最後の建売住宅で登録文化財になるかもしれない。

**田中：**古い建築とか街といっても、できた時は全部サラですね。新鮮なものです。意外と何でもそうですが、京都でいえば、京都タワーができた時に景観論争が起こるくらいにあれは何だという話がありましたが、今、新幹線で帰ってきて、京都タワーが見えると、

帰ってきたなとほっとする。御堂筋の新歌舞伎座は、異質な和風建築ですが、今は、あれがあるからあの街界隈の特徴があるという。建築には斬新なものはデビューした時は賛成する人も少なく受け入れられにくいけど、後から地域の宝物のようにいわれることがあるのではないかな。

**吉村：**京都の三条通りもそうですね。

#### 固有の価値を生かす

**田中：**そうですね。そういう意味で建築というのは、まずは新しいものを目指していて、いつしかそれが定着して、周りにそういうものがなくなってきた時に、突然、価値が出てくるような現象もよくありますね。

米井さん、建築を依頼されて、新しいものを造るという時は、どういうスタンスですか？もちろん条件として予算やクライアントのニーズなどいろいろあるとは思いますが、まとめ方としてはいかがですか。

**米井：**やはりそこが持っている固有のものを生かすということを考えると。例えば再開発をやるときは、まとまりのあるところを更地にして新しいものを建てるのですが、再開発区域にはもともと路地があったり猥雑なものが残っているので、そういう気配を新しい建築の中に生かせられないかと考えて提案したことがあるんです。でもそのときは、「そんなもんいらん」と地権者に言われました。まあそれは、我々のプレゼンが下手だったと思うのですが。せつかく更地にして新しいものを造るんだから、今、求められる新しい価値をそこに挿入したらいいということだったのだと思います。古いものに対するノスタルジーもあるかもしれないけれど、一方でその人たちにとっては、何かネガティブな記憶が残っているかもしれないし、やっとな綺麗になるんだからもうリセットしたい、という思いがあったのかもしれないですね。また、ある地方都市で民家の形態のようなものを参照しながら新しい公共建築を造ることを提案したことがありましたが、これも全然ダメでした。固有の文脈を尊重したいと言っても、そんなものいらんと言われる。設計者は、地域の固有な価値を理解してこれを建築に生かそうという意志を持ちます。しかし、そのことが、そこに暮らしている人のニーズに合っ



本多友常

ているか、設計者の側の片想いになっていないかは、吟味する必要があります。

**田中：**だいぶ前ですが、原広司先生の梅田スカイビルの地下に滝見小路ができて、あれは大阪の昔の、どこにでもありそうな街並みで、そこにテナントとして飲食店を入れた。それだけで人集めに貢献できた企画だと思います。新しく大きなものを建てて開発する中で、一つの昔のアイテムを導入することが受け入れられた提案ですね。周りに緑がいっぱいあったらわざわざ建物の中に緑を入れなくてもいいという話をよく聞くんですけどね。今現状にあるかないかで相対的に価値が出るかどうか。絶滅危惧種のようなになったら価値が出るけれど、いっぱいあったらいい、ということが、建築の分野でも都市の分野でもあるのかなという感じがしますね。

#### 屋台風アレンジ

**田中：**そういえば、昔はどこに行っても屋台は普通にありましたよね。気軽に立ち寄って、飲んで食べて帰れるような手頃だね。今は数が少なくなりました。現在では、あえて屋台風のアレンジで、立ち呑みでやっている飲食店もありますね。こういう屋台風と昔の屋台はどう違うのか、屋台大好きな松田さん、どうでしょう。

**松田：**屋台大好きってことはないんですけど(笑)。最近、そういう屋台的なものが増えてますね。マルシェであったり、お祭りであったり。昔だったら、お祭りに行って、初めて屋台を体験するっていう感じだったんですけど、今はすべてがテキヤ化しているっていうか、普通のお商売の方が、テキヤ化して、ちょっとしたお店を街で開いているという感じがしています。

**田中：**ひょっとして、屋台にひかれた理由

は、屋台の持つ日常性じゃなくて、非日常性にあったんじやないですか。毎日ずっとあつたら飽きてしまうけど、ぱっと屋台が出た瞬間にお祭りだとか、お正月だっていう気分になりますよね。やっぱり記憶ですよ。昔の、親と過ごした時間とか、そこに兄弟がいたり、近所のオッチャンやオバチャンがいたりという、いろんな思い出が重なってくるから、そういう環境に入った瞬間、物に触れた瞬間に、ぱっと記憶がよみがえってくるというような。

**松田：**そうですね。お祭りの、記憶っていうか、家族で歩いた道とかを思い出しますね。

**田中：**街の中には寺社仏閣など、古い歴史的な環境って結構残っていますね。普通の民家は朽ち果ててなくなるか、集合化してマンションになったりしますが。お寺さんとか神社とか、昔は、鎮守の杜もあって地域の人に親しまれていました。残っている歴史的な施設の価値をどうやって生かして街づくりをするか。地域のいろんな人たちの、コミュニティの場として生かしていくとか、方法がありそうなんですけどね。

**本多：**おっしゃるとおりだと思いますね。

**一同：**(笑)

**本多：**話は戻りますが、屋台村で行われていることや昭和の町などは商品化されていて、それぞれが切り取られてきたものが多い。昭和の町がもし仮設ではなくて生活と結びついてつくられていれば、伝統的文化財として指定されたりするわけですが、ちょっと不思議なのは昭和の町が凝縮されていけばいくほど、大正の生活は全部消されていく、また昭和以降の現代の姿が全部消されていく現象が見うけられます。その結果、ある部分を濾過して作り上げていくと、そこに、実は奇妙なセモノが生まれてくる。本物ではない。

**田中：**何たら風というやつですね。

**本多：**屋台村をつくと、最初は面白いんだけど、次にまた変化しないといけない。安定するべきということではありませんが、商業活動に結びついている場合、「新しさ」や「懐かしさ」を越えて「め新しさ」の追及に終始しかねない。

**田中：**先程おっしゃったことで、切り取るという言葉をいただいたんですけど、何でもそうですが、ある特性を持ったものをサンプ

ルにしようとするのと切り取って保存するみたいなことになって、何とか方式、何とか風という固定概念を作ってしまうですよ。例えば、昭和の町というけど、大分県の昭和の町の状態と、関西の昭和の町はきっと違うと思います。何となくアイテム全部をごちゃ混ぜにしてひとつのキャラをつくってしまうということがあるかもしれません。

#### 別の地域の記憶を活用する

**田中：**ひとつ気になるのは、新しく建築を企画したりするときに、例えば、スペイン風とか南欧風とか、イタリア風とか、どこか海外の別の地域のアイテムを持ってきて、それを導入することでいかにもその世界にいるような、仮想空間みたいなものをつくってしまう。一番典型的にやっているのはラスベガス。世界各地のアイテムを持ってきて、しかもイベントというか、物のデザインではなくて事のデザインで、そういうアイデンティティを感じ取らせる仕掛けをつくっていく。そこには、時間軸の過去の記憶じゃなくて、どこか違う、行った場所の記憶を彷彿させることをデザイン化していると感じるんですね。個人の場合は別ですけど。自由になればなるほど、いろんなものがモザイクのようにごちゃごちゃになって存在してる。統一感のない街の風景とか建築が今はあまりにも多すぎますね。

**吉村：**街といっても、生活がある街と、ある閉じた空間の中とは分けた方がいい。ラスベガスなんかは、あれは商業だし。

**田中：**テーマパークですよ。もともと砂漠の街ですから。人工的なそういうアイテムやモチーフが必要だから、寄せ集めてテーマパークのようにつくったと思いますね。

**本多：**新たな文化をつくり上げるという意味からいうと、ラスベガスは一つのパターンをつくったかもしれないけれども、新たな生活に根差したもの、日常生活に根差した空間ではないですね。

#### 衰退する生活空間の記憶

**田中：**もっと日常の身近な、商業的なことでいうと市場がありますね。昔は地域のほとんどの通り沿いの家が一階が店舗で二階に住んでるような、店舗付き住宅でしたよね。店舗付き住宅だからこそ、街の賑わいとかいろんな人の目があって、活気があったと思うんで



松田奈緒子

すが、結構今は、そこはお店だけで、住んでいるところはどこか別の所で、住むことと商売することが分離している。だから当然そこで残っているのは商売する空間であって、生活者の記憶とか地域同士のつながりも、住まい手同士のつながりもほとんどなくなっている。昔のものを大事にして、継続して使っていくとか、守るということは弱くなっているように思いますね。

**本多：**いわゆる中心市街地の衰退というのは全国的になかなか根の深い話で、皆さんがその店から離れて住み始めると、シャッターを閉めざるを得ないことが起こってくる。後継ぎがいらないということでスパイラルダウンしていく構造をはらんでいます。

**田中：**わざわざ商店街で活気のある街を味わうという風景にはあまりならないですね。さっき松田さんがおっしゃったように屋台の魅力みたいなののでいえば、いらっしゃいという声が飛び交ったり、お肉屋さんの横にコロケの揚げたてを売ってるとか、焼き芋を売ってるとか、懐かしい匂いとか、視覚的なそういうアイテムがいっぱい並んでいるんですよ。そこを通るだけでもわくわくしてきて、懐かしく思えるんですけど。今はどこでもあるようなチェーン店、例えばコーヒー屋。昔は地域の喫茶店に地域の人が集まって、昔の写真やいろんなものがあったて、話題もいっぱいあったけど、喫茶店といえば、スタバとかドトールみたいなチェーン店しかないような状態で、コンビニでコーヒーを買うだけだったり、昔とは違ってしまっていて。それは、人の心によみがえるようなものが何もないんじゃないかな、ただモノがあるだけっていう感じがするんですけど。

**松田：**今の子どもたちにとっては、将来イオン

モールが懐かしい場所になるかもしれない。

**米井：**昭和の町並みとか屋台とかそれは文化であるといえると思うんですけど、それを疑似的に体験できる商業施設は文化になりうるか、という疑問はあります。ただ、大型ショッピングモールの設計にも関わるのですが、モールには人々の生活を支えるようなものや場所が用意されていて、ここで、文化を創造することが意図されています。ここを体験した子どもたちの記憶の源泉にもなるわけで、もはや、疑似的商業空間は文化ではないとはいえないかもしれません。

#### 地域の建築をめぐる

**米井：**話は変わりますが、建築好きな一般の人が増えているなあと思います。ちょうどこの辺りで10月31日、11月1日と、「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」（通称：イケフェス）というイベントをやっていて、いろんな歴史的な建築が一般公開されていました。ガイドブックを片手に建築を巡る人がたくさんいたのですが、そういう建築に対する関心は、着実に深まっているのではないかという印象がありますね。

**田中：**そういう身近なところで具体的なものがあれば分かりやすいですね。実際自分の足で歩いて、自分の目で見て、触れて、実感できて、こんな建築いいね、大事にしたいねという共通の情報や知識があれば、もっと話がしやすいですね。

**松田：**私も村野藤吾さんの浪花組本社ビルに行ってきた。見学者は、50代くらいの女性も多くて、質問してる内容も、建築的なことじゃなくて、「ここは組長と呼ばれてたんですか？」とか。どうも視点は違うんですけども、興味を持ってらっしゃる。で、今日、皆さんから寄せられた原稿を見ていると、深く建築に対して、都市に対して、変わるもの変わらないものというテーマがわりと多いなという感じがしたんですけども、果たして一般の人は、何を思っているのかなと。

**田中：**今お聞きしていて、気になったのですが、今回の特集で、原稿をお願いした人は、協会関係者が多いですね。一般の人とは違い、どこか見方が偏っているのかなと自問自答、反省しながら松田さんの話を聞いていました。建築関係者の独りよがりの視点がどこかに働

いているのかどうか、それは一般の人たちには価値がないことで、受け入れがたいことで、気付にくい事かなという気もするんですけど。そんなことはないですか？

**本多：**私たちは「建築」をキーワードとして広がる専門家集団ですが、集団になることで気付かないうちに、視野を狭くしてしまう危険性については、常に自己反省的でなくてはならないことは、言うまでもありませんね。

#### 違う視点からの評価

**田中：**テレビで最近、日本の建築や生活様式などを海外の方がこれが良いとって紹介し、逆に日本の方が「ああ、そうかな」とって見つめなおすようなことがありますよね。思考パターンの逆輸入みたいな感じで。そういうことからすると、今まで気付かなかったことを全然違うポジションの人から指摘されて気付く、見つめなおす、そういうこともあるし、違いを比較するというパターンが目立つなと。例えば「ケンミンショー」みたいな形で、食べ物で「うちではこんなしてる」、「えーそんな」、「意外といいじゃん」、みたいな話でみんなが納得する。独りよがりだと思っている価値観の範疇を超えて比較したり人の意見で動かされるような。そういう視点から地域や伝統的なものも見直すことができるかなと思いますけど。ただ守るだけじゃなくて…。どうでしょう？

**吉村：**伝統の再評価っていうのはだいたい外部の人がすることが多いですね。妻籠は、最初デザインサーベイのグループがやって来て、面白って書いてから、うちの街は価値があるのかなって観光資源になった。大阪の道頓堀も今行ったら外国人がポーズとって写真を撮って、グリコの看板も意識してLEDになって、ムービーになったりして。我々はずっと見てるから別になんてことないんですけど。言い換えるともっと自分たちの地元の資源を、もっとしっかり見つめて自分たちの手で掘り起こして守っていく。そういう意味では「イケフェス」は、大阪っていいじゃないか、東京の後を追いかけることないじゃないか、と大阪を見直すものですね。ちょっと前からブームになってるB級グルメなんかもそう。何でも東京中心、アメリカヨーロッパ中心じゃなくて、それぞれの地域が持っているものを



吉村英祐

見直すと、そこにたまたま懐かしいものも入ってくるんだろうなと。何かで読んだんですけど、絶対その時代のことを知らない小学生が古いものを見て、懐かしいと言うらしいんですよ。そうすると懐かしいっていう感じはどこから出てくるのかということになってくる。

**田中：**遺伝子的に内在してるんですかね。

**吉村：**今の高齢者がいなくなったらもうこれの良さは分からなくなるんじゃないかと心配するのですが、ひょっとしたら若い人が古いものを本能的に遺伝子的に懐かしいと思ってくれるかもしれませんね。

#### 懐かしいからでなく魅力的なものを

**田中：**さっきのいわゆる和の文化というか、和のデザイン、和風というものに対して、海外から来た人が評価するという話がありましたが、全然知らない日本の若者がこれいいね、というふうにも思うことも絶対あると思うんですよ。だから、昔知っていたから、見ていたから、使っていたから、住んでいたから懐かしいんじゃないで、感覚的にそういうものを、懐かしいと感じる心もあるんじゃないですかね。いいものはいいいという。だからそこに目を付けて、どういうものを懐かしいと思うとか。言葉を整理しないといけません、

「懐かしい」をキーワードとして、魅力的な仕掛けを作るといのはありますよね。

**吉村：**駄菓子屋がなかなか減びないとかね、ベーゴマがまたブームになってるとかね。

**田中：**いろんな生活の中のいろんな事物が経験とは別に感覚的に受け入れられる、今の社会に供給されている生活のいろんなアイテムを、もう一度見直すといいことがいっぱい残っているんじゃないかなと思うんですけどね。関西風何とって結構ありますよね。東京に行った時に、関西風お好み焼きとか広島

焼きとか、粉もん文化といったら関西がこれだけでもはやされてるのが嬉しかったですね。建築でありますか？関西風建築とか。

**米井：**関西風ってなんでしょう。こてこて？

**一同：**(笑)

**本多：**私たちが大阪のアイデンティティを考えると、東京との比較によって考えることが多い。しかし、それ自体が既に相対化されたものの見方になっていて、既にメディアを通じて皆が知っていて、新たな発見にはつながりにくい。それぞれに、いろいろならしさとか、そういうものの空気の色合いというか、あるのではないかなと思っています。

### らしさの表現

**田中：**隠れたらしさ？感じ取れないらしさかな？抽象的ですけど大事な話かなと思いますね。「らしさ」というと、アイデンティティというか、自己統一性というか、そういうことを言葉として使いますが、本当に地域に仕掛けていく建築は、どこまでそれができるか。一個の建築でどれだけインパクトがあるかとか、群としてどうかとか。群としてみたら、同じもの、似たものを連ねていけば、街並みとして雰囲気が出ますね。一個の建築として頑張る人が多いと思うけれども、なかなか難しいかなと。今のこの大阪や地域を、具体的ならしさとして、何でもって表現できるのかなと考えると、難しいですね。昔の町を再現するというのもありますけれども、現代的な中でどうつくるかというのは、非常に難しい。

**本多：**再開発で路地をという話がありましたね。路地を提案するというのは、最後のアウトプットであって、実は再開発という仕組みを採用した段階で、新しく生まれてくるものと、路地との相容れない相反関係が最初から組み込まれている、ということがありますよね。路地という形態から発想するとたぶん行き詰るんだろうと思う。設計者はその責任を一身に負わなければならないことになりますよね。その時に、何を周りの人たちが感じているかということを読み取る力が重要なんだろうと思います。その時の要点は、作品という小さな枠を超えて、何が本来あるべき姿かという発想をまとめていく論理性や発想の構築が必要です。

**田中：**もともとの集落でまがった道とか、でこぼこ道や不正形の状態、もちろん歴史があって、いきさつがあって、形ができてると思うんですけど、それをまっすぐ広くしようとか、建築でいうとテナントを入れてお金の計算で、平米いくらでって、算数でやっちゃいますよね。そういうデザインの仕方とはまた違う形で、まとまりをどうつくっていくか、整合性をどうつくっていくのかというところのデザインについて、マスターアーキテクトの面で、全体を見通せるような建築家の職能や技術が挿入されるということが、これからもっと必要なのではないかなと思いますが。その中で、例えば、米井さんがおっしゃったような路地や、ヒューマンスケールでいえば、路地空間の魅力とか楽しさ、広場などが自然発生すると、面白さやおかしさが生まれると思うんですよ。ところが新しくつくる時は、一見それを入れたつもりでも、わざとらしい造作になってしまって、味わいがありませんよね。なぜか知らん。ピカピカすぎてとか。どうしたら昔の路地空間とか広場空間のなりあい、界限性をうまくつくり込めるか。デザインというか方法も大事で、たぶん形だけじゃなくて、そこには、生きざまというか、いろんな行為。商売している声が聞こえてくるとかね、そういうものも含めての話だと思いますけどね。

**吉村：**路地の話でいうと、東京にアメ横センタービルというのがあって、そこは、ごちゃごちゃとした路地のところにビルを建てたんですけども、その中の通路の形を前の路地の、ほぼそのままつくったんですね。もう一つは、上六のハイハイタウン。戦後の闇市があったところを建替えて、下に商業、上に住宅が入ってるんですけども、そこの地下に行くと、たぶん昔の暖簾をそのまま使ってるんですね。そうすると、なじみだった人も、道のパターンはどうでもいいんですよ。この暖簾があるという、そういう…。何を引き継ぐか、本多先生が言われたように、パターンではなくて、記憶に残る何かその一つ、例えば、この店から何を持って行くか、たぶん、お金じゃなくて暖簾だろうと。お金にかえられない価値のあるもの、暖簾というものかもしれないし、人の記憶、それが両方つながると、



米井 寛

どんな形になってもまた…。これは復興の時も大事だと思うんですけど。東北の復興でも。

### 記憶のモニュメント

**田中：**今、震災アイテムを残すか、残さないか、神戸でも中突堤のところを潰れたままにしておいてですけど、ちゃんと直した方がいいという意見もあります。

**吉村：**それをいうと、原爆ドームは残したからこそ、原爆ドームという名前になったし。もとは産業奨励館。丹下健三さんが軸線を通したってことで。あの案がなければ壊されてたかもしれない。

**田中：**やはりそういう意味で、いろんな歴史的な事実を想起させる記憶のモニュメントとしての作り方、デザインの仕方がきつとあると思うんですよ。歴史的なことや、そういうものを大事にするような風土というか、何でもスクラップアンドビルド的な考え方ではない作り方や方法が、もっと求められるかなと思いますよね。

**吉村：**原爆ドームを丹下さんが注目したのは、母親を戦争で亡くされたというのと、ご自身が高校の時に広島にいたこと、第二のふるさとが原爆投下で壊滅したというその記憶が、誰も注目しなかった、丹下さん以外のコンペ案では敷地外では誰も注目しなかったものにね。よそ者ではないんですね。丹下さんは東京の大学に行かれたけれど、広島のことを忘れなかった、我々、じゃあ大阪のことをどれだけ思っているかという、怪しいなと。心斎橋の大丸も壊されると発表してからワーワー騒ぐ。建築学会も保存要望書を出してますけど、実はあのタイミングでは手遅れ。ただ一方で、いろいろ声を上げたので、内部の1階の天井装飾を残すというふうになったのかなと。

## 記憶以前に消える建築

**田中：**最初の方に、絶滅危惧種にならないと騒がないという話をしましたね。昔というか、学生の時に習った建築の寿命は60年とか、結構長かったように記憶してるんですけど。最近市役所の建築なんかでも30年くらいで消えていくものもずいぶんあるし、もっと言うと、すぐなくなるのありますね。特に商業系は、はかないですね。

**吉村：**商業系どころか、東京の超高層ビルなんか数十年でどんどん壊されて。

**田中：**ということは、逆に記憶から消すというよりも、壊してしまう建築。建築じゃなくて破壊ですよ。消去。消去の建築の美学が大事になってくるんじゃないですか。どうやって潰すかとか、潰した後はどうするかという後の話とか。そんな時代がどんどん来て、今、人口は減ってくる。空き家が増えてくる。都市の中にこんなに建物があるかどうかみたいな話になって、伝統的に残してっていう発想が弱いと思うんですけどね。逆に今こそ、そういう価値観をきちんと分別してやる時代がきているんじゃないかなと思うんですけど。

**吉村：**日本の建築基準法自体が一用途一寿命、一敷地一建物というね、戦後の復興、焼け跡から立ち直るというのを前提に作った法律が、今はもう、ストック時代に合っていない。日本人は、移ろいとか、はかない美学というけれど、あれもかなり怪しくて、戦前はむしろ、古い建物を移築したり用途を変えて使い続けてたのに。

**田中：**材木なんかでも使いまわしていますね。石も墓石まで使うくらいのことを、お城でもやっていますよね。残す、残さないという前に、どういうものでつくっていくのかっていう。たくましさというか、まだまだ知恵がいっぱいあるような気がしますね。

**米井：**大阪では、メタボリズムの代表作だったソニータワーがあっけなく潰されてしまいました。設備ユニットが外に出ていて、新陳代謝するはずだったけど、結局一回も取り替えられなまま寿命を終えてしまいました。メタボリズムの理論は商業的な寿命に勝てなかった。

**吉村：**先日、山梨文化会館に行ってきました。シャフトをのぼして、何回も増築していて、免震レトロフィットしていて。ついに容積率

がいっぱいになったので、もうこれ以上は増築できないそうです。オーナーの山梨放送さんが、100年間使い続けるんだということで、日本で100年以上寿命があって、用途が変わっていないのは、中之島の中央図書館などごくわずかです。ほかは100年あっても、用途が変わってる。山梨は50年後ですけど。

**田中：**それはある意味日本的じゃないけど注目する例ですね。

## まちの匂い

**松田：**先程から先生方の話に聞き入ってしまっ…。懐かしい感覚っていうので、包まれるってことをおっしゃっていて、確かにそれで、匂いが一番懐かしいって感じる瞬間で、夕方ぐらいに匂ってくる、ご飯の匂いは懐かしい。夕餉の匂いで子どもに返る。パリに一時留学していたんですけど、しばらくしてパリに戻った時に、ちょっとすえた匂いですが、懐かしいと感じたり。あと、光の射し具合とか、空気感って、懐かしいって感じる。

**本多：**最近の都市は、やっぱり匂いが消されていってますよね。衛生管理とかそういうこともあるのかもしれないし。タバコですら…。

**米井：**テレビとか映像とかの技術がいかに発達しても、やっぱり匂いは伝わらない。神戸の震災の時に被災地に行ったら、ほこり臭さが鼻に残ったし、東北の被災地では海水に浸された後の臭いが記憶に残っています。

**田中：**街の匂いは、今もきつく残っている地域もありますけど。臭覚を刺激するのは、街の匂いだけではなくて、自然の香りもあります。季節感とか、環境要素を呼び起こすようなことがありますね。記憶は匂いだけではなく、生活の音であるとか、そこで食べた味であるとか、さまざまな、五感を刺激するものからよみがえって、つながりますね。

はい、それでは、そろそろ、本日のまとめとして一言ずつお願いできますか。

## まとめ

**松田：**海外に行くと、旧市街地と新市街地は、はっきりとわかれていて、中世の街並みは、観光地化していて、新市街地の方は、ほとんど発展していてっていう感じで。小田原も駅の周辺は新市街地というかつまらなくて、ちょっと自転車です足を延ばすと旧市街地があって、そこにはお豆腐屋さんがあって、い



田中直人

い感じで、そこで買い物したり。新旧の違いを割り切っちゃってつくっちゃうみたいなやり方もあるなという感じがしました。

**米井：**都市や環境に関わる設計者の気構えとして、建築は設計者のものではない、私の形をつくるのではなくて、それを成り立たせる多岐にわたる条件を考えながら回答していくことで、人々の記憶に残る風景をつくることができればいいと思います。公共建築か民間建築かという区分ではなくて、公共財としての建築のあり方を考え続けなくてはいいですね。

**吉村：**都市の記憶は色々あると思いますけれども、いろんな歴史が、常に層がある。多様性という言い方もできるかもしれない。社会もそうで、特定の世代だけがいる街じゃなくて、子どもからお年寄りまでいる街のいろんなものが、それを一斉に壊すのではなくて、上手に活かしながら使っていく。東京のように何でもどんどん再開発という手法もありますけれども、それとは違う街の魅力の出し方を大阪はできないかな。

**本多：**建築に関わっている人間が肝に銘じておかないといけないことは、背景をつくっているということですね。生活の背景を支えているという、自負心を持って、やっていくということだろうと思いますね。懐かしいと思えるようなものは、物体ではないという、モノユメントではないということだと思いますね。

**田中：**今日の座談会は難しいテーマでしたがこれからの都市や建築のあり方にむけて示唆に富んだご発言をいただきました。激動の時代であればこそ、人々の心に、記憶に、残ることも大切ですね。来る50年、100年先の街がどのような姿になっているか、楽しみですですが、これからの都市や建築の果たす役割も大きいと思います。ありがとうございました。

## ■都市への記憶—その遍歴と体験を顧みて—

自らは永年の人生のなかで多くの都市を遍歴し、その記憶を辿ると感慨深いものがある。小生は中国の青島で生まれ、上海で育ち、東京の山の手に住んで、昭和17年東京の初空襲を体験したことがあった。戦後は外地から引き揚げ、神戸に住み、学んで今日に至っている。

青島は19世紀の終りドイツが租借して、ドイツ人好みの石造りの重厚な建物が赤瓦の屋根や緑に映えて、美しい表情をもつ都市であった。上海では黄浦江沿いのバンドの建築群が、幼い頃の記憶と全く変わらずに今も残っていることは喜ばしい。

小生は神戸に住んで昭和30年代、戦後の高度経済成長期に山手の異人館が次々と姿を消すことに危機感を覚え、その保存に取り組むことがあった。これは幸いなことに多くの学者、市民、神戸市、文化庁など行政機関の協力を得て、伝建地区の指定にまで至ったことは感謝にたえない。またもう一つ都市の記憶を呼び起こすすべとして、近代都市神戸発展の原点となった旧外国人居留地について、その復原模型を制作する機会に恵まれた。これは旧居留地内に現存する横浜正金銀行神戸支店（昭和



海から見た青島の景観（1940年頃） 写真画集 遠藤一二 光陽社

## ■思い出せない町

「都市計画」という言葉がボンと出てくる詩がある。

黒田三郎「帰郷」——「眠っている記憶をゆり覚ますものは何か／新しい都市計画で／ひろびろとつくり直された町並／見なれない道や見なれない建物／見覚えのあるものは何もない」。その後半はこうだ。

それはもう十数年の昔／戦い敗れた故国へ僕は復員船で帰って来た／故郷はただ雑草のおい繁る一面の焼跡であった／焼け落ちた町のなかに／道だけが昔ながらに残っていると／〔中略〕／それから十数年 その道も今はない／妻や子と明るく笑いながら／他人の目で僕は見る／整然と並んだ竜舌蘭やまばらな人影を

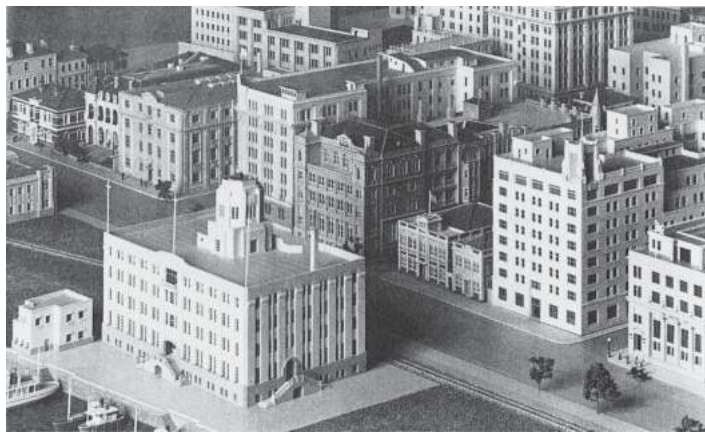
記憶のなかの風景が一変してしまうと、自分の記憶が信じられなくなり、さらには自分の存在自体が頼りなくなる。「あの時いた自分」と「今ここにいる自分」とが、ぶつたりと切断された感覚。それを黒田は端的に「他人の目で見ると」書きつけた。

黒田が帰った町と同じ町——鹿児島市を40年ぶりに再訪した向田邦子は

10年、桜井小太郎設計）を再生活用する手法として、市立博物館へ転用することとなり、その展示の一つに旧居留地の町並み復原模型の制作が企画されたからであった。神戸居留地は長崎、横浜より遅れて開港したため、わが国で初めて、西欧的な発想による都市計画がたてられ、整った町並みは、内外の建築家の参加があつて、明治、大正、昭和戦前期における魅力的な都市景観を形成することに成功したといえる。また、現存する近代建築も少なくない。

模型は縮尺200分の1で、それはあくまで模型にすぎないと思われるであろうが、多くの協力者を得て、精緻な出来栄であり、群として構成されると、丁度上空から俯瞰するように見えて、それなりの迫力、都市空間を感じさせるものがある。都市は時代と共に変貌する宿命を荷っているが、歴史的都市の魅力は、時代と共に高まることも事実であり、都市への記憶は、多くの人々の心に宿って、いつまでも語り継がれていくものであろうことを信じたいと思う。

（坂本勝比古／神戸芸術工科大学名誉教授）



神戸旧外国人居留地模型 海岸通り周辺を見る（1940年頃）  
監修 坂本勝比古 神戸市立博物館蔵

こう書いた。「変わらないのは、ただひとつ、桜島だけであつた。／形も、色も、大きさも、右肩から吐く煙まで昔のままである。／なつかしいような、かなしいような、おかしいような、奇妙なものがこみあげてきた」。——ここでは、町の変貌を帳消しにして君臨する強烈な風土が、記憶を支えている。

鹿児島市は私の故郷でもある。黒田の索然たる思いも、向田の胸苦しい感情も、ともに理解できる。火山、海、空、シラス台地、それを覆う照葉樹林。それらは18才の自分が見た風景と変わらない。黒田が慨嘆した、だっ広い街路のD/Hも私にとっては原風景だ。しかし、鹿児島でさえ、5年前を思い出せない風景がほとんどだ。より風土性の希薄な場所は、みるみる昨日の手がかりが消えている。駅前で。国道沿いで。「他人の目」でしか振り返られない町ができていく。

（石田潤一郎／京都工芸繊維大学）

## ■路地の消失／コンビナート

### 路地の消失

私が幼少期を過ごした家は、狭い路地の奥にあった。岡山県倉敷市の旧市街に小学校2年生まで住み、その後は郊外に引っ越したのだが、その家は車1台が通れるほどの道と幅1mあまりの路地とで車道につながっていた。私の日々の通る道はもっぱら路地の方だった。

再開発を免れその路地はその後何年もそのままであったが、数年前訪ねてみると、路地の両側の建物の多くが取り壊されて駐車場になっていた。幅1mあまりの「道」は昔のままなのにこれはもう「路地」ではない。路地を路地たらしめるものは、道幅の狭さではなく、その両側に建つ建物であるということを今更ながら思い知るとともに、幼少期の風景が消えてしまったことに大きな喪失感を覚えたものである。

その路地には様々な家が建ち様々な人の生活が滲み出ている。隣には洋服の仕立て屋があり、仕立て屋のおっちゃんは窓越しに私たちとしゃべりながら裁断や縫製の仕事をしていた。おっちゃんにもらったチャコでブロック塀に落書きした。向かいにはペンキで看板を描く職人が住んでいて、その家のまわりはいつもペンキの匂いがしていた。その職人が幼稚園にもっていく弁当箱に筆で名前を書いてくれた。少し離れたところには夕方になると2階の物干しでラッパの練習をする兄ちゃんがいた。エアガンを趣味にする男もいて、ある日うちの庭に雀が落ちて来たと思ったら、その男が撃ったものだった。體えた匂いのする木造アパートにあるとき同世代の男の子が引っ越してきて、夕方になるとよくうちに遊びにきた。しかしなぜかその子は学校には通っていない。どうして行かないのかと聞くとその子は黙ってしまった。

路地では身を寄せ合うように家が建ち、様々な物音や匂いが満ち、人と人との距離が近かった。濃密なコミュニティがあった。しかし今も残る何軒かの家からは何の物音も聞こえてこなかった。あたりはしんと静まっていた。路地の消失とともにコミュニティも消失したということだろうか。

### コンビナート

岡山県水島コンビナート。私が高校生までを過ごした倉敷市にある。日本の高度成長期に、そのコンビナートは風光明媚な漁村に忽然と生まれた。幼い頃親によく連れていってもらったコンビナートの見える場所を久しぶりに訪ねてみた。当時そこから海を埋め立て次第に工場が建っていく様子を眺めたのだが、やがて煙突が林立しパイプが錯綜する石油化学コンビナートが稼動し始めた。その景観は繁栄であり未来であった。なかには火を噴く煙突もあり、それはほれほれするほどかっこよかった。

しかし、やがて周辺の集落で喘息患者が発生し始め、私の住んでいるあたりにも南風に乗って光化学スモッグが到達するようになった。コンビナートは公害の元凶といわれるようになり、さらにその後、「重厚長大産業」が軽んじられる時代を迎えて、コンビナートはますます肩身の狭い存在になっていった。

高度成長期に育った私たちの世代は、自分の成長と国の繁栄とが分かちがたい関係にあるという肌感覚をもっていたように思う。しかし、国の繁栄の象徴であったコンビナートを自分の成長の先を示すものであるかのように眺めていたものの、それは繁栄と同時に災厄をもたらすものであるということを知ったのは思春期の頃だった。国のリニアな繁栄への道が頓挫したごとく、思春期の自分は将来に疑いをもたなかった幼年期の無邪気を失っていった。

今改めて眺めるコンビナートは、50年の年月を経て再びかっこよく映った。それは、成長し繁栄しようとする意思を生々しく表出している様相であるように思われた。同時にそれは、未来を疑わない幼年期の自分の眼差しを思い起こさせるものでもあった。

(米井 寛／東畑建築事務所)



路地の今 (2015年9月) 撮影：米井 寛



水島コンビナート (2015年9月) 撮影：米井 寛

## ■“記憶の総体”としての都市

海に面した2つの街で育ってきた。子供の頃、自分の部屋の窓を開けると住宅地の向こうに瀬戸内海が広がっていた。神戸に移り住んでからは、もう少し大きな街の向こうに、やはり瀬戸内海が広がっていた。

あの頃から、どちらの街もその中の建物は少しずつだが変わった。風景の中には高層ビルが建って見えなくなった部分もある。実際にその変化した場所に行くと、雰囲気が変わって以前の姿を思い出せないこともある。しかし大きく眺めると、そこには変わらずその街を認識させる全体像があって、背景には穏やかな海と島々、対岸の山並みが広がっている。視覚だけではない。遠くから聞こえる船の汽笛、電車の音、街のざわめき、ふいに風が運ぶ海の香り…。当時と変わらないそれらは五感を通じて、風景の中にあの頃の自分を見るような錯覚を与えたり、一瞬にして当時の感覚を呼び起こして胸を締め付ける。次の角を曲がれば、昔の自分に

戻って歩いていてもおかしくないと思わせる。

—私は「今、ここにいる」かもしれないが、

同時に、あの場所にも、そしてあの頃にもいる—

都市が変化しているのに、なぜそのような認識が可能か。それは、都市には全体のスケールがあり、その視点で見ればゆっくりした速度で移り変わっているからだろう。部分的に不連続な変化が起きても、背景や音・光・風たちは未だ変わることなく、不連続を連続の中につなぎこんでいく。シームレスにつながるミクロとマクロの視座・現在と過去が交錯し、そうした埋め込まれた記憶たちの総体が「私にとっての都市」なのだろう。それは物理的なものでなく、現象としての、とても私的な、しかし確実に未来へと紡がれていく都市のありかたなのだと思う。

(三谷帯介／KAJIMA DESIGN)



(Takamatsu, 2008) 撮影：三谷帯介



(Kobe, 2009) 撮影：三谷帯介

## ■橋の上の長椅子

奈良県のほぼ中央に田原本という町があります。町を南北に貫く通り沿いは、西側には酒屋や菓子屋などの商いを営む町屋が並び、東側には小さい水路を専用の橋で渡る古くからの屋敷が並んでいて、このうちの一つが母の実家でした。

子供のころ、この町の雰囲気が好きでよく遊びに連れて行ってもらいました。夏の夕方になると、家々の橋に長椅子が出されて、夕涼みをしながら近所の人々とおしゃべりを楽しむ、のんびりとしたコミュニケーションの場となりました。祇園まつりという町をあげて行われる夏祭りのときには、次から次へと通りを行く神輿行列の恰好の観覧席となります。この町には、古くから残る町並みだけでなく、職住一体の商店が多く、近所の老人も皆小さいころからの知り合い同士で、コミュニティの歴史を感じさせる居心地の良さがありました。

その頃私が住んでいた町は、おそらく、私が生まれる少し前の昭和30年代後半ごろから徐々に住宅地として広がってきた場所でした。近所のコミュニティも比較的希薄でしたので、そのような世代を超えた人と人とのつながりが感じられる町に憧れていたことを思い出します。

その後、母の実家の周辺では昭和50年代の中ごろから一気に水路が暗渠化され、また代々商いを営んできた商店が廃業し始め、古くからの町並みの多くが失われました。同時に、世代を超えたコミュニティの中での居心地の良さも消えていきました。

昭和の時代は、古くから積み重ねられてきたものの価値を感じながらも、ある種の物質的な豊かさに向けて皆が一心不乱に進んだ時代だったと思います。今、そのような豊かさをベースに、幾度の大きな災害を経て、ようやく成熟した価値観をもつ時代に入ってきたのではないかと感じます。

例えば若者の車離れは、経済などのマイナス面としてとらえるだけではなく、車重視で拡張された道路をコミュニティ道路に換えていくなど、むしろ、まちに本来必要な余白を生み出す社会背景としてプラスにとらえたいと思います。

私自身も、かつて子供のころに体験した「橋の上の長椅子」のような、人と人との出会いが自然に生まれるまちの中の余白づくりを、建築設計を通して目指していきたいと思います。

(高木秀晃／昭和設計)



旧国立国際美術館内観（2002年11月）撮影：河合止揚

## ■旧国立国際美術館のこと

70年大阪万国博美術館を引継ぎ開館した、川崎清氏設計の国立国際美術館が大好きでした。一見不可解な現代美術が何を伝えたいのか知りたくて、何度も足を運んだものです。美術館としては交通の便から不利だったのでしょうか、来訪者が少なくそのおかげで、フロアにたった一人で現代美術に向き合える幸福感を味わえました。自然光を調整する階段状のガラスルーバーも斬新でしたし、監視の人は今のような厳しさはなくおらかで、ゆったりした空気がありました。作品のエネルギーが濃く詰まっている展示室から1階に出ると、ピンポイントで支えられたガラス壁面のホールが迎えてくれ、その向うには、万博公園の広大な森が広がります。この広い森と空がなんとも気持ち良く、帰路モノレールの駅まで樹々を見上げながら歩くうちに、不可解に思えた作品のメッセージがストンと身体の中に落ちてくる感じがしたものです。館が閉じる最終日、閉館時間を過ぎても沢山の人が建物の回りを取り囲み、明かりが消えるのを寒い中見守っていたのは、とても素敵なことでした。せめて跡地を他の館と同じように森にしてもらえれば良かったのに、と思います。時折モノレールから万博公園の森をみると、その中であつた美術館のことを思い出します。

（倉渕奈千子／田中啓文総合建築研究所）

旧国立国際美術館外観（2002年11月）撮影：河合止揚

## ■メッセージを感じた建築

70年万博はメタボリズム建築、大国のパビリオン、太陽の塔など、建築展の様相を呈していたが、高校生だった私にはその多くが鉄とコンクリートの無機質な塊にも見えた。その中で唯一、強い衝撃を受けた建物はイタリア工業館というとても小さなパビリオンだった。イタリア政府館の脇にボツンと建っており、入場者も少なかったように思う。建築の詳細はまったく覚えていないが、それまで経験したことない未来的で夢のある空間だと強く感じたことが記憶に残っている。館の入口にこの建物はイタリア国内のコンペで若い建築家の案が採用された旨が記されており、妙に納得したことも覚えている。

それから約20年経ち、関西国際空港のコンペで最優秀案に選ばれたレンゾピアノのインタビュー記事を読み、イタリア工業館が若き日のピアノの作品だったことを知った。

その後、縁があつたのかピアノの日本事務所に勤め関西国際空港の設計監理に携わることになり、ピアノの建築は常にメッセージを発信しているように感じた。

多くの建築は作られた時代の中で存在するものであり、永遠性があるとは思わないが、このような経験から建築設計という行為を通して少なくとも次の世代の方に何かのメッセージを伝えたいと思う。

（池上 明／エーアイ アーキテクト スタジオ）



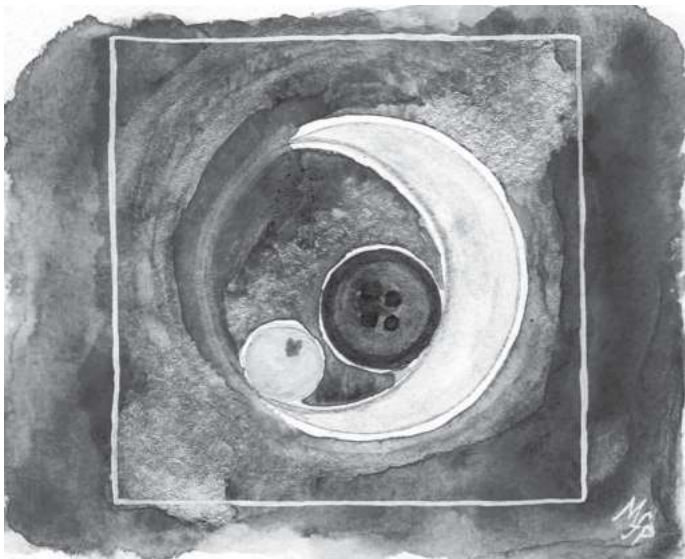
## ■ボタン、窓、そしてお月様

入り口は狭く、奥に深く、両側の壁一面にボタンの引き出し。今でいうところのホームクチュリエの母と服を作る都度通っていた釦専門店である。その種類と量に圧倒されつつ、一つ一つのボタンが活躍する出番を待っている、そんな雰囲気になんかワクワクしてしまった。同様の細長い空間に、大樋焼のお店もある。こちらはその空間の中で、お抹茶碗がここに一つ、あちらに一つと数個しか置かれておらず、一つのお茶碗がその周囲に静かに話しかけているような感じがした。どちらもスタッフは一人か二人。大き過ぎず、狭過ぎず、目の届く範囲におさまる、ちょうど居心地の良いヒューマンスケールの空間である。

また、窓は私にとってとても大事で、窓からの景色がないとがっかりしてしまう。家に戻って第一にすることはとりあえず窓のカーテンを開けてみる。見あげた向こうに大きな樹のある窓、庭が見える窓。生活の様子が見える窓。窓の外の風景が記憶に残ることもあれば、窓そのものであることもある。

これらは場所に繋がる思い出の背景であるが、一方で、これらからは少し異なる捉え方で思い出の背景になるもの、場所ではない場合もある。

大きい満月、オレンジの月、青い月、白い月、細い三日月、半月、傘をかぶった月、雲のかかった月。どこにいても見える月は何となく私に話しかけ、心を落ち着かせてくれる。そして、遠くに離れている人とも、今夜は満月だよ、と同じ風景を共有でき、繋がりを感ずることもできる。



(MFP/作)

思い出の背景に見え隠れするものには、身体のスケールを通して感じとり記憶に残っていく風景と共に、具体的にどの思い出にというわけではないが、感覚的に何かを思い起こさせるものもあるのだと思う。そして、私達の環境や都市を考えていく時、これら双方を大事に受け継いでいくことが重要なのではないだろうか。

(ペリー史子／大阪産業大学)

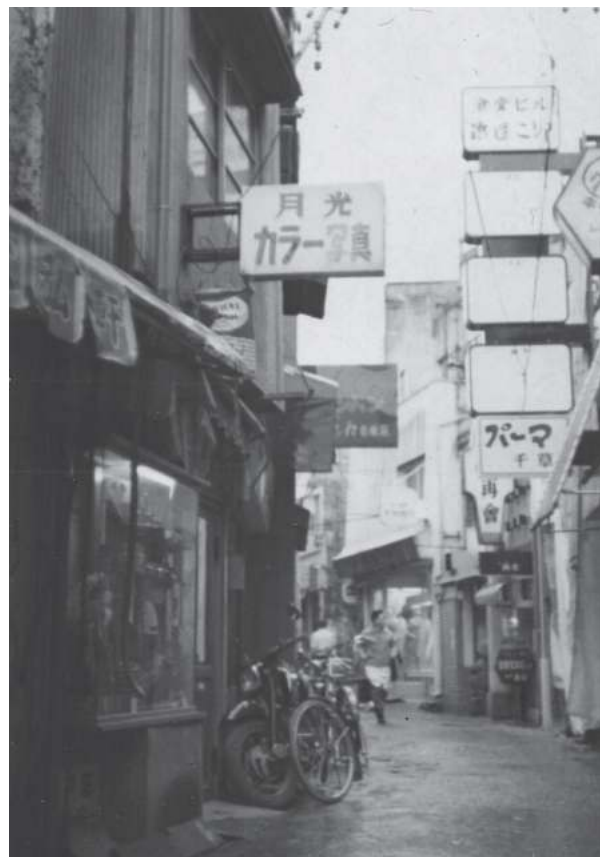
## ■父のカメラ店と千林の記憶

私が生まれたのは昭和38年、大阪市旭区千林。ご案内の通り大阪でも有数の商店街のある町で、父はここでカメラ屋を営んでいた。その頃の千林には昔の町並みが残っており、そんな町を一人歩くのが好きなケッタイナ子供だった。長じて、収集した昭和レトロ家電の展覧会や出版、またお話をさせていただく機会がふえた今、この町で子供の頃を過ごしたことが無形の財産になっているのだと思う。

…食堂百貨「美乃幸」の緑色のクリームソーダは、ちょっとヨソ行きの飲みもの。「井野屋」の店先でしゃべっていた関敬六さん。「ミドー楽器店」へキャンペーンに来た城卓也さん。鮮魚店「伊勢屋」の安いでえ～安いでえ～と威勢のいい掛け声。「公設市場」の惣菜屋はフルーツサラダにいつもサクランボをのせてくれた。「鯨のデパート」という名の鯨肉店、なぜ大丸や松坂屋でもないのにデパートいうのか不思議だった。そういえば先ほどの井野屋も「クレジットデパート井野屋」というテレビCMを見たことがある。この頃はデパートとか百貨とか付けるのが流行りだったようだ。「ポンプパリエンヌ」という洒落た名前のパン屋ができた。トングで好きなパンをトレーにのせる初めて見た買い方。ここに入るとなぜかお金持ちになった気がした。

さて、父のカメラ屋は店じまいの後、他人に貸していたが、なにぶん一坪半の店、建て替えたなら便所しかできないらしく持て余していた。昨年、お隣さんが改装するのを機に売った。よくこんな狭い店だけで私を育ててくれたもんだと、今ごろになってその大変さを思う。そして今も昭和レトロ家電の活動では、あの頃の千林の町の風景に助けてもらっている。

(増田健一／大阪市立住まいのミュージアム 特別研究員)



父のカメラ店と千林新道商店街の町並み（1969年／昭和44）撮影：増田幸治

## ■田舎の商店街の思い出

1970年生まれ、富山市の東の端の田舎町で育ちました。

実家は小さな商店街の中にあり、木造2階建て長屋の1階が店舗という造りでした。肉屋、天ぷら屋、布団屋、床屋、電気店、スーパーなど、個人経営の店舗が集まり、それなりににぎわっていました。

家は酒の小売店で、家の中にお客さんを上げて酒と簡単なおつまみをだしていました。雨で仕事のない大工さん（北陸は雨が多い）、隠居したお年寄りなどが集まり、NHKの大相撲を酒の肴に昼過ぎから夕方まで飲んでいました。夜7時になるとそれはお開きになり、同じ居間で我が家の夕食となりました。

店先ではコップ酒をだしており、朝出勤前の職人さんが、焼酎をストレートで一気に飲み干してでかけるなどされていました。夏休みは私もコップ酒をついだりして店を手伝いました。でもお客さんの話し相手には私は物足りないらしく、いつものばあさんがいい、若い子はつまらん、といわれ相手にされませんでした。

町は海に近く、朝は近くの港であがった魚をリヤカーで売りに来ており、イカの刺身は朝ごはんの定番でした。あまり手の込んだ料理というのは食べてなくて、ごはんのみそ汁、魚と野菜の煮物というのが普段の食事でした。

母の実家もその商店街の端にあり、印刷屋でした。活字を並べる職人さんが5～6人いて、いつも細かい作業をしていました。時々紙を折る作業など手伝いました。今は廃業しています。

今は商店街のほとんどは廃業され、若い人は少なく、お年寄が多い町になりました。買い物できる所がどんどん減っていき、脚の悪いお年寄りは大変なようです。私が通っていた幼稚園は廃園になり、その向かいの保育園は、昔は子供が沢山いたのが今は一学年10人以下となり、待機児童の問題は都会の話なんだなあと知りました。

人の生活は変わっていきませんが、変わらないのは家の横の川面に望む立山連峰です。いつも青くすっきりした姿を見せています。

（稲垣和江／イナガキケンチクケンキュウショ）

## ■私と夕陽丘

40年ほど前、夕陽丘にある母校の辺りから、沈む夕陽をよく眺めた。と言っても、青春ドラマやスポ根アニメのようなシチュエーションではなく、勉強疲れの哀愁まじりで、という感じだった気がする。

夕陽丘は母校の校歌にも出てくるが、その頃は地名の由来も知らなかった。駅名表示が『四天王寺前（夕陽ヶ丘）』となっている理由も知らず、車内アナウンスの『してんのうじまえゆうひがおか』がやけに長いなあと感じていたぐらいである。

社会人になり、仕事でふたたび夕陽丘に関わることになった。夕陽丘を訪れる機会が多くなり、地名の由来も知ることができたが、その歴史はまだ奥が深そうだ。

今では高いビルが増え、以前と比べて視界が狭くなっているが、もちろん、その向こうにあの頃と同じ夕陽が沈んでいくはずである。

（梅村宏尚／大阪市都市整備局）

## ■変わるもの、変わらないもの

生まれ育ったまちを今見渡すと、記憶の中にある子供の頃のまちの姿と比べ、その変わり様にあらためて驚きます。私が生まれ育ったまちは、阪神・淡路大震災で大きな被害を受けました。その後の20年でまちの様子は一変しました。古くからの住宅地は大きな商業施設や防災公園へと、小さいながら賑やかだった市場はマンションへと様変わりしました。コンビニのように、かつてはほとんど見かけなかったが、今ではまちのあちこちでごく自然な風景として存在しているものもあります。

まちは確実に変化し続けています。しかし、その要因は様々です。大規模な自然災害による変化があれば、都市計画のように誘導や規制により変化していく場合もあります。災害や都市計画とは無関係に、市場原理のもと、古い建物が全く別の用途の建物に建て替えられているケースも多々あります。もし、あの大震災がなければ、このまちは今頃どうなっていたのだろうと、時々考えます。震災がなくても20年という歳月は、やはりまちの姿を大きく変えていたのだろうと。

一方、ずっと変わらないものもあります。例えば私の実家の近くにある神社は昔から変わりません。本殿も参道もその脇にある昔よく遊んだ公園も、あるいはそれらを取り囲む木々の緑も昔のままです。正月の賑やかな参拝風景も変わることなくずっと繰り返されています。そうした場所にいと、やはり懐かしく感じます。まちには変わらない部分も必要だと思います。この想いこそが、変わり続けるまちで生まれ育った者にとっての「ふるさと」なのかもしれません。

人々の暮らしやニーズが時代と共に変化していく限り、まちは今後も変わり続けるでしょう。もちろん、便利で暮らしやすく変わっていくことは良いことです。しかし、いつまでも変わらない部分もあってほしいとも思います。大事な思い出や人と人のつながりを感じることができる空間、世代を超えて共有できる空間は、かけがえのない大切なものだと、今「ふるさと」を見渡しあらためて感じます。

（澤田純一／兵庫県県土整備部）



母校の隣の神社から（2015年）撮影：梅村宏尚

## ■イビラプエラ公園の“大屋根”

イビラプエラ公園はブラジルのサンパウロの都市の中にあり、その公園の中にコンクリートの柱とコンクリートの大きな屋根がかかった建築物（“大屋根”）があります。

設計者は、オスカー・ニーマイヤー氏です。イビラプエラ公園内にはオスカー・ニーマイヤー氏の建築物が何棟ありますが、私の中で、この“大屋根”は、「建築と周辺環境」、「建築と人」との関わり方を考えさせられた建築となりました。

この“大屋根”は、あらゆる人を包みこみ、人々がくつろぎ楽しみ、人々の憩いの場となっています。また、“大屋根”は有機的にカーブしながら周りの建築群を繋ぐと共に、屋根の高さを変えながら、周りの自然（緑等）との調和を図っている印象を受けました。この大きくのびやかに広がる“大屋根”は、建築としてのスケールの大きさを感じると共に、人・周辺環境を受け入れている建築としての「寛大さ」を感じました。“大屋根”の柱は比較的大スパンになっており、伸びやかな空間になっています。また、柱は単なる柱ではなく、人が柱に寄り添い、休憩するような家具的なツールになっており、空間の多様性を感じる事ができます。この“大屋根”での人々のアクティビティを見ると、オフィス・商業施設・美術館等では感じる事ができない、「人との距離が近い建築」と感じました。

未来への展望ですが、できる事なら補修等を行いながら、この建築がより続ける事を望みますが、将来、取り壊し等が行われるかもしれません。もし、取り壊し後に建築物が建つのであれば、現在の“大屋根”の概念と空間を継承して欲しいと個人的には思います。人々・周辺環境を受け入れて、かつ、建築物としてのスケールを感じる事ができる建築物だと個人的には思いますので。

（余田尚紀／大林組）



大屋根の屋根下部分（2014年）撮影：余田尚紀

## ■心に相對する街

若いころから旅好きであった私には、強烈に記憶に残っている街が幾つかある。これらの街の何が私を魅了するのだろうかと思案に焼き付いている風景を改めて丁寧に思い起こしてみると、或る共通点に気づく。印象の強い「街の記憶」とは、生の記憶そのもののなのである。その時隣にいた恋人や友人との会話、食べたパスタの味、風の温度、それら全てと

共に記憶されていて、しかもどうやら頭ではなく心に刻まれているもののように感じる。又不思議なことに、そうして記憶に刻まれた街にはその後何度も訪れる事が多い。そして他の街では気にならない程の小さな変化や、あれ？と思うほどの大きな変化、何一つ変わっていない風景が混在する中で、記憶と現状を織り重ね、街の時間軸を記憶の中で共有する事で更に愛着が増すのかもしれない。やや情緒的ではあるが、これこそが「街の記憶」の本質なのだと私は思う。とすると、風景や建築物が強烈なインプレッションを持っているのではなく、訪れる人そのもののエモーションが風景を「詩」に変え、そして人々の詩が共鳴する場所が「街」となり、生き物のように変化し続けるのではないだろうか。私自身はなぜか一番に長崎の街が思い浮かぶ。坂道、船、風吹く丘、流れる雲、麺の味、大切な人……。それらが重なり合った私の個人的な風景の記憶と、長崎という街の持つ歴史的記憶とが心地よく共鳴して、私の心に響いている。先日友人が長崎に小さなカフェをオープンしたので、近々旋律の変化を味わいに行きたいと思う。

（黒柳 亮／竹中工務店）



長崎の街角（2015年）撮影：黒柳 亮

## ■変わっていくものと継がれるもの

社会に出て、はや20年になろうとしています。

振り返るに、学生時代、都市設計を専門とする恩師に出会ったことで、私の世界観は大きく変わりました。

秀でた者の本当の凄さ、己の無力さに愕然とし、一時は何もできなくなっていました。恩師との日々のなかで、どれだけ優れた人でもその時代のしがらみや時代精神による限界と苦悩があるのかも知れないということ、そして、続く世代の人間はただ次なる世代というだけで、その「壁」を超えていける可能性を持っているのだということを偶然にも知り得たことで、以降の私は少し変わったように思います。

自らが暮らすまちに関わる仕事を志し、40代となったいまも「こうしたい」「ここを変えるにはどうしたらいいのだろう」という気持ちだけは持ち続けていますが、取り組むべき問題が仮に10あったとしても、実際にクリアできているのはせいぜい1か2といったところで、相変わらず、悪戦苦闘の自分がいます。

無力さは常々感じるところですが、ひとつ、信じてみたいことがあるのです。

もし自分がやっていることが単なる独りよがりではなく、他の人々にとっても「意味のあること」であるならば、たとえ自分が転んだとしても、まわりで見ていた人や次の世代の人たちが受け継いでくれて、自分が超えられなかった「壁」を乗り越えてくれるのではないか。

であるならば、ちっぽけでも自分がまちに対して向き合い続ける意味は十分あるし、世代交代に期待できることは少なくない。そうあってほしい、と私は思っています。

人々の無数の「想い」と膨大な「成し得たこと」でできているこのまちで、自らの成したこともまた意味あるものとしてより多くの人々に供され遺っていかなことを、ささやかに願っています。

(藤原光博／大阪市港湾局)

## ■ポストモダニズム建築の行方

好きで長らく住んでいた街がある。好きが高じて、一時期、近所のカフェでアルバイトをしていた。T字路にあるその店は、見通しがよく、遠くからでも全貌をよく見てとれた。そして、ある時、大きなカメラで建物を写しながら何かを探るようにウロウロしている外国人を見て、ふと気が付いた。ここは、かつてロボットのような建物が建っていたところだ。すっかり忘れていたのに勝手なものだが、こざっぱりとして清潔でなんの変哲もない今の建物が、とたんに味気ないものに思えた。

京都市の北山通りには、バブル期に、著名な建築家による作品が建ち並び、流行の先端をいくショップが幾つもあった。現在は、なぜかウェディングストリートという別の一面を見せているが、今も昔も変わらず、送り火を映す山々と鴨川や植物園の自然とを街路樹がつなぎ、街並みの穏やかさを保っている。そんな北山通りに、果たしてあのロボットが似つかわしかったのかは、わからないけれど…

## ■変わりゆくStation

昔は電車に乗る為だけに利用していた駅。改札で切符を切ってもらい、駅ホームで電車を来るのを待ち、目的地に着くと改札口で込み合いながら切符を渡していた懐かしい風景。

現在は、自動改札をくぐり抜け、ホームではファーストフード店やパン屋などが立ち並び、一休み出来る空間へと変貌。又、大きくは商業施設と一体化した空間に生まれ変わり、駅とは思えない空間と施設を兼ね備え始めた。

「移動手段の駅」から「人が楽しめる駅」へとこの数十年で変わっていった。

特に主要となる駅のリニューアルが著しく、駅ビルとして生まれ変わり、今や遊びに行く場所に駅が含まれるようになってきている。又、駅の開発は、駅周辺もあわせて賑わいを見せ、街の大きな発展を担っている。

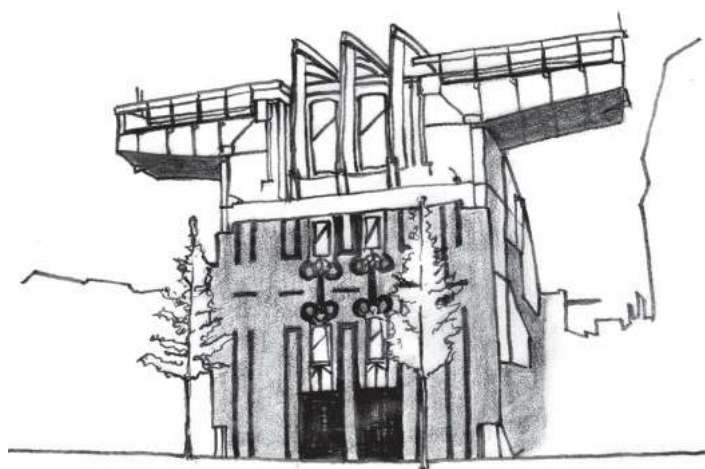
とはいえ、徐々に変貌を遂げる駅がある一方、まだまだ田舎の方では田園が広がるのどかな光景の中に、まるで映画のセットのような木造の駅舎が残っているところもある。趣と懐かしさ、そして落ち着く感じがなんとも言えない。

どのような建築物も、時代のニーズに合わせて機能的で便利なものへと変わっていくが、やはりいつまでも昔ながらの情緒ある建築物は残っていてほしいものだ。

これからも駅は進化していく。どのように進化していくかは想像できないが、進化の過程を楽しめるのもその時代時代を生きている人々が味わえる楽しさでもある。

駅がこのように変わっていくと想像もしていなかった為、自分としては驚きがあった事から今回のテーマに挙げさせてもらいました。

(川川隆之／積水ハウス)



個人的に好きかどうかは別にして、今となっては、時代を表したキワモノ建築の放つ強烈なインパクトをもう感じられないのは、ちょっと残念。モダニズム建築よりも早く失われてしまいそうなポストモダニズム建築の行方が気になりながら、ひとくち、コーヒーをすすった。

(松田奈緒子／アトリエ805)

## ■団地っ子

今では、珍しいことでは無いかと思いますが、私は50余年の人生、共同住宅のみを住まいとしてきました。戸建て住宅に住んだことがありません。今では3LDKのマンション住まいですが、人生の半分以上をいわゆる団地の中で育った「団地っ子」なんです。

小学校1年生までは、父が勤める家電メーカーの社宅で過ごしました。階段室型4階建ての最上階、スチールのサッシと西日に照らされた黄色い部屋が夏の記憶として残っています。昭和30年代後半、もちろん風呂はなし。でも住民が物干し場として利用する屋上があり、そこが私の遊び場でもありました。小学2年生になり、郊外の新築の団地に引っ越すことになりました。やはり階段室型4階建ての最上階。屋上はありませんが南向き。部屋が一つ増えたこと。そして、最も変わったのは風呂が付いたことと洋式便器。風呂は、サービスバルコニーの風呂釜でお湯を沸かすタイプ。まず浴槽に水を貯め、釜の種火をつけてから着火。空だきすると火事になると両親から口うるさく言われていました。便所は、洋式便器が珍しく、訪問してきた人には前向きに座らないように説明することもありました。コーナーのタンクから手洗い用の水が流れるのも不思議でした。

引っ越し当初は10棟程度の団地でしたので、周囲にはまだ壊される途中の自然が残っていました。空地での風揚げやかくれんぼ。夏の朝のクワガタ探し。ため池でのザリガニ釣り。崖地での化石探し。勝手に採ったタケノコ。小川でのドジョウやタイコウチ捕り。もちろん団地内の駐車場では野球やかくれんぼも。初期の団地には、無限の遊び場がありました。しかし数年後には、私の遊び場が200棟近いマンモス団地に変わっていきました。それから半世紀、老人と大きく育った街路樹が時代の終わりを告げる風景なのかもしれません。

(豊田充広／高松建設)

## ■スイッチ

私は小学生のときに住んでいた街に暮らしているが、20年ほど離れていた時期があるので、ときどき思い出のなかにある風景をたどりながら、街の中を歩き回っている。記憶のなかにある風景は、ほとんどの部分でいまある街並みと一致せず、「ああ、こんなところだったっけ」と思うことが多い。ずいぶん昔に記憶された風景は断片的で、それらをつなぎ合わせるために、いまの風景であちこちを補うことになる。そうしている間にも、古くなった建物は次々と建て替えられ、昔の記憶はどんどん薄れていく。

私の記憶のなかには、取るに足りない（と思われる）些細な出来事が細かに刻み込まれていることがある。しかし、それをよくよく眺めてみると、そのなかには自分にとって大切なものごとが隠されていることがある。そのときの私を取り囲むものごとが、背景となり記憶を彩っている



物干し社宅の屋上にて。後方の山並みは生駒連邦  
(1968年9月)



20年以上過ごした団地。階段向かって左の4階がかつての私の住室  
(2015年10月)



団地内の周回道路。現在では、樹木が棟高以上に生い茂る  
(2015年10月)

が、それらは思い出の中に埋め込まれた大切なものを呼び起こすためのスイッチとなっている。

思い出の背景に見えるもの、といっても、それ自体が思い出となっているので、どこまでが背景なのかは分からない。記憶に焼き付けられた思い出の背景には、大切なものを思い出させてくれる、そのときの気持ちや音、においや手触りを呼び起こすスイッチが隠されているのではないだろうか。そして、街並みのなかには、人々の記憶をいぎいきとよみがえらせる、そんなスイッチとなるものごとがたくさん埋め込まれているのではないだろうか。取り壊された建物は、人々の記憶の中に残り、新しい街並みが、次の世代の思い出を彩る。新しい街並みにも、記憶のスイッチとなるものごとが、たくさん埋め込まれていくのだろう。

(渡部 剛／安井建築設計事務所)



写真1 阿倍野の長屋風住宅（2004年）撮影：酒井雅男



写真2 軍艦アパート（2005年）撮影：酒井雅男



写真3 高射砲台の家（2005年）撮影：酒井雅男

## ■大阪 Vital Architecture

昔から街を歩くことが好きである。高校生になって、それまで住んでいたニュータウンの景色とは違う大阪の街の顔があることにとても驚き、興味がわいた。いくつか紹介したいと思う。

大阪は長屋の街である。戦前（空襲でその大部分が焼かれてしまうまでは）には大阪市内の住宅の9割が賃貸、さらにその9割が長屋であったと何かの本で読んだ記憶がある。大阪の長屋建ての建物には、邸宅風のものから、狭小のものまで様々なタイプがある。中には1階のファサードがすべて引違のエントランスで構成されたものまであり、設計者の意図であるかわからないが、とてもコンセプチュアルな佇まいをみせている（写真1）。

現在は存在していないが、通称「軍艦アパート」と呼ばれていた市営住宅があった。鉄筋コンクリート造の外観に木造の「出し家（だしや）」と呼ばれる増築部が建物の顔を構成している（写真2）。生活様式の変化からそれまでの空間では手狭になり、個々の住民が自らの意志で「出し家」をつくり、どんなルールがあったかはわからないが、個が全体を意識したかのようなバランスを感じる。

最後に紹介するのは、高射砲台の家である（写真3）。第二次大戦中に米軍の爆撃機を打ち落とすための高射砲台が残り、そこを住処にしている。屋上は（計画的かわからないが）緑化され、さらに一棟に玄関がいくつかあったことから集合住宅になっているようである。

これらの建物は実に大阪らしく、大阪の風景を作り出していたと感じる。もちろん都市の風景は移りゆくものではあるが、建物の設計をする立場として、そこにある（あった）都市の文脈に目を凝らしたい。

（酒井雅男／大林組）

## ■鳥の視線で都市を見る

この国が敗戦から復興し、急速な経済発展をとげた1950～60年代の都市を私は写真でしか知らない。木造長屋に挟まれた路地で遊んだ記憶はあるが、それも後年、写真で見た記憶のように思う。開発によって失われた古き良き都市の記憶は私にはないのだ。

私にとって失われた都市の記憶といえば、大学時代をすごした神戸の震災以前の記憶だろうか。それでも、卒業した数年後のことだったので、昨日までの風景が劇的に変わってしまったという経験ではなかった。

神戸を離れて20年以上たった数年前に母校近くの建築計画に携わることになり、かつて毎日眺めていた、高台からの風景を頻繁に見る日々が訪

れた。神戸の街は変わってしまったかもしれないが、丘の上から見える光景はほとんど変わっていないように思えた。学生の頃にも、単に美しい風景を見ていたわけではなく、遠くに見える高架鉄道や高速道路の車の流れを通して、これらを動かしている都市のエネルギーを感じていたのだと思う。都市の記憶を考えると、かつての光景をノスタルジーとして見るだけでなく、ダイナミックに鳥の視線でとらえることも大切なのではないだろうか。

（下坂浩和／日建設計）

## ■深田池から小原流会館を経て

見たことのない建築が緑の斜面に続出する、それは中学生の心を奪う景観だった。60年代のこと、神戸大学附属住吉中学校の通学ルート、神戸市バス19系は鴨子ヶ原へと向かう。

阪急御影を過ぎるとすぐに緑が迫り、左手に深田池公園がたたずむ。消防署前で山道に入り、右手には水平に伸びやかなホワイトの超豪邸が車窓から見渡せた。広大な庭園には使用人らしき人影も。フラット屋根のRC造、一部にピロティもあった気がする。今思えばインターナショナルスタイルだ。「伊藤」と表札がかかっていた。

続いて車窓左手に小原流会館が斜面にせり出す。頂部に不思議な球体モニュメントを持つ豪壮な前衛建築は、中学生の好奇心をかき立てた。今も鮮明に記憶に残す同級生もいる。不思議に釣られ、大胆にも男子数人で訪問を敢行、寛大に招き入れられたという。アプローチでの新車の広告撮影風景を回顧する同級生もいる。強烈なインパクトと風格を漂わせていた証左でもある。70年に清家清による改築があったものの、以前の姿の存在感と記憶は色あせない。

さらに進むともう1軒の伊藤邸が今度は曲がり角右手に姿を現す。最初の伊藤邸より規模はやや控えめながら、ここもインターナショナルスタイルの造形だった。

いずれも地元の小学校から初めて電車通学となった中学生の目には別世界の景観だった。見知ったビルディングタイプを超越した造形美に驚き、同時に目を開かされたように思う。山道に入ってからここまでは、深い

緑を間にこの3軒のみ。静寂感は坂道をさらに登っても変わらなかった。しかし70年代には開発が進む。伊藤邸は2軒とも姿を消した。ひっそりとした空気は今はもう無い。

校庭から裏道を下ればスパニッシュ風洋館、渡辺節の乾邸に出た。住吉川畔の廃墟ヘルマン城で遊んだことも。思えば、何と贅沢な中学時代だったことか、瑞々しい感受性にとって。

(塚口眞佐子／大阪樟蔭女子大学)



伊藤邸、小原流会館に至る山道（2006年）撮影：塚口眞佐子

## ■街の層

スペイン・カタルーニャ州の城郭都市ジローナ。オニャール川沿いの丘の斜面に形成された街には中世の面影が色濃く残る。

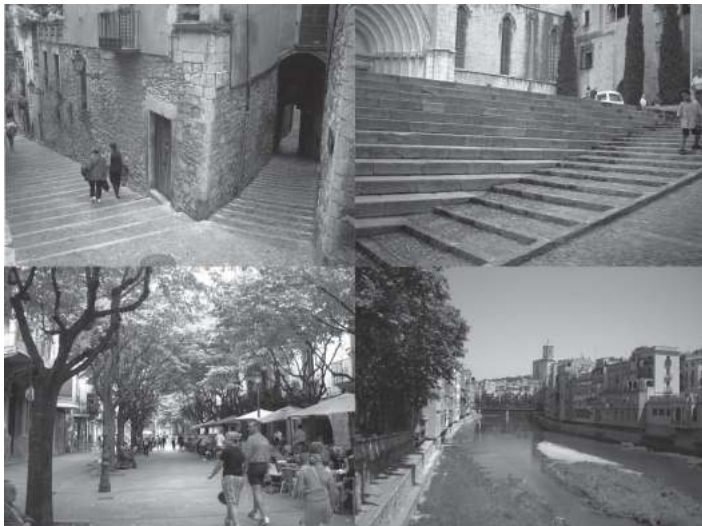
石畳の旧市街にはジローナの都市空間を特徴付ける要素が詰まっている。カテドラル・旧ユダヤ人地区・アラブ浴場などの建築資源はもちろん、街を形作っているのは多数の小広場や曲がりくねった道、斜面地ならではの

の坂道や多くの階段だ。都市空間の多様性はそれだけで町を豊かにする。特に小広場は小規模な旧市街に20以上もある。広場といっても、道の一部が広がった場所や道と道が交わるだけのものなど様々だ。「広場」の語源plateaというラテン語は元来「広い道」を意味するが、広場と道の起源が重なることを証明しているような場所も多い。

近代都市計画以降姿を消していった曲がりくねった複雑な道路網。その見通しの悪さ、薄暗さはここではむしろ街の魅力になっている。移動の際、多様な選択肢から経路を選りすぐる楽しさがある。曲がりくねった道は、見通しが悪い分、一歩前進するにつれてその都度新しい風景が視界に入ってくる。街を高みから見渡す城壁、階段と階段の交差、並木道やポルティコ空間など街との距離感を縮める場所が至る所にある。ワインの広場、油の広場、魚屋通り、薔薇の道といったかつての町の様子を物語る広場や道の名称も、往時と今を繋げてくれる。

中世の佇まいだけではない。あのエッフェルが建設した「古い魚屋の橋」という歩道橋も歩行者にとって特別な経路である。空間的にも時間的にも層を重ねて多様性を育んで来た街はとかく想像をかきたてる。至る所で「街との距離」がどんどん近くなるきっかけに会う。住民も観光客もともに街への関心が高くなればなるほど、街へのCivic Prideは高まる。

(加嶋章博／摂南大学)



想像をかき立てる街ジローナ（2001年）撮影：加嶋章博

## ■まちの資産としての建築と景観

神戸須磨に生まれ育った。旧武庫離宮（現離宮公園）のすぐ前である。須磨は温暖な気候と、山と海が近い風光明媚な環境から、古くより邸宅地として拓かれてきた。小曾根邸、岡崎邸、西尾邸、室谷邸等々夙に有名で、中でも私の生家の東の窓からレンガの煙突が見えていた室谷邸は、離宮正門周辺の景観のポイントとして重要な位置を占めていた建物だった。と今にして強く思う。というのは、そこで生まれて、その風景と共に暮らしていた少年設案にとっては、いつもそこにあってあまりにも日常的な風景になってしまっていたため、周辺を含めた優れた景観の価値を意識することは、恥ずかしながら殆んどなかったのである。

### （写真1）（写真2）

ところが、数年前ヴォーリズの名作であるその室谷邸が取り壊されたと聞いたときの喪失感は非常に大きいものであった。そこにいつもあると思いつ込んでいた存在が突然消失したショック、あるいは無くなってはじめて知るその存在価値の大きさかも知れない。

優れた景観の中で生活している人にとって、その景観は当たり前が存在しているものであって、普段はその価値をまったく意識すらしないものなのかも知れない。

昨夏、愛知県半田市で古い赤レンガ建物がリノベーションされた。明治31年（1898）に第一期が建築されたカプトビール工場の建物である。長い間ほとんど使われずに放置されていたのを、耐震補強し、内部をリノベーションして、集会室、展示室、レストラン、ショップ等の機能を持った集客施設として新しく甦らせたものである。7月18日のオープニングセレモニーの直後に訪問したが、たくさんの地元の人々にぎわっていた。まちの資産である歴史ある建物が新しい機能を与えられ、人に解放されたことを喜ばしく思った次第。訪れている人々の顔を見ても、わがまちの誇りを見直した喜びに満ちているように感じた。私の例を見るように、この人たちにとってこのレンガ建物は、身近にあって毎日目にしているのに、案外その価値を感じずに過ごしてしまっていたのではないだろうか？（写真3）（写真4）

その土地に古くからある資産としての建築を再発見し、時に新しい機能を付与することによって、地元の人々にまちの誇りを甦らせること、これも建築に携わるわれわれの大事な使命の一つと考える。

（設案貞樹／安井建築設計事務所）



写真1 かつての室谷邸西側外観  
設計：ウィリアム・メレル・ヴォーリズ  
写真：大阪芸大山形政昭教授提供



写真2 西尾邸外観 設計：設案貞雄  
(2014年8月) 撮影：設案貞樹



写真3 半田赤レンガ建物外観  
設計：妻木頼黄（つまきよりなかり）、改修設計：安井建築設計事務所  
(2015年7月) 撮影：設案貞樹



写真4 半田赤レンガ建物内観  
(2015年7月) 撮影：設案貞樹

## ■老朽長屋の再生から地域の共生へ

私が生まれ育ったまち、大阪市阿倍野区は100年前には大半が畑であり、50年前には、戦前に建てられた長屋建て住宅で埋め尽くされていた。それらの長屋は、大阪の庶民住宅の代表であり、土地区画整理により碁盤目に整備された街区に2階建木造建築が整然とならび、良好な景観を形成していた。しかしその長屋も老朽化と車社会の登場により次第に姿を消し、そのあとに中高層のマンションや3階建て住宅に建て替わり、その町並みは、混沌としたものに変容してしまった。

そうした中で長屋を残したいという人との出会いにより、マンションに建替を計画していた戦前の老朽長屋が、国の登録有形文化財となった。そして、それは、今やこの地域のまちづくりの拠点的存在になっている。それが寺西家阿倍野長屋である。70年を経て朽ちかけていた4軒長屋は、宮大工の技によって建築当初の雄姿を取り戻し、現在、イタリアン、日本料理、鉄板焼料理、中国料理の店として地域の名所として多くの人を楽しませている。

それだけにとどまらず、長屋で働く若者たちによって「どっぶり、昭和

町。」というお祭りが生み出された。それは、4月29日の祭日の名称が「緑の日」から「昭和の日」に変わるのをきっかけに昭和町駅を中心に「昭和の日に、昭和町駅周辺地域で、昭和の文化を楽しもう」というお祭りである。その規模は、年々拡大し、2015年に10回目を向かえた。今や阿倍野区の3大祭りの一つとなり、お年寄りから子供達まで約1万人の人たちが、昭和の文化を楽しんでいる。当初、長屋等が開催場所であったが、行政の支援のもと阿倍野区最大の公園である桃ヶ池公園や小学校や高等学校等の施設が利用できるようになり、そして近隣の商店や銀行さらに商店街等にまで拡大していった。そして、活動を支える組織は、若者達のボランティアにより、また、活動資金は、近隣の商店等の協賛金により支えられるようになった。

1日だけのお祭りであるが、このお祭りの準備作業を通して若者達が集い、町内会の人たちが結集し、話し合い、ネットワークを形成するようになった。このことは、地域住民が共生するきっかけになっていると感じている。

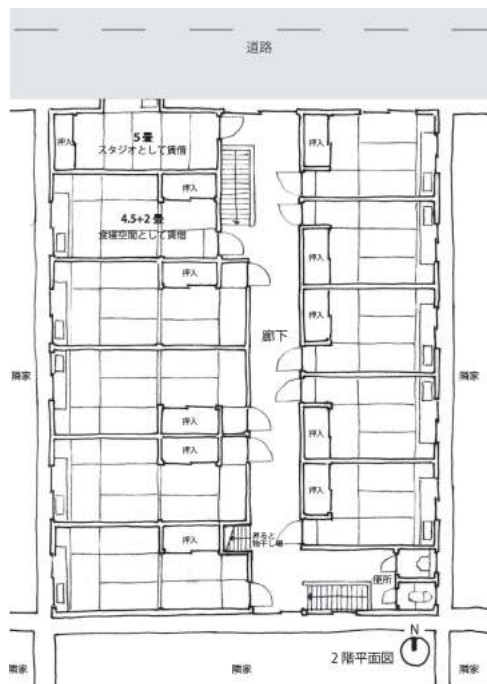
(寺西興一／大阪府登録文化財所有者の会)



飲食店に生まれ変わった長屋（2015年）撮影：寺西興一



第5回どっぶり、昭和町。：桃ヶ池公園  
（2010年4月28日）撮影：寺西興一



大学生時に借りていたアパート平面図 制作：寺地洋之

## ■素足でつながる緩やかな共住感

大学2年からの3年間（昭和60年～62年）私は大阪市旭区で中廊下式の木賃アパートに住んでいた。4.5+2畳の部屋と5畳の2部屋を借り、5畳の部屋には製図台を2台並べてスタジオ専用として使っていた。隣り合わせの2室を賃借でき、賃料1.8万円は苦学生にとって魅力的であった。ただし、靴は1階共用玄関の靴箱に入れ、玄関框より内部は上足での利用であり、便所も共同利用であった。木賃アパートという呼び名は、幅広く使われるが、玄関で靴を脱ぐ形式の木賃アパートは、下足のまま自室へ行ける形式とは別格の住まい方である。当時、ワンルームマンションもあったが、まだ少数部類であり、地方から来ている多くの同窓生は、木賃アパートを根城としていた。木賃アパートでの生活は総じて快適であったが、真冬時に寒風吹く和式便所に行くことや真夏の暑さは辛かった。しかし、お喋りなお婆ちゃんや訳有りそうな小父さんたちなどとの一つ屋根の下での生活は、素足で廊下や便所を共用しているため

## ■千里ニュータウン今昔

私が、利便性が高く緑の多い住環境に魅せられて千里ニュータウンに住み始めたのは約30年前。購入した中古マンションはエレベータ無し、狭い部屋、2200の低い天井高、ウォシュレットとトースターを同時に使うとブレーカーが落ちる、時代遅れの団地であった。

等価交換方式で建替が完了したのは2003年（注）。古い団地のバリアフリー化工事は階段室を大改造してエレベータを設置する必要がある、分譲マンションでは区分所有者の負担が大きく合意形成が難しい。サスビナビリティが必要な時代ではあるが、経済的合理性を考慮すれば個人負担なしの等価交換によるスクラップ＆ビルドも止むを得ない面もある。

建替前は団地が並ぶ単調な光景で（写真1）、酔払って帰ると自分の建物を間違えると笑われた。現在はマンション建替や、PFI方式での公営住宅建替、千里中央地区再整備等で高層建物中心のスカイラインに変わってきた。街並みに統一感が欠けてきたのは残念だが、豊富な緑がそれをカバーしている（写真2）。



写真1 マンション建替前の光景（2001年）撮影：上田正人

人口減少時代の昨今、ニュータウン開発は死語となり、千里ニュータウンも開発から50年を越えオールドタウンとなった。千里ニュータウンの人口は1975年の約13万人がピーク。その後、少子・高齢化が進み2007年には約8.9万人まで減少したが、集合住宅の建替等で2014年には約9.6万人まで回復してきた。今後は新たな再開発とともに、囲み配置で魅力的な空間が残るURの賃貸住宅を残し、リニューアルやスケルトン賃貸で若い人を集めて、まちびらき100年目に世界遺産をめざすのも面白いのではないかな。

ドイツでも人口が減少している都市で治安悪化を防ぐため、無味乾燥な公営住宅の解体・部分撤去が行われている。千里ニュータウンも人口減少でスラム化しないよう新たなコミュニティを形成し、ここで生まれた世代が緑あふれる生まれ故郷をいつまでも誇りにできるように願っている。

注：経緯は「私たちはこうしてマンション建替えに成功した！／創元社」参照

（上田正人／阪急コンストラクション・マネジメント）



写真2 現在の豊中市新千里東町（2015年）撮影：上田正人

→ か、緩やかな共同体としての一体感があり、学生時代の大きな思い出となった。

この原稿を書くにあたりこのアパートを再訪してみた。まだ現存しており、6割ほどの部屋が人々の住処として使われていた。しかし、廻りに多くあった同様のアパートは、ほとんどが姿を消しており、ワンルームマンションなどに建て替わっていた。

近年、家をシェアして共同で生活することがもてはやされている。経済的側面がこれらの住まい方を誘発しているのであろうが、個人主義や家族中心思考とは異なる多様な人と人の関係を許容する現代社会が、それらを後押ししているのも一因であろう。シェアハウスは今の若人にとっては新しいもののようであるが、私などは「時代は輪廻する」と懐かしんでいる。

（寺地洋之／大阪工業大学）



今も現役のアパート（2015年10月）撮影：寺地洋之

## ■消えゆく歴史と文化をどう残すのか

### 「野堂」の名前が消えたー1974年

私の実家は、中世の環濠集落である平野郷の野堂と呼ばれていた地（現在の大阪市平野区北部）にある。野堂は平野郷の環濠内の七町（野堂・流・市・背戸口・西脇・泥堂・馬場）の一つで、野原の中の御堂（聖徳太子の創建と伝えられる全興寺）を中心に発達した平野の起源を物語る、由緒ある地名である。

野堂の名前は、1889（明治22）年の町村制施行、1922（大正11）年の町名変更でも残ったが、1974（昭和49）年の新住居表示により姿を消してしまった。これは行政による暴挙であるとは、言い過ぎであろうか。地名からは消えてしまったが、杭全神社の夏祭り（毎年7月11～13日）の九つの当番町の名前に野堂北組・野堂南組・野堂東組として残っているのが、せめてもの救いである。

### 南海平野線の廃線ー1980年

南海平野線は、1914（大正3）年に旧阪堺電気軌道株式会社が今池ー平野間の旅客営業を開始して以来、沿線の足として親しまれてきた。私は、幼稚園から中学校までの12年間、南海平野駅の前の道を通って通園・通学し、天王寺に出るときも、国鉄（関西本線）よりも、ゆらゆら揺れながらゆっくり走る電車が好きだった（写真1）。南海平野線は1980（昭和55）年11月26日に運転を終了し、翌日に開業した地下鉄谷町線（天王寺駅ー八尾南駅間）にその役割を譲った。八角形屋根の木造駅舎（写真2）は、保存運動もむなしく解体された。

### 歴史と文化は残せるのか

心斎橋そごうや大阪中央郵便局はすでになく、旧新歌舞伎座も解体され、大丸心斎橋店も解体の危機にある。文化的価値がきわめて高いとされる建築でさえ、知らぬ間にどんどん消えていく時代に、無名・無数の歴史や文化をどう残していくべきか。その答えは見つからないままである。

（吉村英祐／大阪工業大学）

写真2 今はなき木造の南海平野駅（1980年）撮影：吉村英祐  
「地元では六角堂とも呼ばれていたが、実際は八角形であった。  
撮影時は恵美須町行きと天王寺駅前行きが交互に発車し  
（昼間はそれぞれ12分間隔）、運賃は100円であった」



写真1 廃線を間近にひかえた南海平野線（1980年）撮影：吉村英祐  
「平野ー西平野間を走る旧型車両。上に工事中の阪神高速道路松原線の高架が見える。ここから飛田の手前まで高架と併走する。高架部分の地下では地下鉄谷町線の工事も進む」

## ■共有する桜ー市民としての矜持と責任ー

10年前の初春、長男の誕生の日に桜を植樹する、という幸運に恵まれた。正しくは、その半年前に桜並木の植樹の抽選で選ばれた私に、植樹祭の日時を記す案内状が届き、植樹祭当日に長男が誕生した。分娩室のベッドで出産に備える妻から背中を押され植樹祭に参加した私は、新しい生命の誕生を待ち侘びていたせいか、厳かな儀式に臨むように、鍬を入れ、苗木を納め、祈りを込めて水を供えた。植樹祭を終え病院に戻ると、私の帰りを待っていていたらしく、程なく長男が産声をあげた。この小さな運命は、私達家族と桜を紡ぐ物語の序章になると同時に、私の都市観に大きな軌跡を残すこととなった。

その日以来、週末になると長男の名を冠する桜に水遣りや観察に出かけ、開花を待ち望む日々が始まった。長男の成長と重なり相まって桜への愛着が高まり、周囲の環境に目を配り、空の気配、風の香り、樹形の姿美にも敏くなっていった。同じ様に抽選で選ばれた隣の桜のお姉さんとも話がはずむ様になった次春、桜は美しい花を咲かせた。

それから10年、私達家族の居間となり都市の新名所となった桜並木を舞台に繰り広げられた長男を主人公とした物語は、新しい環境や登場人物を加えながら、喜怒哀楽が織りなす家族の記憶となっていく。同時に「桜を育て、街を美しくしている」という矜持と「桜を枯らしてはいけない」という責任が少しずつ高まり、私の中に「市民の自覚」が芽生えてきた。一本の桜が私達家族に新しい友人を紹介しながらライフスタイルや社会への意識を変え、市民としての矜持と責任に気付かせてくれたのだ。

この桜は社会が所有する私達家族の桜です。言い換えると、社会と私達家族が「共有する桜」です。都市に想いのつまった対象があると、それは時間と共に記憶となります。そこに矜持と責任が重なると、「社会と共有する」という自覚が芽生え、新しい交流を育む物語が始まります。飾りすぎず、そこに想いを馳せる人が環境を創りこんでいく手掛かり、願わくは、そこに関わる人々のライフスタイルや意識に働きかける仕掛けで都市が満たされた時、「市民が共有する、矜持と責任が幾重にも折り重なる都市」が姿を現します。

来春、中学生になる長男を桜は満開で祝ってくれるでしょう。これからも続く長男と桜を紡ぐ物語に「共有する都市」の像を夢想しながら、脇役の一人として、一人の建築家として、楽しみに温かい気持ちで見守っていこうと思います。

（東井嘉信／大林組）

## ■ “Our Utopia”

雑誌『新建築』（2015年9月号）に建築家・楨文彦氏による建築論壇“Another Utopia”が掲載された。都市の中のオープン・スペースにこそ、都市生活をより豊かにするポテンシャルが潜んでいるのではないか、という提言であった。都市空間が、個々の建築空間またはそれらの集合体というよりも、むしろ都市の中の建築と建築の間の空間であることを思えば、オープン・スペースに着目すべきとの指摘に説得力が感じられる。ローマの教会と噴水のある広場、香港のピクトリア・ハーバー等を挙げずとも、都市はその代表的なオープン・スペースによって記憶されることがよく理解できる。この論壇では京都にも触れられているが、京都の代表的なオープン・スペースのひとつとして、鴨川の河畔を挙げたい。

京都は私自身が大学時代を過ごした都市だが、何度訪れても、思わずため息の出る安心感と、どんな過ごし方も許容されるような懐の深さを感じて嬉しくなる。山に囲まれつつ、川が流れ行く空間全体が程よいヒューマンスケールに感じられるからであろうか、内向的でありながら開放的でもあり、そこに居る人は没個性のようで個々の過ごし方にも目が届く。ご存知「等間隔の法則」よろしく、特に夜はデートにも最適（私自身も、彼女と過ごしている時に対岸の悪ガキ高校生からロケット花火を投げつけられた経験あり！）。京都には他にも御所や寺社の庭園など、優れたオープン・スペースが数多くあるが、他に類似例の少ない、最もポピュラーで最も居心地のよいオープン・スペースのひとつであると思う。

京都で過ごした大学時代に、進路や恋に悩んだ時、気分転換をしたい時、あるいは特に用のない時にも、よく訪れた。かつては晒し首の場所でもあったが、この場所の持つポテンシャルは将来も変わらず、“Our Utopia”として引き継がれていくことを願っている。

（米山剛史／ユー・アール設計）



三条大橋から臨む鴨川河畔（2015年9月）撮影：米山剛史

## ■今はなきミナミの看板建築

1953年12月に複合映画館ビルとして誕生した「南街会館」は2004年に解体されるまで50年間に渡り非常に多くの大阪の映画ファンから愛されてきた。しかしさてその建築がどのような外観をしていたか、という問いに対して正確に答えることができる人はほとんどいないであろう。1953年の開館当初は開放的な足元に端正なポツ窓という控えめな外観を呈していたが、高度経済成長の中でやがてその壁面は広告看板に埋め尽くされることになるからである。御堂筋と、大阪南部へのターミナルである南海難波駅に面した角地という極めて視認性の高い立地条件が、大型広告の掲出というニーズを生み、ビル経営者側もその壁面を提供することによって大きな広告収入が期待できる。両者の利害の一致に加えて、「ミナミ」という雑然とした街並みがその広告看板に埋め尽くされた風景を許容してきたのである。特に宗右衛門町から南については道頓堀に面した壁面に代表されるコテコテの広告看板が「ミナミらしさ」の風景を形成してきた。大阪市の都市景観施策では道頓堀川に面するグリコのネオン看板などを「道頓堀になくてはならない風景の一部」とし、都市景観資源として評価する一方で、新築建物には屋外広告物の規制をかけている。特に御堂筋など大通りに面する建築物については外壁に取り付く広告物はビル名称などのサインも含めて外壁面積の1/10かつ50㎡以内という基準があり、美観に配慮した設計が求められている。つまりすでに大阪の風景として定着しているものは景観資源として評価するが、新しい広告看板に関しては面積を抑えた上で、美観上も指導していくということが行政の基本的な方針なのである。

かくして南街会館の壁面を埋め尽くしていた「ミナミらしい」広告看板は建築の寿命とともに姿を消した…。

（野田隆史／竹中工務店）



南街会館の外壁を埋め尽くす看板群（2003年7月）撮影：野田隆史

## ■都市景観は建築が担う

街中の建築物や工作物は日々新しくなり、見慣れた都市の景観はいつの間にか変化していく。通り慣れた商店街に新しい店舗が開店したのに気付いたときなど、以前にあった店の姿をなかなか思い出せないことがあるのは私だけでないであろう。ましてや、街全体の景観が大きく変わっていても、以前の街が記憶に留まることは少ない。

例えば、最近の京都都心部を散策すると街全体がサッパリと感じられ、建築物の姿が露わになった気がする。以前の屋外広告物が華やかであった頃の姿を図に示す。



京都市河原町通り三条付近（2005年頃）撮影：村上幸三郎

## ■住宅を住み継ぐということ

「先祖代々の家は残さなければならない。」

両親からその言葉を聞いた6年前は学生だったためか心に残らなかったが、先日祖母の通夜が行われた夜に聞いた時には思う所があった。

我が家には両親の田舎にそれぞれの祖父母が残した木造住宅があり、今後それらを維持する義務がある。義務というと大げさだが、私自身愛着のある住宅を残していきたいと思うようになった。

私の子供時分は、長い中廊下や縁側の不気味さなど、田舎の住宅のことを大きくて得体のしれない物として正直好きではなかった。当時住んでいた都心の綺麗なマンションの方が便利で居心地も良かった。その後、大学では建築学科へ進み、大学院で個人的興味から「建築の主観的価値」という切り口で研究に従事することになった。そこで、京都市内における住み継がれてきた住宅の居住者数名の過去を分析する機会を得た。彼らはかつて自身が住む住宅を嫌悪しながらも、家族と住宅や地域における記憶を積み重ねていき、ある契機により住宅への愛着に気付く後世へ住み継いでいく意思が芽生えたと語った。今現在の私自身に置き換えてみると、そのような方々の話を聞いたこと、二人の祖母が亡くなったことが住宅への愛着に気付く契機であったように思う。

現在の日本で空き家問題が取り沙汰されて久しい。十分な住宅性能さえ備えば居住者は満足すると考えられてきた昭和から移り変わり、ここ数年は都心居住のDIYなど住宅の非手段的価値にも焦点が当てられ始め

京都市は都市景観に重要な役割を担う屋外広告物について、2007年に屋外広告物条例を改正し、屋上に設置する屋外広告物や点滅式照明、可動式照明などの使用を市内全域で禁止し、表示できる高さの基準、デザインの基準、表示できる面積の基準、表示できる位置などを定めて施行した。2014年9月1日、この条例は完全施行となった。発表によると、京都市内の屋外広告物約4万数千件のうち、2015年7月末で違反看板は約7,000カ所となり、特に派手な色彩使用や面積規定を大きく超えた看板は900カ所程度になったとのことである。その結果、京都市内の繁華街などでは屋外広告物による煩瑣な景観が無くなりつつある。この屋外広告物に対する徹底した施策は全国的に見ても類例がない。

都市景観、とりわけ都心部の通り景観は、屋外広告物という厚化粧が無くなると、素颜である建築デザインが露わとなり、いままでの景観が屋外広告物に依ってきたことを思い知らされる。本来、都市景観の主な姿は建築群のもたらすものである。これからは、屋外広告物に依存しない都市景観、建築が主である姿であってほしい。都市景観の責任は、建築が担うものであると自負したい。

（村上幸三郎／村上デザイン事務所）



住み継がれてきた家（2014年）撮影：安福賢太郎

た。しかし、地方における本質的な空き家問題の解決策にはまだなり得ないと感じる。現在、片方の住宅は農業のために移住してきた一家が住まい、もう片方には親戚が住んでいる。愛着のある住宅の未来に対して今後何ができるか、自身の課題として問答している最中である。

（安福賢太郎／大林組）

## ■変わるはずがない風景の変貌

都市更新が著しく進むことになっても、「都市の記憶」を永遠に留めてくれるのが神社仏閣のある風景であると私たちは信じている。世界一魅力的な都市と評価されるようになった京都では、その神社仏閣が多く存在することで知られている。その変わるはずがない神社仏閣の風景が、いま変わろうとしている。写真は明治18年に創建された京都御所に隣接する神社で、別名萩の宮とも呼ばれ、湯川秀樹博士も愛していた神社である。その神社の表参道に分譲マンションが建てられ、境内の風景は一変した。定期借地権付物件で、60年後には区分所有者の負担で取り壊されると言うが、将来予想される課題は未解決のままである。さらには、世界遺産に認定されている下鴨神社の境内にも同様のマンションが建設されようとしている。

我が国の人口と世帯数は減少傾向にあり、建築に対する量的需要は急激に収縮している。そのような成熟社会になったにもかかわらず、大規模マンションは次々と建設され、管理不全となった空き家はますます増加している。そして、持続的に維持されてきた良好な都市の風景は、富裕層向けの節税対策として販売されるマンション開発の絶好のターゲットになっている。このような現状は、市場が収縮した成熟社会になっても、より多くの金銭が動くことを善とするマネー資本主義が相変わらず支配していることを物語っているようである。しかし、市場原理主義では評



神社の境内に建てられたマンション（2015年）撮影：鈴木克彦

価できない大切な価値が世の中には存在する。その価値を、様々なニーズをインクルードする都市の多様な様相の中から見出していく美学を持ち続けていきたい。

（鈴木克彦／京都工芸繊維大学）

## ■歴史的都心船場の趣き

船場が記憶を失いつつある。

場所には、そこで生きた人々、そこで行われた様々な営みが積層され、それが空間に現れる。歴史都市は、古いから歴史都市なのではなく、場所の記憶を積み重ねるように常に進化しつつ生き続けてきたから歴史都市なのである。

船場の小学校に3年間通った。中之島で運動会をし、三越劇場で学芸会をした。学校の周りのビルはとても大きく都会だった。働き始めて戻ってみると、船場の人々が期待をこめてつくった小学校はなくなっていた。子供の頃の不思議な都会の空気は、あつけらんとした透明な空気に変わっていた。

船場は歴史都市か。明治になって軒切りができたことからわかるように、町割の記録が残されている。近代都市への進化は、この町割を基本に建築線指定により道路幅員を確保することで進めてきた。戦災復興でも区画整理はしていない。建築線（現在は位置指定道路）をたよりに自力で復興している。そうして戦後できたビルは、町家のビル化である（写真1）。薄い袖壁と連窓に特徴のあるこの時代のビルは、船場の町割を継承して建っている。場所の記憶が連続している。ここで仕事をするという事業者の思いがある。誰も大阪が歴史都市と言わなくなっても、船場では空間が記憶とつながっていた。ところがしだいにその都市性を失っていく。敷地に閉じこもった建築、空地に囲まれた高層ビル、そして超高層分譲マンションへと、敷地形態と建築の変化は船場の記憶を混乱させ、記憶

喪失に向かわせた。

今の船場の再生は業務床や住戸数を増やすことではない。場所の記憶に誇りをもち、新たな営みを吸引する場所の魅力の開発である。誰もかなくなるとわかりつつできない。市の建築審査会で船場の総合設計制度による分譲超高層マンションの計画にだけは同意できなかった。戦略性のない2年間の抵抗だったが、大阪から「船場」を失いたくなかった。

（小浦久子／神戸芸術工科大学）

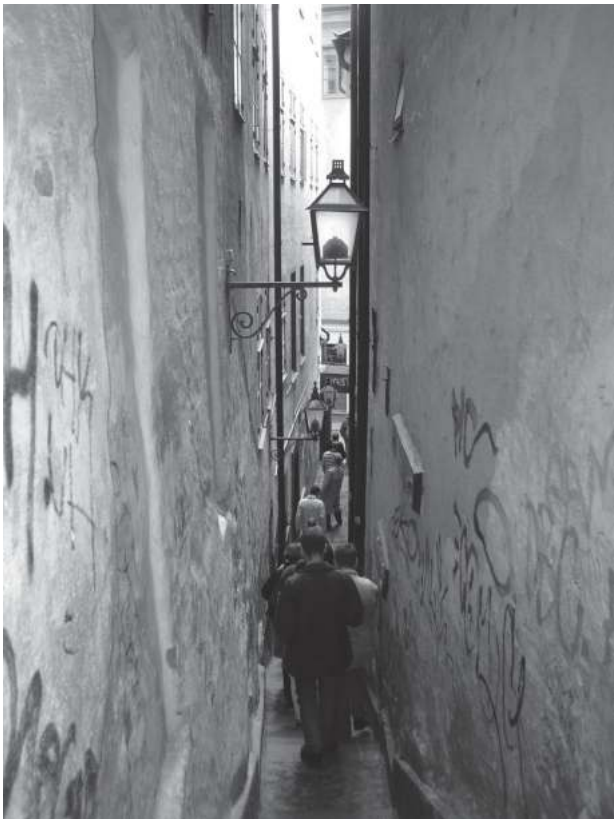


写真1 歴史的町割を継承する町家のビル化（2001年）撮影：小浦久子

## ■都市の隙間に醸成された生活空間

建築は都市の空間を形成する大きな要素である。時間経過とともに、多くの建築が立ち並び、その都市の顔を形作る。美しいまちづくりをめざす景観デザインや、災害、事故などからの安全・安心、さらに多様な市民や来街者の利用を考慮したバリアフリーやユニバーサルデザインの実現をめざす福祉のまちづくりの取り組みも盛んである。大都市の駅前空間も開発整備で大きく様変わりしつつある。目まぐるしく変化する都市の環境にあつて、地上へ、地下へ、高層化、大規模化する開発。既存のビルの谷間にも根づこうとする小規模な建築のたくましさで高密度なモザイク模様の開発も。そんな都市の中にもいつの間にか取り残された建築やへた地の空間が存在する。あるものは歴史的文化財として尊重され、あるものは手の付けにくい特異な空間として放置され残る。中には大きな都市の計画の枠に影響されず、生き延び、愛着のある市民の生活の場として、親しまれ、守られ育てられた空間もある。隣接する敷地や建物の間に生じた通り抜け路地空間、鉄道や道路の高架下や地下空間など、新規に計画して生み出されないような都市の隙間空間を生み出している例がある。神戸の三宮や元町の高架下にはファッションの店などが立ち並ぶが、元町駅近傍の地下横町には常連ファンの集う飲み屋街が残る。長き時間にわたりいろいろな人が使う中で生み出されたタイムスリップしたかのような非計画的な空間に驚く。同様のことは地方都市を訪れた際にはたくましい市民の知恵と文化に醸成された昔からの生活空間に出会うことがある。隙間空間にはスクラップアンドビルドで押し進める開発の味気なさを和らげる隠し味のヒントがある。画一的な都市計画でなく、地域の個性と魅力を備えた記憶の再生活用のデザインが今後大切になりそうだ。

(田中直人／島根大学)



旧市街地ガムラストンのすき間に、名所となる人の通り道ができる  
(スウェーデン・ストックホルム) 撮影：田中直人



大阪のど真ん中―地上(2015年) 撮影：梅田善愛  
「人々の往来のない広がり 中心には村野藤吾設計の換気塔がそびえる」

## ■駅の記憶、都市の記憶、未来の記憶

### 二層化された街

職場は地下鉄の駅と繋がっている。電車を乗り継ぐターミナルも地下。下手をすると空のご機嫌に気付くこともなく自分のデスクに到着する日も。

27年前、就職で大阪を訪れて以来、住み処を移しながらも、その軌跡の中心点は大阪にある。俗に“三都物語”とは言われたものの、京都や神戸に比べ、その表情の曖昧さに、残念ながら特に親しみを感ずることもなく過ごしてきた。

その理由の一つに、“独自の街”として発達した大阪の地下街がある。その上に広がるのは別世界の“地上の大阪”だ。駅やビルの足元に覗く階段の入口や、地下街が呼吸するために地上に顔を出す排気塔や換気塔の類が、完全に二層化され交わりの薄い両者を繋ぐ装置として、地上の大阪の案内役を務める。



鉄道高架を市民の遊歩道に、そして残った高架下はギャラリーや店舗に  
(フランス・パリ) 撮影：田中直人



大阪のど真ん中—地下（2015年）撮影：梅田善愛  
「（左写真と同じ場所）曜日、時間を問わず途切れることのない人並み」

### → GrooveからGroovyへ

うめだの真ん中には、大阪地下街の象徴とも言える村野藤吾設計の換気塔がそびえる。光り輝くその姿に魅入るのは、我々限られた職域の人間かもしれない。ここを中心にくめだの地下街は四方に発達し、地下鉄が地上には可視化されない都市の溝—grooveを刻んでいる。残念ながらここは中心であって中心でない。地上におけるその点は、それぞれに魅力を持つ街区のお尻が向き合っている場所に過ぎない。これが今のうめだのど真ん中。

駅を降りたらその街の匂いを感じ、活気に心躍り、愛着の湧く街に繰り出していく。そんな何処にでもあるはずの原風景を、未来のうめだの地上にもつくりたい。地下のgrooveに隠されている大阪の魅力・活力を、地上に引っ張り出す仕掛けを作ろうじゃないか。そんなチャンスに今私は恵まれた。feeling groovy！きつとうまくいくさ。

（梅田善愛／竹中工務店）



防空壕跡を活用した市民の市場  
（長崎県・佐世保）撮影：田中直人

## ■帝塚山学院通り

南海高野線帝塚山駅へ向かう道筋は高校時代から思い出の通りです。

その頃、付近に引っ越したことで、帝塚山住宅地を知りました。

チン電こと路面電車の上町線を横切り駅へと向かう通りには、高塀を回らすお屋敷、こじんまりとした和風住宅や洋風長屋、そしてパン屋さん、おしゃれなケーキ屋さんが点在する町でした。そして駅に隣接する帝塚山学院は堂々たる玄関と白亜の校舎（昭和10年の建築）で、この地のブランドイメージを担う佇まい、出入りする女子高生も眩しくて直視できなかったことを思い出します。

間もなく転宅し、それから2～30年後、近代建築調査などで再び当地を歩いていた頃、その学校の新築計画を知ったことで行動を試みたものの、1998年にイメージの継承という建て替えとなりました。その頃から、マンションや商業ビルが増えつづけ町の環境は多分に変貌しつつありますが、一方で住宅地の歴史、文化を見直そうという活動、地元の建築家グループで土蔵を生かそうという「住吉蔵部」など、種々に芽生えているところです。

今も、当時からの友人、最近の知り合いもいて折々に歩く所で、昔を彷彿させる学院新校舎もやがて20年を迎えるに至り、街路樹と共に馴染んでいます。道路側は旧校舎のヴォリュームに抑えた3階建てで、トップに並ぶピナクル風のユニークな装飾はイメージ保存の成果？といえるのでしょう。残念、残念といわれ姿を消すお屋敷や洋館も少なくない一方、先の「住吉蔵部」の注目する蔵の「ギャラリーCLASSIC」など、新世代による再生も始まっています。

また、当地とのご縁を思いつつ、丹念に、楽しく歩いています。

（山形政昭／大阪芸術大学）



帝塚山学院校舎（1980年頃）撮影：山形政昭

## ■変わり続ける階段路地—雑賀崎—

和歌山市の小さな集落雑賀崎は、中心市街地から車でわずか15分、急傾斜地に形成された小さな漁村である。

そこには波止場から上のバス道につながる数本の階段路地が、屈曲しながら登っており、途中には幅2メートルにも満たない狭い路地が網目のように張り巡らされている。

ところが池之丁と呼ばれる路地だけは、かなり高いところまでスロープで結ばれ、墓地につながっている。そして墓石はきれいに清められ、いつ訪れても花の絶えることは無い。

昔は土葬であり、死者は丁重に葬られるべく、階段を使わずに登れるルートが生まれてきたとも言われている。

自然発生的な集落の成り立ちにも深い意志と配慮があったことが伺われる。もしこれを等高線に沿って道をめぐらせるような意志をもっていたら、雑賀崎全域の傾斜地にも、バリアフリー化が実現していたかも知れないなどと思い巡らせたりする。

しかしそうはならなかった。

ほぼ20年間にわたり定点観測のように通った雑賀崎を振り返ってみると、1960年代高度成長期に木造家屋が取り壊され、コンクリートに代わった時期があった。瓦屋根で覆いつくされていた集落が、コンクリートの四角い建物でいっせいに風景を変えた時代があったのだ。しかし工事が難しい中央部は、昔の木造がそのまま取り残された。

急傾斜地のため家は狭く、子供達は結婚すると、外へ出て行った。その結果末子相続制のような状態が生まれ、親の土地家屋は長男ではなく、末っ子が家を継ぐ事例が頻出した。

家が不動産のように激しく売り買いされた時期もあった。その結果、磁石が引き合うように親と子が同居または隣居の現象が生み出された。しかし最近は再び、子供達が車でいつでも駆けつけられる15分圏内の集落外に引越する事例が増えてきて、生活はだいぶ変わった。

路地が少しずつ寂しくなり始めている。

もうこの急階段を、頭に肥桶を載せ、上の畑に人糞を運んだことを話してくれる人たちはほとんどいなくなろうとしている。

たった20年間で路地はずいぶん姿を変えた。何か失敗したのだろうか？

いや、彼らは最善の選択をしてきたからこそ、今までの集落生活を手に入れ、その痕跡を路地のいたる所に刻みこんできた。

住民は歳を重ね、多くの方々が逝去された。それでも昔ながらの懐かしい人々が出会う路地は、住民によって昔のままに支えられている。

ただ恐れるのは、ここに自分の顔見知りの方々がなくなったとしたら、愛着は揺らぐかもしれないという危惧の心である。

(本多友常／摂南大学)



雑賀崎 中ノ丁 (1996年) 撮影：細川和昭



雑賀崎 中ノ丁 間取実測図  
「小さな幾つもの変化への細やかな対応は、時代の流れと共に大きく姿を変え、記憶と共に変容を続けている」

## 法令コーナー

駅周辺への  
都市機能集積に向けた  
都市計画の見直し

足立和康

京都市都市計画局都市企画部都市計画課地域係長

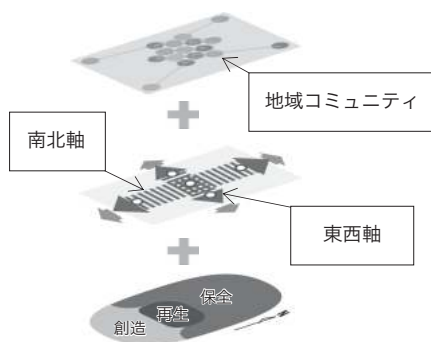
## 人口減少社会見据えた都市構造の転換

京都市では、将来的に見込まれる人口減少の進行に歯止めをかけるため、京都の特性を徹底的に活用した、都市の魅力や活力の向上に向けた取組を行うこととしている。

しかしながら、急激な人口減少に歯止めがかけられたとしても、一定の人口減少や高齢化は避けられないため、これらの将来展望を見据えた都市構造の転換が必要となっている。

## 目指すべき将来の都市構造

人口減少社会を見据えた都市構造として、本市では、平成24年に策定した「京都市都市計画マスタープラン」において、これまでの保全・再生・創造の土地利用を基本としながら、交通拠点の周辺に都市機能を集積させるとともに、地域コミュニティを基本とした生活圏の維持・構築を図ることで、それぞれの地域が公共交通等によりネットワークされた、暮らしやすく、地球環境への負荷が少ない都市構造を目指すこととしている。



将来の都市構造イメージ

## 都市計画の見直しの概要

将来の目指すべき都市構造の実現に向けた取組として、まず、交通拠点を中心とした都市拠点の強化を図るため、平成24年度から交通拠点である駅周辺での都市機能の集積に向けた検討を進め、都市計画の全市的な見直しを行うこととした。

## ■検討の経緯

- (1) 平成24年度
  - ・土地利用に関する調査
  - ・「京都市駅周辺等にあふさわしい都市機能検討委員会」（以下「検討委員会」という。）の設置
- (2) 平成25年度
  - ・「検討委員会」から「駅周辺にあふさわしい都市機能の集積のあり方」の提言
- (3) 平成26年度
  - ・都市計画の見直し（案）の検討・作成
- (4) 平成27年度
  - ・都市計画の見直し手続

## ■「検討委員会」での検討内容

- (1) 「市民の暮らしを支える視点」による検討  
駅を中心とした都市拠点の強化の実現に当たり、すべての駅に対して一律的に都市機能の集積を図るのではなく、段階的な都市構造となるよう、「広域拠点」（市内外から多くの来訪がある賑わいと魅力を有する駅周辺）、「地域複合拠点」（市内からの来訪があり、地域の生活や活動の場となる駅周辺）、「日常生活を支えている地域」（日常生活を支えている施設が立地する地域）の3つに駅の特性を分類し、これらの特性に応じた都市機能の集積について検討を行った。
- (2) 「都市の魅力を高める視点」による検討  
「ものづくり」、「観光・サービス」、「文化・交流」、「大学・研究」といった本市の魅力を有する拠点（「魅力づくり拠点」）のある駅周辺において、魅力が更に高まるような都市機能の集積について検討を行った。
- (3) 上記の2つの視点による検討を踏まえ、前述の拠点等を鉄道等の公共交通機関によりネットワークし、各拠点の中心となる駅周辺にそれぞれの特性に応じた様々な都市機能を集積させることとした。

## ■見直し箇所の選定及び見直しの概要

駅の特性を踏まえた前述の分類ごとに、見直し点検対象駅を市内にある約130駅から選定し、駅周辺の現状や今後のまちの将来像を踏まえた点検を行った結果、今回、先行して都市計画の見直しを行う地区として、「京都駅周辺エリア」など5つの地区の選定を行った。

- (1) 「広域拠点」（2地区12駅）

本市の都市機能の中核を担う重要な駅周辺である「京都駅周辺エリア」において、商業、業務、観光・サービス機能の集積による更なる都市活力の向上や都市機能の強化を図るため、商業地域、容積率600%、31m高度地区（全市的に高度地区を見直した平成19年の新景観政策以降初めて）の区域を拡大した。

- (2) 「地域複合拠点」（19地区33駅）

新たな地域の拠点として土地利用が見込まれる駅周辺の「太秦天神川駅周辺」、「竹田駅・くいな橋駅周辺」及び「桂川駅・洛西口駅周辺」において、生活利便性を向上させる多様な都市機能の誘導を目指し、新たに近隣商業地域、容積率300%等の指定を行った。

- (3) 「日常の生活を支えている地域」（85駅）

第一種低層住居専用地域の区域を対象に検討を行ったが、一定の生活利便施設の立地が図られている、あるいはアクセス道路が狭小であるなどから、今回は見直しを行わないこととし、土地利用動向を経年的に適切に把握しながら、今後検討していくこととした。

- (4) 「魅力づくり拠点」（11地区22駅）

新しい京都の活力を生み出す南部地域のものづくり産業の拠点である「らくなん進都」のうち、産業・業務関連施設の集積が進みつつある「十条駅・上鳥羽口駅周辺」では、駅周辺の利便性を活かし、企業の本社・研究開発・生産機能を更に集積させるため、ものづくり機能に資する建築物の用途に限り最大100%の容積率を割増し見直しを行った。

## 見直しにより期待する効果

今回の見直しにより、それぞれの拠点に応じた都市機能が集積し、それらが公共交通機関によりネットワークすることで、人口減少及び高齢化の進行に対応した、利便性が高く、都市活力が向上する「既存の公共交通を活かす活力あふれる都市づくり」を促進させ、子どもから高齢者まで安心し、快適に暮らせるまちへの転換につなげることを目指している。

## おわりに

今回の取組を行うに当たっては、人口減少社会への対応という初めての経験に対し、都市計画においてどのような対応が可能かその手法や対象の選定に苦慮した。今回は、取組の第一弾として、駅周辺を中心に都市の魅力・活力の向上を図ることを目的としたが、これがそれぞれの地域の個性を強める都市づくりの促進にもつながるものになると考えている。

今回の取組が、本市の目指す都市構造の転換への第一歩となることを期待しつつ、今後も、激変する社会状況等にも対応する柔軟な都市計画の運用により、京都の価値を更に高めてまいりたい。

(あだち かずやす)

足立和康

1972年生まれ。1996年京都工芸繊維大学工学部卒業。1996年京都市役所入庁

連載 No.408

# 構造の頁

## HK淀屋橋 ガーデンアベニュー

田代靖彦

株式会社 日建設計  
エンジニアリング部門 構造設計グループ 構造設計部長

### 建築計画概要

HK淀屋橋ガーデンアベニューは積水ハウス株式会社と阪和興業株式会社による共同事業として旧阪和興業大阪本社ビル跡地に建設された区分所有ビルである。鉄骨を扱う大阪の老舗商社である阪和興業株式会社としてのアイデンティティを表しつつ歴史ある船場地区の街並みに調和させるべく、構造体である鉄骨フレームを表しとしながら乾式工法で鉄骨フランジ間に花崗岩を嵌め込んだ端正な外観ファサードが特徴的な建物となっている。



写真1 外観写真 鉄骨フレーム+花崗岩のファサード



写真2 足元周り写真 基壇部 乾式石貼

### 構造計画概要

本建物は、地上14階・地下1階・塔屋2階、高さ59mで、主体構造は鉄骨造（制振構造）である。平面規模は約52m×23mで、北側に約52m×17mの無柱事務室空間、南側に細長いコアを配置している。地下1階は自走式の駐車場及び機械室等が配される。地下1階の下はPIT階として機械式駐車場が設置され、構造上は地下2階となる。

#### ■架構計画

本建物の架構種別は、桁行・東西方向は制振デバイス付純ラーメン構造、梁間・南北方向は座屈拘束ブレース等を用いた連層軸ブレース付ラーメン構造としている。

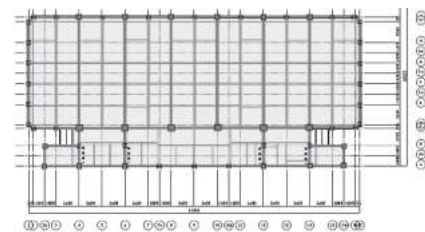


図1 基準階梁伏図

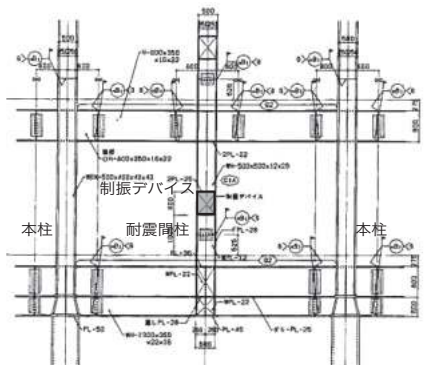


図2 外周鉄骨詳細

事務室空間を挟んで桁行方向に7.2m間隔で箱型断面（CFT）の本柱を配し、2階以上の事務室周り外周部本柱の間に本柱と同じ見附のH形断面耐震間柱を配置した。安定したメカニズム形成のため同耐震間柱は大梁に先行して降伏させるべく、階高中央ウェブ部に制振デバイスとして小径H型鋼束柱を内蔵させている。事務室の無柱空間は、梁間方向に7.2m間隔で約17mスパンの大梁を配して本柱を結び、各大梁の間に同スパンの小梁を設けることにより床組を構成している。梁間方向の主要架構にはコア部分に連層の座屈拘束ブレースを配置し、屋上階にてハットトラスにより梁間方向全幅を接続して全体の曲げ変形を抑える架構計画とした。基本的な梁成は800mmとし、階高の高い1階の水平剛性を確保するため2階の大梁は1300成を基本とし、中2階レベルに方杖を配置している。

事務室周りの2階以上の外周柱及び大梁は意匠的に表しとなることから、柱幅・梁幅・

梁成共に全階で揃え、フランジ継手部は現場溶接の上グラインダー掛け仕上げとしている。

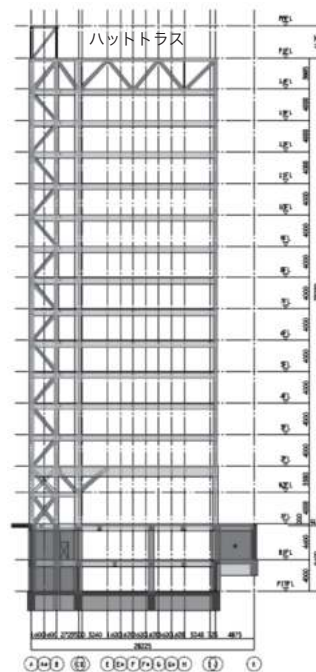


図3 梁間方向主要架構軸組図

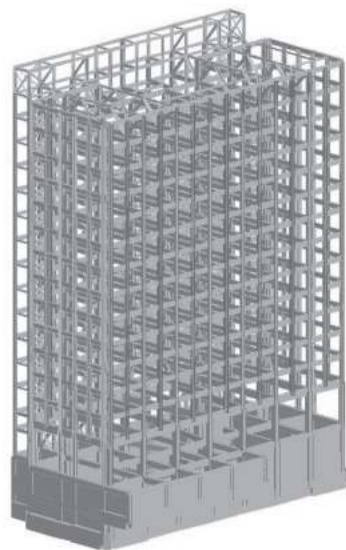


図4 構造骨組パース

#### ■地下・基礎計画

地下部分は地下外壁及び要所にRC耐震壁を配した剛性・耐力の高い耐震壁付きラーメン構造としている。基礎部はGL-30m以深の洪積第一砂質土層を支持層とする高耐力の場所打鋼管コンクリート杭基礎地業としている。

#### ■おわりに

構造体鉄骨そのものが意匠となる建物であるが故に、鉄骨製作・建方において特に高い品質・精度と美観が求められた。阪和興業をはじめ関係各社の高い技術力により、精悍で美しい建物が完成した。（たしろ やすひこ）

田代靖彦

1989年 早稲田大学大学院理工学研究科終了  
同年 株式会社 日建設計入社

## 「再読 関西近代建築―論考・記事編―」の新連載にあたって

6年余り遡る2009年4月号より誌面を頂き「再読 関西近代建築 ―モダンエイジの建築遺産―」の連載を72回にわたって続けてきたが、昨年3月に区切りをつけて閉じさせて頂いた。このシリーズは1917（大正6）年9月創刊の協会誌『建築と社会』に収録された近代建築作品の記録をもとに、現存しているそうした近代建築を再見し、関西の優れた建築遺産の広がりや豊かさを伝えようとしたものである。執筆は本協会史料研究会のメンバーが主に分担し、趣旨を共有しつつ、各人の視点から論じたものである。その試みは、未だ尽くされるに至ってはいないが、1920～70年代に誕生した関西の建築を見直すという、当初の目論見がほぼ果たせたと考えている。

ところで、周知のように歴史的史料でもある『建築と社会』には関西の建築に関する論考や連載記事、座談会の記録など、価値高い多くの蓄積がある。例えば戦前期においては、大大阪と呼ばれた時代の都市への眼差しや、民家や茶室建築など、いち早く伝統建築を論じた論考、様々な設計コンペの記録などがあり、改めて読み直すことで啓発されることも多い。また、戦後においてはニュータウンの建設や新しいコミュニティに関する記録、そして建築の高層化や災害対応など現代に通じる課題が様々に論じられている。

そこで、こうした論考や記事等を紹介し、解題を試みる新シリーズを先の「再読 関西近代建築」の続編、論考・記事編として誌面を頂くこととなった。この内容は先行した建築作品シリーズを補完するものであり、協会誌『建築と社会』が有する多様な歴史的蓄積に光をあてることとしたい。どうぞご期待ください。

史料研究会 山形政昭

再読 関西近代建築  
― 論考・記事編 ―

## 1

## 郷土建築座談会

『建築と社会』第14輯第5号  
(昭和6年5月号)

## 酒井一光

大阪歴史博物館

大正6年(1917)に本会が設立され、その会員たちが中心となり、いわゆる「大大阪」と呼ばれた都市発展期の大阪や関西の諸都市の建築・都市計画の分野をリードしてきた。いっぽうで、都市開発とともに失われゆく古い町並みや洋風建築にも当時の建築家や知識人は関心を寄せていた。本座談会は、日本建築協会編集常務の本間乙彦が中心になり、大阪の郷土史に詳しい文化人を集めて開催された。歴史や民俗など様々な分野で同時に高まりつつあった「郷土」への関心を、建築分野から呼びかけて成立した座談会で、建築と社会の橋渡しをする画期的な座談会であった。

参加者／小林利昌、南木芳太郎、江崎政忠、鶴丸梅太郎、今井貫一、高橋榮治、小西一良、本間乙彦

「郷土建築座談会」が開催された経緯をみてみよう<sup>1)</sup>。

座談会のタイトルでもある「郷土建築」の用語の『建築と社会』誌上における初見は、本間乙彦<sup>2)</sup>の「我等が父祖の建築文化記念物を保存せよ」(昭和3年3月号)である<sup>3)</sup>。同稿では、「郷土建築」の語が二ヶ所登場し、定義は明確には示されていないが、その言葉がキーワードになっている。同稿の趣旨と「郷土建築」の意味を知るために、その一部を少々長い引用しておきたい(下線引用者)。

神社仏閣等は信仰の勢力又は国の命ずる保護によつて其の厄に遇ふものが割合に少ないのであるが、郷土的記念物としての古き伝統を持つ商店住宅等々、明治時代欧米文化移入当初の記念物として官衙、教会堂、商館等々は所有者或は保管者に於ても其の史的価値を殆ど認めてゐないので無惨にも破壊し去らるゝのである。殊に欧米文化移入当初の遺物の如きは、現在の完備せる教養を持つ建築家から見れば拙劣、俗悪と見へるかも知れない。されど我が建築界も嘗てはかゝる過渡期を経たのである。即ち吾々建築家としては先覚者の貴き記念物である。吾々の今日あるは、先覚者の業績に僅か一步を進めたのに過ぎないのである。

本間の意図した「郷土建築」の定義は下線部のような意味であった。同稿が執筆された昭和3年(1928)は、都市計画に基づく御堂筋の拡幅工事がはじまって3年程が経過し、拡幅のため多くの古い家屋が取り払われるとともに新たに沿道に新建築が計画された時期である。また、大正12年(1923)に発生した関東大震災の前後から、鉄筋コンクリート造のビルが急増し、同14年には大阪市が第二次市域拡張を行い、人口・面積ともに日本第一の都市となった。いわゆる「大大阪」が誕生した頃である。道路拡幅、橋の架け替え、ビルの鉄筋コンクリート造化と高層化により、都市の姿が急変しつつあった。それらはまさに、建築や都市計画の専門家を中心とした集団である日本建築協会が先導してきたことといて過言ではない。本間の論考は、ある種それに異を唱えたものでもあるが、当時の本会会長・片岡安をはじめとする面々も、これらの企画を許容する度量があったのだろう。

## ■「郷土建築座談会」前史

「郷土建築座談会」が開催された経緯をみてみよう<sup>1)</sup>。

座談会のタイトルでもある「郷土建築」の用語の『建築と社会』誌上における初見は、本間乙彦<sup>2)</sup>の「我等が父祖の建築文化記念物を保存せよ」(昭和3年3月号)である<sup>3)</sup>。同稿では、「郷土建築」の語が二ヶ所登場し、定義は明確には示されていないが、その言葉がキーワードになっている。同稿の趣旨と「郷土建築」の意味を知るために、その一部を少々長い引用しておきたい(下線引用者)。

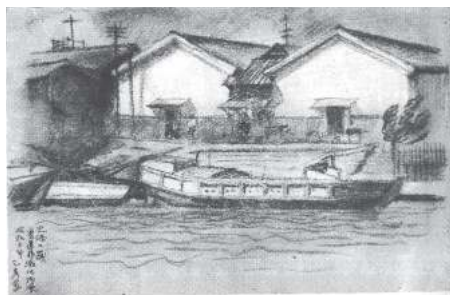
神社仏閣等は信仰の勢力又は国の命ずる保護によつて其の厄に遇ふものが割合に少ないのであるが、郷土的記念物としての古き伝統を持つ商店住宅等々、明治時代欧米文化移入当初の記念物として官衙、教会堂、商館等々は所有者或は保管者に於ても其の史的価値を殆ど認めてゐないので無惨にも破壊し去らるゝのである。殊に欧米文化移入当初の遺物の如きは、現在の完備せる教養を持つ建築家から見れば拙劣、俗悪と見へるかも知れない。されど我が建築界も嘗てはかゝる過渡期を経たのである。即ち吾々建築家としては先覚者の貴き記念物である。吾々の今日あるは、先覚者の業績に僅か一步を進めたのに過ぎないのである。

本間の意図した「郷土建築」の定義は下線部のような意味であった。同稿が執筆された昭和3年(1928)は、都市計画に基づく御堂筋の拡幅工事がはじまって3年程が経過し、拡幅のため多くの古い家屋が取り払われるとともに新たに沿道に新建築が計画された時期である。また、大正12年(1923)に発生した関東大震災の前後から、鉄筋コンクリート造のビルが急増し、同14年には大阪市が第二次市域拡張を行い、人口・面積ともに日本第一の都市となった。いわゆる「大大阪」が誕生した頃である。道路拡幅、橋の架け替え、ビルの鉄筋コンクリート造化と高層化により、都市の姿が急変しつつあった。それらはまさに、建築や都市計画の専門家を中心とした集団である日本建築協会が先導してきたことといて過言ではない。本間の論考は、ある種それに異を唱えたものでもあるが、当時の本会会長・片岡安をはじめとする面々も、これらの企画を許容する度量があったのだろう。

## ■本間乙彦について

「郷土建築座談会」の企画者である本間乙彦(1892-1937)は、大阪の小川香料(小川ビルディング)、松竹アドビル(現存せず)の設計者、あるいは芝川ビルの共同設計者とし

て知られている。住宅や商店の設計も多数こなした建築家でもあった。彼はまた、『建築と社会』や『住宅』の編集に携わった。『建築と社会』の編集常務に就いたのは昭和3年で、「我等が父祖の建築文化記念物を保存せよ」はその直後に発表された。また、本誌の長い歴史の中でも、本間の誌面改革は特筆に値する。彼はレイアウト変更やコラム的内容(「建設へ建設へ」)の挿入など斬新な試みを行い、読者からの自主的な投稿を促すこともあった。そして、内容面における新たな企画のひとつが「郷土建築」特集号であった。「郷土建築座談会」は、3回目<sup>4)</sup>の「郷土建築」特集号で実現したものである。座談会という形式そのものが本誌では稀であった<sup>5)</sup>。



天満の蔵スケッチ 本間乙彦画

## ■「郷土建築座談会」の概要と参加者

「郷土建築座談会」の参加者は、小林利昌(あみだ池大黒三代目主人)、南木芳太郎(郷土研究家、『郷土研究上方』主宰)、江崎政忠(鴻池合名会社)、鶴丸梅太郎(ベニス工房主宰)、今井貫一(初代大阪府立図書館長)の5名で、『建築と社会』編集同人として高橋榮治、小西一良、本間乙彦が加わった。

春雨の烟る若葉の宵ここ『アミダ』池『二葉』亭で落ちついて、話題も環境ととけやつた『郷土建築』をおのがじし心ゆくばかり語り過ぎ語り来て春宵一刻価千金まことに収穫多き一夕であった<sup>6)</sup>。

この前書きの後、本間が口火を切るところから座談会ははじまる。「余り世間から顧みられないで、段々壊されたり、廃つて行きます建築物」を記録に残そうとはじめた「郷土建築」特集号について、「私等若い者のやることとてございまして、どうも余り郷土知識に詳しくないので(中略)今年は一つ皆様にお集りを願ひまして、座談会の形式で色々お話を伺ひましたら、大変得る所が多いだろうと云ふので、お運びを願つたやうな訳でございまして」と述べた。

本間の言葉からも予想がつく通り、参加者5名は大阪の郷土研究に詳しい面々で、この人選に「郷土建築座談会」の面白みがある。編集同人の中でも中心は本間であり、彼がど

のようにこの5人にアプローチしたかは定かでないが、鶴丸梅太郎の助言があったのではないかと推測される。鶴丸はステインドグラス制作のペニス工房主宰者であり、建築界とも交流があり、『建築と社会』昭和5年6月号で本間と「滅び行く建築風景」を分担執筆している。鶴丸は、工房主宰者として施主との繋がりがあり、また大阪の郷土研究者たちとも交友があった。



中之島三丁目濱側(東神倉庫)スケッチ 本間乙彦画

## ■盛り上がる「郷土建築」談義

本間は、座談会の中で実質的な進行役を果たし、話題をリードした。彼の興味は「郷土建築」の保存にあったようで、「何とか民家のやうなものの保存法ですね、無論全部を保存すると云ふやうな馬鹿なことも出来ませぬが、其の外観の一部なり或は特長のある部分を保存すると云ふやうなことが出来ないものでございませうか」「それを何処か一部分移して保存すると云ふやうなことが出来ると可いのですがね」と切り出すと、今井はロンドンのオールド・ハウスの保存例などに触れ、鶴丸は「瑞典には内部まで其の儘にして農民を住はして居ると云ふやうなものがあるやうですね」と世界初の民家野外博物館であるストックホルムのスカンセンの例を挙げている。世界で行われていた歴史的建造物の保存が、建築界の枠を超えて、大阪の識者に共有されていた様子をうかがうことができる。本間は、その合間に「何処か公園の一部なり、或は裏町の方に一廓を劃してでも、其処に壊し屋に売つてしまふやうな建物で極くティピカルなものを持つて来て建て、置くとかしたならば、昔の大阪の町が何時までも遺つて居ると云ふことになって可からうと思ひます」と自らの野外建築博物館構想ともいうべきものを披露した。

参加者の話は、さらに生々しく展開する。

今井は明治42年(1909)の「北区の大火」の回想で「翌日の朝図書館へ出勤しまして、高い所から見渡しますと、彼方此方に土蔵だけ残つて居りましたが、見て居ると、上から飛行機か何かが弾丸でも落したやうに、屋根の方に煙が出て来ると、パーツと崩壊して落ちる(中略)見て居る中に土蔵が三つも四つも落ちるのを見ました、それは中に火が一ぱい満ちて崩壊するのでせうけれど」と鮮明な記憶を語った。

南木は、大阪の代表的な町家の話題の中で、「よく二三日経たぬ中に壊されてしまふのがあります(中略)逆も面白いのですが、此の間行きましたら、もう無くなつてしまひました」というように、今日と同じく歴史的な建物が次々と失われていく様子が語られている。

所用で座談会に途中から参加した江崎は、蔵屋敷の話題で中之島の「東神倉庫の門が残つて居りますが、此の間から東神倉庫に就て色々なことを聴きまして、後藤又兵衛があの門をどうかしたと云ふ伝説がある」が今の門はその後にできた黒田藩蔵屋敷長屋門であることを説いた。実際、この門は数年後に三井ビルディング建設のために、天王寺公園の大阪市立美術館南手に移築され、現在は大阪府指定文化財となっている。

話題は明治初年の西洋建築にも及んだ。鰻谷(現・大阪市中央区島之内)の旧住友男爵邸洋館について、南木が「親父に聞いて居りますが住友さんの家が出来た時分には皆勝手に見せて呉れたさうですね」といえば、小林は「さう云ふ時もございましたね、あれは妙な家で、ぐるりに手摺があつて、泉布観と同じやうなたちです」と応じ、当時の西洋建築に対する関心の高さをうかがわせる。

道頓堀の芝居茶屋、船場の路地、天満の造酒屋、与力屋敷に富島町の天主堂と、大阪の歴史としても興味深い話題が続く。江崎は「船の料理屋などは東京辺りの人が見たら、珍しいもの」とユニークな視点を投げかけ、さらに「川筋を船で通ると、色々の裏面が見えて面白いですよ」と続けた。南木が「川端へ下りて尻からげして(引用者註:洗濯物を)洗つて居るのは大阪情緒です」といい、本間は「川から見た大阪と云ふのは面白いですね、建築家の方から見ても」と応えている。



鰻谷旧住友男爵邸

## ■「郷土建築座談会」の意義

昭和6年をもって、本間は編集常務を辞する。以後、「郷土建築座談会」は一時途絶えてしまった。「郷土建築」特集は昭和7年8月、同10年7月にも組まれたが、その筆致には変化が現れていた。本間編集時代には、建て替

えへの焦りや懐古的内容が多かったのに対し、各論考が建築史学の論文に近いものとなっていた。昭和15年10月号には久しぶりに「大阪を中心とした郷土建築座談会」が掲載された<sup>7)</sup>。参加者は、池田谷久吉、井上新二、江崎政忠、高橋榮治、瀧澤真弓、玉置豊次郎、高安六郎、鶴丸梅太郎、南木芳太郎、藤原義一、松本儀八、編集担当から岡田孝男、政岡基次、龜井幸次郎で、かつての「郷土建築座談会」と重複する人物も4名いるが、本間の名はない。内容も、昭和6年当時に比べれば学術的であるが、堅い。本間はその後、関心の対象が徐々に民家に移り、昭和12年46歳の若さで亡くなっていた。

「郷土建築座談会」は、「郷土建築」(＝当時文化財ではない古民家や町家、明治初期の洋風建築など)が急速に失われゆく昭和初期に、それらを保存したい、せめて記録にとどめたいという強い衝動から、若き本間らが中心になって企画したものだった。同時期の大阪では、座談会参加者でもあった南木が雑誌『郷土研究上方』を刊行するなど、諸分野で急速に失われつつある「郷土」や伝統行事などを見直し、記録に残そうと取り組んだ時代であった。建築界では、日本インターナショナル建築会が昭和2年誕生するなど、新建築が目ざされていたが、建築家の中には本間のように古き「郷土建築」に目を向け、他分野の諸先達とともに記録に残そうという者もいた。これは、今日も見られる建築家の本質、内面の一端を示していようが、当時の他の建築専門誌ではあまり扱わないテーマであった。これこそ、『建築と社会』の会誌名にふさわしい特集といえるのではないだろうか。

(さかい かずみつ)

註

- 1) 本論と関連して、拙稿「建築家・本間乙彦と「郷土建築」保存論」『学術講演梗概集F-2、建築歴史・意匠』(日本建築学会、2003)等を参照。
- 2) 本間の経歴については、植松清志「建築家本間乙彦について」『大阪人間科学大学紀要』13(2014)に詳しい。
- 3) 管見のかぎり「郷土建築」の語は今和次郎が昭和2年に先行して用いた(今和次郎「郷土建築」『アルス建築大講座』)が、今は「郷土建築」を民家とほぼ同義に使い、本間の用法とは異なる。
- 4) 1回目は昭和4年4月号、2回目は同5年6月号。
- 5) 本誌におけるこれ以前の座談会的記事としては「新建築の傾向に就いて(討論会)」(昭和3年9月号)、「レストラン・カッパエ座談会」(同4年3月号)等がある。
- 6) 「郷土建築座談会」『建築と社会』昭和6年5月号、以下引用文は同座談会より。
- 7) 筆者は一連の「郷土建築」座談会に触発され、平成19年12月1日に「大阪を中心とした郷土建築座談会」(主催:大阪歴史博物館、後援:日本建築協会)を開催した。本誌2008年3月号、『共同研究成果報告書』3(大阪歴史博物館、2009)参照。

## 連載

## 建築と社会を考える

NO.4

連載  
建築と社会を考える建築・都市の  
ユニバーサルデザイン

## 田中直人

島根大学大学院総合理工学研究科特任教授

## 田中直人

神戸市生まれ。  
大阪大学工学部建築工学科卒業。  
東京大学大学院工学系研究科建築学専門課程修了。博士（工学）。  
神戸市にて福祉のまちづくり計画のほか、ポートアイランド、六甲アイランド、西神ニュータウン、舞子駅前再開発などを担当した後、神戸芸術工科大学教授、摂南大学教授を経て2013年より現職。  
内閣府をはじめ、大阪府福祉のまちづくり審議会会長など各地での福祉のまちづくりやユニバーサルデザインの計画に携わる。著書に「建築・都市のユニバーサルデザインーその考え方と実践方法」（彰国社）ー日本建築学会著作賞受賞、「ユニバーサルサインーデザインの手法と実践」（学芸出版社）、「五感を刺激する環境デザインーデンマークのユニバーサルデザインに学ぶ」（彰国社）等。  
ユニバーサルデザイン監修や作品に、ビッグ・アイ、イオンレイクタウン、奄美海洋展示館等。

## はじめに

社会の動きの中で、建築には、時代が求めるテーマが映しこまれる場合が多い。とりわけ、阪神・淡路大震災（1995年）や東日本大震災（2011年）などの経験から、構造などの安全性に関するものが目立つ。それだけに基本的な安全の配慮としての地盤に対する杭地業などの不備に対しては、社会的に大きな事件として報道される。

もとより、建築には「用」「強」「美」が求められるといわれる。「用」としては、時代や社会の要請する様々な用途や機能に建築がどのように応えるか、まさにその時代の、社会の多様な人の声を反映しなければならない。「強」は安全に直結し、「美」は快適性につながる文字通りの要素である。「美」は、個々の建築のみならず、群としての建築の形成する景観のあり方を問うもので、地域の個性やイメージを形成する大きな要素である。近年では、これらの建築に求められる社会的要素に加えて、世界の先進国の中でも急激な高齢化の進展を反映して、「福祉」的な要請が強まっている。これは必ずしも、これまでの「健常者」を前提とする建築に付加される「障害者」への配慮だけを意味しない。建築などにおける特定の障壁を除去すると言うバリアフリーである物理的バリアフリー（Architectural Barrierfree）に加えて、社会の仕組みやサービス、制度など、社会全体でどのような生活環境を構築するかという課題である。

本稿では、今後の社会環境を創造するにあたって、必要と考えられる諸条件に関して、筆者がこれまで取り組んできた「福祉のまちづくり」や「ユニバーサルデザイン」の視点から考察を試みるものである。

## 福祉のまちづくりとバリアフリー

## 1) 障害者がまちに出られることをめざす

戦後の建築や都市空間の大半は健常者中心に構成されたものであったといえる。1970年代になって、それまで自宅や施設にいた障害者がまちに出られることをめざす福祉のまちづくり運動が先駆的な地方自治体や関係者の努力で活発に展開された。ノーマライゼーションという理念のもと、誰もが平等に社会で暮らしていける建築や都市のあり方を求め

ていく動きである。それはこれまでの建築が大多数の平均的な人間の特性に注目し、どちらかと言えば、そこからはみ出した少数派（マイノリティ）への配慮が欠如していたことへの反省でもある。しかしながら、考え方の根底には、配慮される範囲や内容のレベルの問題もさることながら、いわゆる健常者と障害者という線引きの中で、特殊な人たちにに対する特別な配慮としての性格が強いものであった。

## 2) バリアフリー基準の策定ー神戸市における試み

神戸市では、まず出来るところから着手ということで、市の所轄で対応することが比較的容易な庁舎や文化施設、福祉施設などの公共建築について、バリアフリーの整備要綱などの基準を定めた。基本的な考え方を示すバリアフリー推進のマスタープランとも言うべき「障害者の利用を考慮した公共建築計画指針」（1975年）において、「整備モデルエリア」を指定して建築とともに道路や公園など一体的に重点的に整備する方式も提案した。さらに、具体的なデザインの考え方や方法、事例を示した「身体障害者の利用を考慮した建築設計マニュアル」（1976年）を策定している。

ここでは、当時のバリアフリーに関する研究成果や公表された国内外のバリアフリーに関する刊行物などを参考にするほか、実際の施設事例調査や関係者へのヒアリング調査をふまえ、基準となる方向性を示そうと考えた。しかしながら学問的にも日本建築学会などで発表される研究論文もまだ少なく、具体的な配慮のデザイン方法も限られたものが目立っていたといえる。数値の合理的な裏付けデータの不在や、海外の文献で示された寸法などは明らかに体格の異なる人間を対象としており、人間工学的検討など、多くの課題があった。さらに特定の人間を対象とせず、不特定多数の多様な人の利用する公共建築の場合における適正値のあり方などの課題もあった。

さらに、福祉のまちづくりを全市全面的に推進するため、全国初となる条例「神戸市民の福祉をまもる条例」（1979年）にもとづき、対象を民間施設にも拡大する「都市施設整備基準」を制定している。筆者らは神戸市にお

いて、この条例・基準の策定を担当するにあたり、市域の具体的地区についての面的なバリアフリーの状況調査を行い、配慮すべき内容の優先度や実効性などの検討を行っている。

「都市施設整備基準」策定においては、民間施設にバリアフリーへの理解をお願いしながら、実効性を持たせるため、建物の用途や規模に応じて、空間部位ごとの配慮事項を適用するシステムを導入した。その際、課題となったのは、①適用する建物種類と規模、②適用する整備内容（数値規定と性能規定）、③具体的デザインの方法、④配慮内容の確認と実効性（罰則規定なし）などであったが、これらの基本的な考え方やシステムはその後の他の全国自治体の整備要項や条例、並びに国が定めたハートビル法などの法基準に踏襲されている。

当時は社会的にまだまだ障害者に対する理解も少なく、少数の恵まれない弱者への配慮と捉えがちであった。したがって、施設を所有または管理する立場からは「配慮をしてあげる」もので、基準をつくる立場からは「配慮をお願いする」スタンスであった。そのような状況のもと、建築の計画や設計で何がどこまで達成できるかが問われる試みであった。

### 3) 国際障害者年とモデルエリアの構築—博覧会会場での試み

1981年の国際障害者年を契機に、バリアフリーの一層の進展が図られ、多くの地方自治体の基準が整備されるに至っている。ちょうど、この年に完成を迎える神戸港沖に計画された人工島ポートアイランドの都市環境の披露をねらってポートピア81神戸博が開催された。博覧会協会の施設担当者として筆者は、これまでの福祉のまちづくりの成果を会場計画に適用し、博覧会会場のバリアフリー計画を進めた。

その際に導入した方法として、①パビリオン等の設計者が遵守すべきバリアフリー基準をはじめ、色彩・サインなど関連するデザインガイドラインの策定、②隣接する施設間のアクセシビリティを実現する関係者との計画調整、③車いす使用者等による工事中の会場現場検証、④配慮事項の情報提供、⑤会場のコンパニオンなどの運営スタッフに対するバリアフリーに関する施設および応対研修の実

施などである。特に、計画、建設段階における多くの関係者からの意見をもとに、現地の改善工事などを会期終了まで、その都度実施してきた。特に埋立地による地盤沈下など路面性状の変化から生じたバリアフリーの処理や会場における「わかりやすさ」を提供するサイン計画に関する事項が多かった（写真1）。



写真1 ポートピア81会場サインの例

博覧会終了後のポートアイランド地区計画において、バリアフリーと共に市民広場やファッションタウン地域などで水辺や緑を取り入れてアメニティ向上のための環境デザインのモデル提示を試みている。その試みは、その後の周辺地域のバリアフリーネットワーク計画にもつながり、障害者だけを配慮したアクセシビリティではなく、誰もが享受できる「ユニバーサルデザイン」へつなぐものとして位置づけられる。

### 4) 阪神・淡路大震災の経験と福祉のまちづくり

日常の安全性の確保とともに、自然災害をはじめ、様々な事故や事件の場合でも高齢者や障害者をはじめ、すべての人に対して、避難や救助、生活復興など迅速に対応できる建築や都市の構造やシステムが求められる。筆者は1995年1月17日の阪神・淡路大震災を経験した。激変したまちの様子、避難所、仮設住宅における生活、もちろん一般の市民の状況も同様であったが、特に、「災害弱者」という言葉で示されたように高齢者や障害者等にはより過酷な状況も起きた。筆者も被災者のひとりでもあるが被災地での活動から多くの場面に出会った。「一体、これまでの建築や都市、まちづくりは何だったんだろう」「これま

での福祉のまちづくりって何だろう」。という思いが頭の中を巡った<sup>(文1)</sup>。

災害時においても日常生活と同様、継続的に適切な配慮がなされるべきである。現在の都市住民は自らの地域は自分で守るという基本的な認識が希薄なようであるが、阪神・淡路大震災のあと、市民、事業者、行政が協力して安全で（防災）、安心して（福祉）暮らせるまちづくりをめざす「防災福祉コミュニティ」の活動や「人にやさしい福祉と安心のまちづくり」が展開されている。

このような動きはその後の各地での地震や津波災害などの多発を受けて、全国的にも展開されつつあるが、地域住民の防災や福祉に関する理解や積極的な協力・参加がなければ効果は期待できない。防災福祉のまちづくりといっても、建築や道路等の生活空間のバリアフリー化だけでは不十分である。丈夫だけではなく社会のソフトの対応力が大切であり、共に生きる仕組みについて見なおすことが必要である。自立した生活を支援するためのさまざまな情報やサービスの提供は必要不可欠のものである。これらの機能を担う地域での拠点づくりは日常的なボランティア活動や地域住民のコミュニティづくりにつながる。

日常からコミュニティ活動の盛んな地域にあつては比較的震災直後からのさまざまな相互支援活動は円滑に進展したことが伺える。しかし、これらの組織活動の中でも障害者や外国人といった人達に対しては積極的に共同する場面は少なかったようである。本来、地域の拠点は特定の人たちのものではなく、すべての人を受け入れるべきものである。これまでの拠点としての地域施設は、ややもすれば利用者の属性ごとに整備してきたといえる。障害者に限らず、多くの人が地域の中で地域の人達と共に生活する場面を持つことが重要である。

公園に限らず鎮守の森やお地藏さんに代表される、地域の心の空間も残したい。学校や地域福祉センターをはじめとする地域施設をこれらのオープンスペースと関連付けながら、地域の安心・安全拠点につながるやさしい空間づくりが求められる（写真2）。

安心・安全のまちづくりは、特別対応ではなく、日ごろからの延長によるべきである。



写真2 六甲道風の郷公園「風の家」

## バリアフリーからユニバーサルデザイン

### 1) 建築とバリアフリー

建築は生活の器として多様な人間生活を受け入れてきた。立地する自然・社会環境の条件や時代の変化に対応し、あるいは対峙しながら独自のその時代と地域の文化的側面が建築にはある。そもそも建築の利用者の範囲はどこまでであろうか。不特定多数の利用という前提ではすべての人が対象になる。利用者には多種多様な属性があるのでそれぞれに最適値としての建築を提供することが理想である。しかしながらすべての身体的条件や心理条件などを完全に充足することは限られた環境の中では困難である。

それぞれの人間条件と環境条件の関係で、多くの障害が存在する。それらのバリアをひとつずつ除去していく努力がなされてきた。そのようなバリアフリーを人間工学の視点から捉える努力もなされてきた。もとよりバリアの本来的な意味はなんであろうか。特定の障害者のもつ障害の除去という意味だけの問題でなく、環境における人間の相対的な捉え方が重要になる。健常者であっても荷物の有無、天候など時と場合によって、必要とするものの必要性や身体条件は異なるはずである。これらにあった寸法や材料、空間の装置などの使いやすさやわかりやすさの配慮が必要である。加えて人間をとりまくさまざまなサービスや制度などの社会条件も重要であり、建築は単なる無機的な「箱」であってはならない。

### 2) バリアフリーと専用・優先・共用

これまでの建築では不足していた要求に対応する機能を付加することがバリアフリーの中心に据えられていたようである。「専用」という考え方がまさにそうで一般の利用者とは

異なる「特殊な」環境を追加することでの対応である。一般の利用者を排除せず、出来れば一緒に使用する前提で計画するのが「優先」や「共用」という考え方である。

車いす使用者向けの便房は、入口のサインを「車いす使用者専用」から「どなた様でもお使い下さい」という「共用」に変えただけの事例も多く、実際はひとつの対応ですべての人に安全快適な環境を提供し得ていない。「優先」や「共用」という考え方を推し進めて整備された「多目的トイレ」や「多機能トイレ」はそのスペースとともに多くの利用者への設備配慮がなされている。一般のトイレに加え、この「多目的トイレ」や「多機能トイレ」を設けることが、ユニバーサルデザインとされるようになった。しかし、現状は本来、必要な広めのスペースや設備を必要とする車いす使用者が他の利用者により使用できない事態も発生している（写真3）。



写真3 多機能トイレの注意書き

同様のことが駐車場でも発生している。障害者用としてスペースを確保された駐車スペースをその場所でなくても利用できる運転者に使用され、本来、そのスペースを必要としている障害者が利用できない事態が発生している、これに対処する方法の一つとして障害者のみが利用可能とするためのパーキング・パーミット制度にもとづく「利用証」を交付するなどの試みが広がっている（図1）。

これらはいずれも、バリアフリーとして整備されたものが、中途半端なユニバーサルデザインの理解で「共用」され、起こったバリアフリーの落とし穴である。本来、すべての多様な利用者に対応できる状況がユニバーサ

ルデザインとして期待されるが、現実はいろんな制約があるので困難である。限られたものを共同で利用する困難さ、誰に焦点をあてて整備するかという命題に応える必要がある。



図1 駐車場利用許可証（大阪府）

この状況に対して、一つの解決方法をあげるならば、一般用と障害者用を区別しないですむように、一般用とされるものの障害者の利用可能性を増大させることを検討することではないだろうか。そもそも本当にその施設で必要な装備は何かを十分に検討しなければならない。バリアフリーのデザインメニューとして基準や商品としてあるからという理由だけでは済まされない。

例えば、トイレの手すりはどう使うのか、利用者の実際の行為を知る必要がある。もし、視覚障害者が車いすトイレに入ったらどうなるのか。一般的な構造を思い描く視覚障害者に、ボタンスイッチ類の位置や鍵の形式は親切に配慮されているだろうか。右か左か。上か下か。伝えるべき情報のある場所を標準化しないと情報を伝えようがないこともある。基準などによる統一的な仕様の必要性とより良い仕様の追求の必要性がある。空間を作る前にまずさまざまな人間、その行動パターンを理解しなければならない。

### 3) ユニバーサルデザインの考え方

「障壁（バリア）を除去する」という考え方で進められてきたバリアフリーに替わり、ユニバーサルデザインの考え方が普及してきた。ユニバーサルデザインはアメリカのロン・メイス氏が提唱した考え方で「障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が美しいと感じ、かつ容易に使えるような製品や建築物のデザイン、または、都市や生活環境を計画の初めからデザインする」

ということである。高齢者や障害者だけでなく、多様な人間、誰をも対象として考慮した「だれでも」という視点が重視されている。加えて、「どこでも」という視点や「いつでも」という視点なども含むことも考えられる。「Design for All」における「All」が何をさすのかということである。

これまでのバリアフリーは特定の問題となる障壁を除去することに主眼があり、結果として美しくないものも目立つ。当該の利用者のみならず、周りの人たちにとっても美しく心地よいものでありたい。さらにバリアフリーでは特定の問題となる障壁が存在してから除去するという後追いであるがユニバーサルデザインでは最初から配慮しておくという先回りの発想がある。

#### 4) バリアフリーの現状とユニバーサルデザイン

福祉のまちづくりとして、多くの自治体では条例ではなく、「整備要綱」という形でバリアフリーの基準を制定した。しかしこれらの基準の内容は大同小異である。高齢者や障害者を配慮するバリアフリーであっても、これまで私たちが福祉のまちづくりではもっぱら、車いす使用者をはじめ特定の障害者を対象としてバリアフリーしてきたようである。その後も、多くの自治体ではバリアフリーに関する様々な基準や条例が制定されたが、本質的にはその内容には変わりはない。内容はともかくバリアフリーというものを具体的に多くの関係者に知らしめ、実行させるという点でこれらの基準の果たす役割は大きい。

国では1994年の建築のバリアフリーを定めたハートビル法をはじめ、2000年の交通バリアフリー法、2006年のバリアフリー法などの法整備を進めている。一方、それに先立って、多くの自治体などで福祉のまちづくりに向けた条例や要綱の整備が進み、地域施設のバリアフリー整備が進展している（図2、文<sup>2</sup>）。

これらの国による法整備は新たな自治体における取組みを後押しするとともに、先駆的自治体における条例等の見直しを加速させたといえる。さらに、建築単体のみならず、重点的に地区を定め、当事者とともに現状を調査し、整備目標を定める方式などは、各自治体の取組みに一定の計画策定のノルマを課

した形で、より一層の進展につながる効果があったと言える。

社会的にバリアフリーは確実に浸透・定着してきたことも事実である。そして当初、数少なかったバリアフリーに関する参考資料も増加した（文<sup>3</sup>）。

しかしその構成や考え方は当初のとは大差がない。これが何を意味しているかが問題である。すなわち、ある意味、時間の経過、経験の数にもかかわらず、バリアフリーは進化していないと言える。むしろ、常識としてのバリアフリーが標準化され基準として定着している部分も多いのではないかと考えられる。現在の基準はこれまでのバリアフリー基準のままのものが大半であり、これをすればいいというマニュアル、ガイドラインが目立つ。それ以上をどのように生み出すのか、デザインの発展の可能性を期待したい。例えば、車いすトイレは使いやすくなっているのか、点字ブロックはどうかなど。他の利用者からはどうかなど、これからの施設のあり方を考える上で検討すべきことは多い。多くのメーカーからは「バリアフリー」を謳った商品が多く出されている。これらを生かすためには大きな視点からどのようなバリアフリーをその建築で実現するかの考え方が重要である。今一度、これまでのバリアフリーについて改めて見つめなおし、新たなバリアフリーを目指していかなければならない。

静岡県や熊本県をはじめ、先進的にユニバーサルデザインに取り組んできた自治体で

は、建築のユニバーサルデザインガイドラインなどでバリアフリーへの取り組み成果を社会的に共有し、発展させていこうとしている。言葉だけユニバーサルデザインに変えるだけではなく、これまでややもすれば高齢者や障害者だけのデザインとして捉えられがちであったバリアフリーをしっかりと考え直すことをまず手がけていく必要がある。

### ユニバーサルデザインの試み—ユニバーサルデザインのプロジェクト

#### 1) バリアフリー・ユニバーサルデザインの普及・推進の取り組み

バリアフリーのみならず、多様な利用者を考慮したユニバーサルデザインの考え方による取り組みが、生活のあらゆる場面で展開された（文<sup>4</sup>）。

その中で、より安全・快適な建築空間のユニバーサルデザインの実現を目指す手法が探求された。

その考え方や事例からみると取り組みのパターンは、普及・啓発のレベルから実践に関わるレベルまで多様である。具体的には、①パンフレット、広報資料の作成、②研修会・勉強会・講習会・講演会・シンポジウムの開催、③（アイデア・実施）コンペ・コンクールの実施、④基準づくり、ガイドラインづくり、事例集、⑤現地ワークショップ、モックアップ（実物大模型）による検証・評価など、概ね共通した内容となっている。

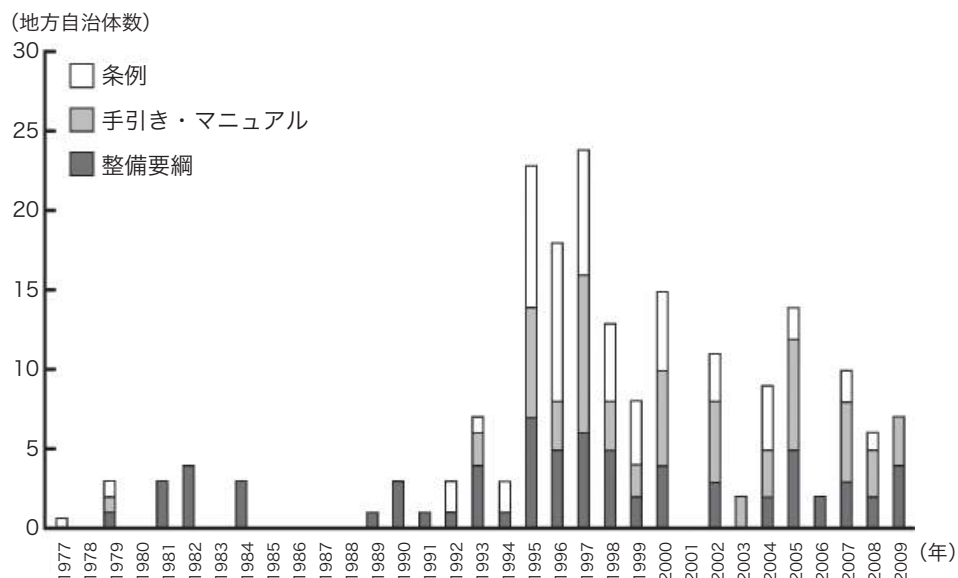


図2 地方自治体での条例、法基準の制定状況  
出典：田中直人「地方自治体におけるユニバーサルデザインの取組み状況と行政担当者の意識」日本建築学会大会学術講演梗概集、2011

## 2) ユニバーサルデザインプロジェクトでの試み

筆者が関わった代表的なユニバーサルデザインプロジェクトでの試みを紹介する。

### □震災復興プロジェクトにおけるユニバーサルデザイン

阪神・淡路大震災を契機に計画された神戸港中突堤アメニティターミナル（カモメリア）計画や倒壊した阪急伊丹駅の再建プロジェクト<sup>（文5）</sup>では計画内容に関して、障害者を含む多くの市民や事業者、行政関係者などによる度重なるミーティングやワークショップを通じ、デザインを確認しながらまとめ提案した。

当事者参加という設計・建設のプロジェクトにおいて多くの知見を得たプロジェクトである。その後の多発する各種の災害の発生状況を見て、日常生活におけるユニバーサルデザインだけでなく、非常時における安全・安心を保障する生活の多様なサービスや仕組みとともに、建築や都市のユニバーサルデザインの必要性を痛感する。震災復興の中で導入すべきユニバーサルデザインを提案している<sup>（文6）</sup>。

### □静岡県におけるユニバーサルデザイン

#### ①県立総合病院のサイン改修（2002年）

度重なる増改築により、わかりにくくなった病院において視覚サインとしての色彩やビクトグラムをはじめ、音サイン、床材の変化による触覚サインなど五感を活用することを試みた。サイン改修前後の変化とそのプロセスを意識調査やアイマークカメラなどを用いて分析し、今後の医療施設における計画への基礎的知見を得た<sup>（文7）</sup>。

#### ②熱海市の観光サイン（2008年）

熱海らしさの景観や国内外からの観光客や昼夜利用を考慮したサインを提案した（写真4）。

以上の特徴は視覚的なものに限定せず、聴覚や触覚を活用したデザインを導入したこと、関係者の参加のもと、検証を行いながら進めるなど、わかりやすさを実現するためのユニバーサルサイン計画であり、それらを踏まえたマニュアルを提案している。



写真4 熱海市の観光サイン

### □神戸市におけるユニバーサルデザイン

神戸市では2004年に筆者らが市民に呼び掛けて発足した「こうべUD広場」に参集した市民によるユニバーサルデザイン点検活動が神戸空港や地下街（サンチカタウン）、新中央市民病院、神戸しあわせの村などで展開されている（写真5）。

主にはトイレ空間やサイン計画を中心に検証され、その多くの意見や提案が施設改善に反映されている。さらに市民向けのユニバーサルデザインの学習の場として連続講座である「こうべUD大学」を開設するほか、こうべUD広場のサポーターによる小中学校への「UD出前授業」を継続して実施している。



写真5 新中央市民病院現場でのUD検証

### □熊本県におけるユニバーサルデザイン

知事を筆頭にユニバーサルデザインを施策の中心に据えて取り組む中、他の普及啓発の資料とともに「ユニバーサルデザイン建築ガイドライン」（2003年）を策定した。これにもとづき、アートポリスによる建築作品である清和文楽邑にてユニバーサルデザインの視点から検証を行い、（写真6）必要な改善を図るとともに（2008年）、新幹線開業に合わせた熊本駅前空間整備では、アートポリス作品を含む施設関係者との空間デザイン会議を介して、ユニバーサルデザインの導入を図っている（2013年）。熊本空港では数多くの検証ワークショップを経て、熊本地場産木材を使用する等、基準通りだけでなく、熊本らしいユニバーサルデザインを試みた。さらに平山温泉では里山景観に配慮し、地場産間伐材による手づくり地域サインの導入を試み、地域活性化図っている（写真7）。



写真6 清和文楽邑でのUD検証



写真7 平山温泉でのUD検証

### □ビッグ・アイにおけるユニバーサルデザイン

国連の障害者10年を記念して計画された国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）は、「高度バリアフリー」の目標のもと、ユニバーサルデザインが導入された。その主要なものは以下のとおりである。

- ①わかりやすい単純明確な平面計画
- ②モックアップ検証によるより使いやすい空間の実現（写真8）
- ③ 五感を活用したサイン計画
- ④非常時における避難空間のバリアフリー



写真8 ビッグ・アイでのモックアップ検証

### □イオンモールにおけるユニバーサルデザイン

熊本県下で最初にユニバーサルデザインを担当して以降、一連の大型商業施設における試みにおいて、ユニバーサルデザインのスパイラルアップを試みている。既存店での利用者アンケート調査、地元障害者団体や市民団体とともに進めたワークショップ、設計および建設工事段階の現場等でのモックアップ検証（写真9）やオープン後の施設評価調査等、各プロセスにおいて、利用者の立場からのより多くの意見を抽出し、これを施設建設に反映できるよう努めている。これらのプロジェクトにおけるデザイン手法の蓄積を一定の基準として関係者にマニュアルとして活用することも行っている。今後さらに地域における商業施設のあり方を含め、今後の多様な属性に考慮したユニバーサルデザイン実現へのモデル開発つなげるべきと考える。



写真9 イオンモールモックアップ検証

### 3) これからの建築におけるユニバーサルデザインの視座

これからの建築において、ユニバーサルデザインを考えていく場合に、いくつかの基本的な視座を確認しなければならない。

#### ①ものの作り方の仕組みを考え直す

企画の段階からのプロセスを大切にする。より多くの関係者の参加・参画のもと、建設的な意見や提案が反映できるようなプログラムが大切である。それぞれのバリアフリーの付け足しの発想では不十分である。ハード面だけでない運営プログラムやメンテナンスなどソフト面の充実を図り、関係付けたところでプロジェクトは展開されるべきである。

#### ②基準だけに満足しないデザイン・技術開発

基準は一定のバリアフリーの質を保証するが、設計者をはじめ関係者はこれを最大目標とせず、利用者や運営条件の理解のもと、基準を超えたアイデアの工夫や提案をたえず心がけるべきである。近年のITやロボットをはじめ、新素材の開発など技術の進展は目覚ましい。これらの成果を具体的なプロジェクトのデザインへ適用し、検証評価を行うなど、たえずPDCAサイクルをまわすことでのスパイラルアップが重要である（図3）

心すべきは、これらの新しい技術に対応し、難しい人々への配慮も忘れないことである。

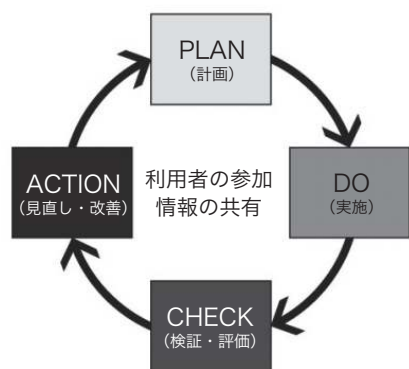


図3 PDCAサイクル

#### ③多様なアクセシビリティの充実

それぞれの歩行条件に応じて、安全快適な空間移動を図る。そのために人間側に付加する補助具等の開発とともに、環境側の基本的な物理的バリアフリーや介助サービス等を充実させることが必要である。

代表的な補助具である車いすについては、手動式のみならず電動式の多様なタイプの開

発が期待される。また点字ブロックについても現行のJISによるものだけでなく、マット状のものなど、多様なものが今後、改良開発されることが期待される。ユニバーサル社会の環境整備において、特別な配慮としてではなく、時と場合の状況変化にも対応した多様なアクセシビリティを実現する当たり前の配慮をめざしたい。

#### ④わかりやすさの五感デザイン

多様な人に必要とされる情報を、視覚に限らず、人間の持つ他の感覚機能の活用を図って実現する。聴覚障害者の場合は聴覚の代わりに視覚や触覚による情報を必要とするし、視覚障害者の場合は逆に聴覚や点字や点字ブロックなどの触覚による情報が役立つ。これらの考え方は特定の障害者だけを対象に考慮したものではなく、他のすべての利用者に対しても何らかの空間構造や場の意味に関するメッセージがある。五感を活用することには、ユニバーサルデザインとして展開する多くのヒントが秘められている（文8）。

とりわけ、わかりやすさをすすめるサイン計画に応用できるが（文9）、これにかかわる材料や評価システムの開発が必要と思われる。

### ユニバーサル社会へむけて

本稿では普及しつつあるユニバーサルデザインの建築への導入に関し、筆者の試行した方法や内容を例に考察した建築空間のユニバーサルデザイン（文10）は、これまでの福祉のまちづくりとしてのバリアフリーと異なり、①配慮すべき対象者の拡大、②国や自治体の基準による一定の空間性能確保事例の拡大、③関連する材料や技術工法の発展、④ユニバーサルデザインによる関係者の参加の仕組みの拡大、⑤直接障害者等にかかわらないデザイン領域での取り組みなどが見られる。

しかしユニバーサルデザインの概念は理解されても、具体的な建築空間での配慮方法や内容が定かでない部分も大きい。また障害は環境との関係によって生まれると言われるが、どのような環境を実現すべきか、多くの身体的特性や建築に関わる配慮事項が十分に把握できていない部分も大きい。

そのためには絶えず利用者の立場や視点を忘れず取り組まなければならない。モック

アップ（実物大模型）の活用に限らず、出来たものを評価検証する方法についても合理的な改善が必要である。

ユニバーサルデザインというデザインの話ではなく、参議院では2004年「障害者や高齢者が安心して生活できるよう施設や設備等のバリアフリー化を進めていくのみならず、更にその考え方を深めて社会の制度や仕組みにおいても、障害の有無、年齢等にかかわらず、国民一人ひとりがそれぞれ対等な社会の構成員として、自立し相互にその人格を尊重しつつ支え合う社会、すべての人が安心して暮らすことができ、その持てる能力を最大限に発揮できる社会」をめざして議決されている。

このユニバーサル社会への取り組みは建築のみならず、生活のあらゆる場面で取り組まれるべきものである（文11）。建築に限定しない多くのユニバーサルデザインの取り組みは、国はもとより、地方自治体や事業者、そして一般市民までに普及しつつある。

建築・都市のユニバーサル社会の環境整備としての課題はまだ多い。法整備に基づくだけでなく、多くの関係者および利用者の理解とたゆまない努力が「真にやさしい人間社会づくり」の礎につながることを期待したい。

（たなか なおと）

#### 【参考文献】

- 文1) 田中直人「福祉のまちづくりデザイナー 阪神大震災からの検証」学芸出版社、1996
- 文2) 田中直人「地方自治体におけるユニバーサルデザインの取り組み状況と行政担当者の意識」日本建築学会大会学術講演梗概集、2011
- 文3) 荒木兵一郎、藤本尚久、田中直人「図解バリアフリーの建築設計 福祉社会の設計マニュアル」彰国社、1981
- 文4) 田中直人、川崎和男、エドワード・スタインフェルド4、外山義「ユニバーサルデザインの考え方」丸善、2002
- 文5) 国土交通省監修、田中直人他「究極のバリアフリー駅をめざして 阪急伊丹駅における大震災から再建までの軌跡」大成出版社、2002
- 文6) 田中直人他「阪神・淡路大震災復興計画への福祉のまちづくりの視点からの提案」兵庫県阪神・淡路大震災復興本部総括部計画課、1995
- 文7) 老田智美、田中直人「総合病院のサインに関する来歴者と職員の意識比較および施設構成からの考察 医療施設およびサイン環境のユニバーサルデザインに関する研究 その3」日本建築学会大会学術講演梗概集、2008
- 文8) 田中直人、保志場国夫「五感を刺激する環境デザインーデンマークのユニバーサルデザイン事例に学ぶ」彰国社、2002
- 文9) 田中直人「ユニバーサルサイン」学芸出版社、2009
- 文10) 田中直人「建築・都市のユニバーサルデザイン」彰国社、2012
- 文11) 田中直人「福祉のまちづくりキーワード事典 ユニバーサル社会の環境デザイン」学芸出版社、2004

# 第61回 工高生デザインコンクール

## 設計課題／みんなの図書館

【応募校数】19校 【応募作品数】84点  
【締切日】平成27年9月30日 【審査会】平成27年10月17日 【表彰式】平成27年11月7日

## 審査総評

審査員長 木下 光

61回目を迎えた工高生デザインコンクールは、「みんなの図書館」を設計課題として、全国19校から、84案の応募がありました。この課題は、「図書館」ではなく、「みんなの図書館」であることがポイントです。みんなを一般的な顔の见えない市民としたのではなく、具体的な誰かを想定することが、地域固有の図書館が生まれる必要条件であったといえます。

84案を見ながら、「誰のためにつくるのか」から提案する図書館を考えた人、あるいは提案したいと思った場所から、「誰がそこで本と出会うのか」を考えた人があったように感じました。その観点からすると、多くの案が、場所×人＝空間という建築に備わっている力を創造する素地を持っていました。インターネットによって膨大なアイデアやデザインを閲覧できる今日、創造性と編集性の境界は曖昧になりつつありますが、このデザインコンクールが手書きにこだわる理由の根幹には編集能力と異なり、創造性とは物語を書く人間の力だと考えていることがあると思います。入選した10案以外にも、素晴らしい物語がいくつも散見されました。しかし、惜しくも入選できなかった案には、場所と人が本とどのような関係を紡ぐのか、言葉のレベルでは可能性がありながら、そ

れを空間化するという十分条件がうまくいっていないという点において、残念ながら評価されなかったと思います。

入選案は、図書館が立地する場所や地域の固有性を生き生きと空間化しただけでなく、時間への意識が高く、図書館がいつ利用されるのかという時間、あるいは図書館が育てられていくプロセスとしての時間など、時間にもかたちがあるのだということを考えさせられました。21世紀の建築が空間×時間の中に存在することを、若々しい感性から教えられたと思います。

建築の本質とは、建築が持つ統合性と場所性を空間化する多様性という一見すると相反する行為を物語によって包むことにあると思います。物語を書くことにまっすぐ取り組んだ人が多かったことは最も嬉しい発見でした。今回、空間化がうまくいかなかったとしても、チャレンジすることを是非、続けてほしいものです。

最後に、社会でも十分通用するレベルの高い最優秀案や優秀案等の図面を通して、学生諸君のたゆまぬ努力と共に、熱心に指導された先生の姿を拝見することができ、設計教育におけるコーチングの重要性とその価値をあらためて痛感しました。心より敬意を表したいと思います。

### 【審査員長】



#### 【学歴】

1968年 福岡県生まれ  
1992年 京都大学工学部建築学科卒業  
1994年 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修了  
1996年 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程中退

#### 【経歴】

1996年 関西大学工学部建築学科助手  
現在 関西大学環境都市工学部建築学科准教授

#### 【主な作品等】

日本建築学会論文奨励賞（2005年）、彦根の家（ダイキンエアスタイル優秀賞、2008年）、沖縄の新たな発展につなげる大規模基地返還跡地利用計画提案コンペ入選（2013年）、宮島口まちづくり国際コンペ優秀賞（2015年）など

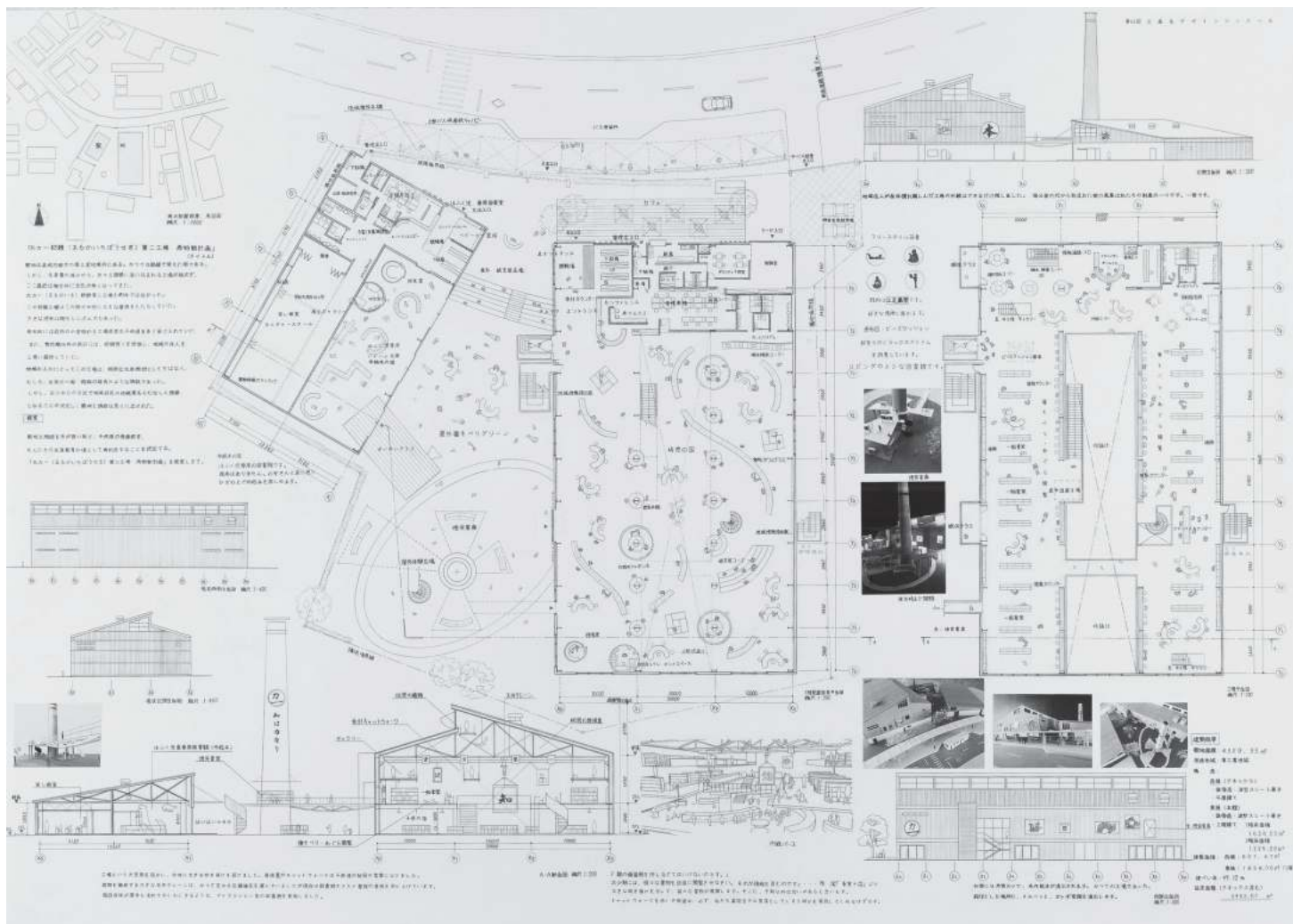
### 【審査会】



### ●審査員（50音順・敬称略） 一職場は平成27年10月当時―

一階 聡之／(株)日建設計設計部門設計部長  
上羽 一輝／(株)東畑建築事務所設計室長BIM設計リーダー  
大平 滋彦／(株)竹中工務店大阪本店設計部設計第4部長  
神谷 浩司／(株)大林組大阪本店建築事業部建築設計部課長  
河崎 昌之／和歌山大学システム工学部環境システム学科准教授

木下 光／関西大学環境都市工学部建築学科准教授  
所 千夏／アトリエCK代表  
橋本 修／(株)昭和設計建築設計部部長  
南浦 琢磨／(株)安井建築設計事務所大阪事務所設計部設計主幹  
矢田 朝士／ATELIER-ASH主宰



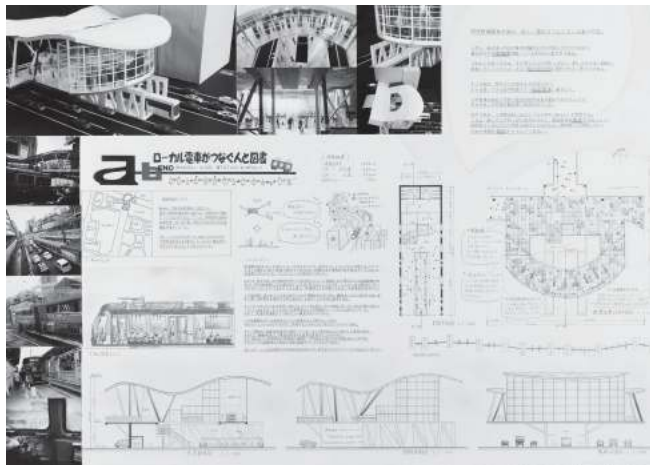
## 入選・最優秀賞 田中聖也・岡田直樹

広島市立広島工業高等学校 3年

私は本が大好きです。図書館の設計は色々な要素が複雑に絡み合い非常に難しいと同時に、無限の夢を実現できる建築物であると思います。広島はマツダという自動車メーカーの本社があり、それに伴い多くの下請け工場があります。私たちは工場の空間的な特性である「大空間」に目を付け、近所の廃工場の再利用に挑戦しました。管理エリアと開放エリアのゾーニング、各種アトラクショナルな仕掛け等々、計画は難航しました。しかし苦勞の末まとまったプランニングは私たちの力作です。新しいコミュニティの拠点として機能することを切望します。工高生デザインコンクールの作品を提出して通知を頂くまでの間はとても長く、不安と期待の日々を過ごしていました。先生から結果の発表があり、最優秀賞だと聞いたときは、喜びより安心感の方を強く感じました。私たちの学校は先輩方も血の滲む努力で過去4年連続最優秀賞を獲得しています。5年と言う節目の年に大役を果たせたと安心すると同時に、今までの苦勞一つ一つが鮮明に思い出され、喜びが湧き上がってきました。今までの苦勞、努力が実った結果だと思っています。今後の建築の学習に活かしていきたいです。

## ▲審査コメント/木下 光

田中聖也君・岡田直樹君の「丸カー紡績第二工場 再始動計画」は地方都市に役割を終えて残っている煙突が印象的な工場を図書館に再生する提案である。二棟の建物のうち小さな棟は、赤ちゃんとその親のための平屋を活かした図書館とし、大きな棟は吹き抜けを介した二層構成とし、構造である柱周りを上手に使い、多様な読書・図書スペースをつくっている。工場の内部空間だけでなく、二つの工場の間の煙突と空地の計画も秀逸である。工場間の角度のずれを活かし、多様な屋外空間が設計され、工場開口部とテラスを一体的に計画したことで、内部と外部が連続する魅力的な空間がつくられている。そして、靴を脱いで利用する図書館へ再生するだけでなく、地域を支えた工場であったという歴史を随所に残す細やかな心配りも素晴らしい。利用者は色々な場所で本と触れあうだろう。バス停を含む図書館へのアプローチまで図書館の計画に組み込まれており、まさに工場が地域コミュニティの場になっている。そして、図面表現も見事である。A1の紙面すべてを使い切って、作者の思い、場所に紡がれている物語を空間化することに成功しており、図書館の機能を備えたみんなの公共空間が誕生している。



### ▲審査コメント／南浦琢磨

スマートフォンなどによるネット環境の発展により、人々は本を読む機会を失っている。その影響で、図書館を活用する人々が減少しているという作者の見解が発想の原点である。

人々が図書館をより多く活用するために、計画地は通勤や通学など賑わう大阪の交通の結節点・阿倍野を選定している。その中心といえる交差点に架かるabenoの「a」の文字を象った印象的な歩道橋に、作者は「b」の文字を象りつなげる「遊び心」たっぷりの配置を提案した。発展し続けているこの街の魅力、多様な人々の往来によって発せられるこの地域特有の刺激、下町地域へとつながる阪堺電車が醸し出すノスタルジー、このような街の個性をうまく感じ取り、街に対しての力強いう

入選・優秀賞 池 美優 大阪市立工芸高等学校 3年

「みんなの図書館」がテーマだということで、普段からよく図書館を利用する人だけではなく、あまり利用しない人にも足を運んでもらうことが大切だと思いました。

そこで、待ち合わせや、時間潰しに気軽に立ち寄れるような図書館であれば、より多くの人に足を運んでもらえるのでは、と思い設計を進めていきました。

完成に行きつくまでに、何度も試行錯誤し、考え直した作品だったので、優秀賞を頂く事が出来てとても嬉しかったです。

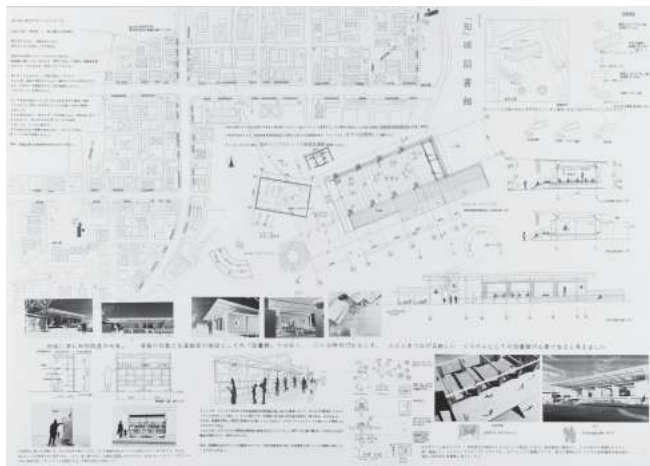
ですが、この優秀賞は自分一人だけの力ではなく、先生方のご指導や家族、友達の支えや協力があってこそその賞だと思っています。

これからも周りの人への感謝を忘れず、様々なことに挑戦し成長していきたいです。

ンドマークとなる「かたちづくり」を実現した。路面電車の上空に浮遊感あるボリュームをつくり、リズム感ある軽快な屋根を与え、都心のポテンシャルに負けない人々を引付ける印象深いデザインとしている。

また、路面電車内を「うごく閲覧室」として橋上の図書館から一連の動線の中につなぎこんだ発想は、豊かなものとして評価できる。

この作品のほかにも駅とつながる案が複数あったが、計画地選定、造形のおもしろさ、電車を取り込んだ計画、そして作品紙面から伝わる鮮やかで元氣な表現が決め手となり、審査員からは多くの評価を得た作品となった。「遊び心」たっぷりの柔軟な感性と、豊かな表現力のある若い作者の将来に期待したい。



### ▲審査コメント／所 千夏

図書館を特定の場所にハコとしてつくるのではなく、地域をまるごと図書館としてとらえた作品である。公園という地域資源を閲覧場所とし、開架書架は地域のメインストリート沿いに、大胆かつオープンに配置。図書館の「情報」をインフラととらえた魅力ある作品だ。地域に潜む知的財産を、水や電気やガスのようにつなぎ、それらを介して人と人をつなぐというコンセプトを、地域の付近見取図と、屋台のような開架書架を提案することで表現している。冒頭物語調の文章からも、提案したい図書館イメージと作品への思いが強く感じられる。ドローイングも模型も図面表現のレベルはかなり高い。

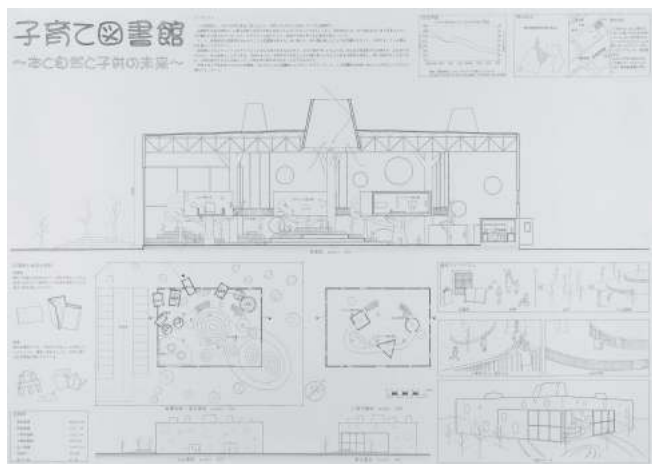
入選・優秀賞 藤井真樹・伊藤勇哉

広島市立広島工業高等学校 2年・同校 3年

「みんなの図書館」という設計課題を聞いた時、最初は建物の中にたくさんの本が並んでいる普通の図書館を想像しました。しかし、人と人との繋がりが薄れつつある現代で、その繋がりを強め、また深めていきたいという思いがありました。何とかして「図書館」という昔からある建物の機能を利用して住民同士を強く繋げることができないかと、いろいろ模索しました。本計画では公園と公園を結ぶ街路が閲覧スペースとして機能します。この考えに至るまでには数多くのエスキスが必要でした。何とかして新しいシステムを提案し、建築と融合させたいという気持ちを形にでき、とても満足することができました。ぜひ、実現させたい提案です。

優秀賞の通知を受けた時は予想を超える順位だったので、嬉しさを上回る驚きがありました。ありがとうございました。

少し気になるのは、この提案の背景に潜む様々なアイデアが、図面から必ずしも読みとれないことだ。たとえば公園に配置する建築デザインのコンセプト。広い畳の閲覧室、公園に向かって開かれた広縁と階段。管理カウンターやプレゼンスペースの位置と向き。なぜそのデザインなのか、人と人をつなぐ図書館として重要な建築デザインの魅力表現が不足気味だ。案を練り上げる中で考えたアイデアはもっとあったに違いない。他にも進化の芽を潜ませたこの作品をそのまま眠らせず、もう一度振り返って磨いてほしい。きっと今後二人が生み出す作品たちをよりいっそう輝かせる糧となるに違いない



#### ▲審査コメント／上羽一輝

まず、この作品を見て思ったのは、図面全体に整然とした纏まりを感じるとのことであった。それは、カラーの模型写真や着色されたパースが添付されておらず、図面としてのトーンが纏まっているということもあるが、バランス良くレイアウトされている図それぞれに、作者の思いが優しいタッチで存分に表現されているからであろう。

中央を占める断面図には、本に親しむ色々な場所が描かれており、外壁の丸窓と相まってポップな楽しさを感じさせる構成となっている。

また、平面図にも丸、三角、四角と様々な形状と機能を有するボックスが鑲められているが、その配置されているバランスが空間全体に粗なエ

#### 入選 泉 杏佳 静岡県立科学技術高等学校 3年

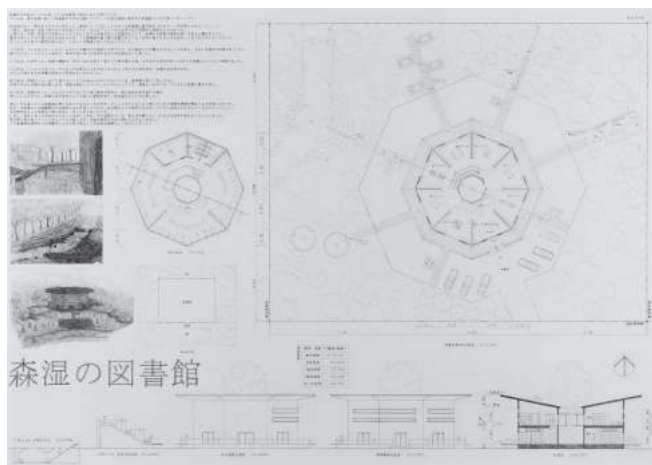
現代に生きる、これからを担う子どもたちは、自然と接する機会が少なかったり、本を買ったり、借りたりして読むことをしなくなってきました。本をめくって読んでいくすばらしさ、大切さを、自然を感じながら気づいてほしいと思い、この図書館を考えました。まるで自然の中にいるような感覚になるこの図書館は、子どもたちにとって特別な居場所になり、大人たちも安心して子どもを預けることができる子育て図書館になるでしょう。

私の作品を数多くの作品から選んでいただきとても嬉しいです。ありがとうございます。

高校最後のコンペティションの参加だったのと、夏休みからがんばった作品なので思入れもすごいです。協力していただいた先生や親、友達のおかげでこの作品を作り上げることができました。

リアと密なエリアを創り出しており、子どもから大人までが自分の居場所を探索する多様な魅力的な空間を創造しているように感じ、高く評価させていただいた。

立体的な模型でこの空間を見てみたかったという思いと共に、建物内部に囚われず外部空間にも作者の思いが展開されているシーンを見てみたかったという思いもあるが、実際の少子高齢化や子どもたちの活字離れに注視して、保育施設との融合を掲げて敷地を特定しているコンセプト自体が、この案の現実味をより高めており、一度実際にこの空間で本を読んでみたいと思わせてくれている作品である。



#### ▲審査コメント／神谷浩司

自治体に代わり、図書館運営に乗り出す民間企業が現れた。そこには、本自体のみからでなく、図書館に集まる人、そこで起こる出来事からも学んでいくべしという発想があり、これまでの各運営体が向き合うことのなかった地域や町の発展への期待もある。今回の課題は、そのような社会の要求に即した新しい図書館の提案を求めている。

「森湿の図書館」は静かな森の中に、メインとなる開架図書館に加え、複数の読書スポットを併設した施設だ。システムの構築や、建物用途のズレ・変容といった提案が多い中、この作品は読むという行為そのもの

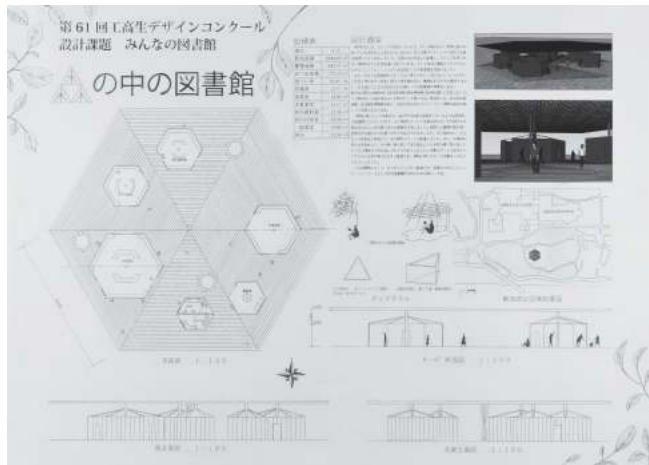
#### 入選 植田 豊 山梨県立甲府工業高等学校 2年

私は本が大好きです。暇さえあればいつも図書館や本屋に入り浸っています。ある時、いつも通り本を読んでいると、ふと違和感を感じて読書に集中できないことがありました。どうにかこのモヤモヤが解消できないかと考えた私は、外に出て本を呼んでみることにしました。川辺のベンチに座り本を読んでいると室内より本の場面をイメージしやすくなりました。そのような出来事から、外に出て本を読むことの良さを知ることができる建物をつくりたいと考え、この図書館を設計しました。

先生から入選したとの報告を受けたとき、驚きのあまり実感がわきませんでした。しかし、入選結果の用紙を渡されたことにより実感と喜びがわいてきたことを覚えています。より良い作品を産み出そうと土日に部活をした苦労が報われたことを嘯み締めました。毎日夜遅くに帰ってくる私を、心配して待ってくれていた母と、アイデアが上手く出なかった時、的確なアドバイスをくださった先生に恩返しできたことが何より嬉しかったです。

について掘下げ、寝そべりながら、またはせせらぎに耳を傾けながらなど、本物の自然と向き合っ読書体験できる数種のインターフェースを提案し、他の案と一線を画している。

小説風に綴られた設計概要、デジタルと色鉛筆による彩色を組み合わせた風景画のようなパース、これらが相まって独特の詩的な世界観を感じることができる。私自身、作者の世界に分け入って、自然と触れ合いながらの読書を実際に楽しみたいと思った。



### ▲審査コメント／一階聡之

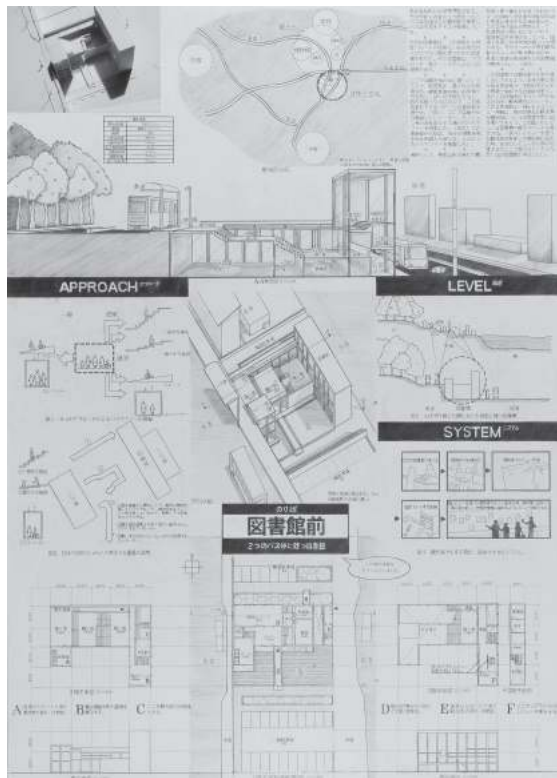
作品が表現されている画面全体からは、作者の自然への「想い」が、そこはかとなく感じられるものとなっています。画面を建築が埋め尽くすのでは無く、適切にデザインされようとした「余白」が、「光」「音」「風」「緑」「水」などの感覚を表現しているようにも見受けました。作品は、正三角形ユニットによる正六角形のモチーフが卓越した印象を受ける建築であります。前川國男設計の横浜市中心図書館も正六角形をメインモチーフとしたプランであり、天井パネル等は正三角形のユニットで構成されています。真円や正方形などの原初的な形状は、堅さが秀

### 入選 笠原楓恋 群馬県立前橋工業高等学校 3年

現代社会では、仕事によってストレスを抱えている人が多いです。そんな人たちが休日に図書館に行くことで少しでも時間を忘れ、リラックスできるような場所を設計したいと思いました。敷地は、群馬県民の文化的レクリエーション活動の拠点とされている「群馬の森」に設定しました。森の中の木陰で読書をしているような雰囲気の図書館にしたかったので、正三角形のユニットを組み合わせ、その間から木漏れ日のように光が降り注ぐ大屋根を計画しました。また、大屋根の部分は半屋外とし、木の幹に寄り添って本を読むように各室の壁に寄り添って、テラスに腰掛けて本を読んでもらう計画としました。この図書館によって、日々のストレスから解放され、家族の大切なコミュニケーションツールとして本や図書館が活用されれば嬉しいです。まさか入選しているとは思ってなかったので、先生から報告を受けた時は、信じられませんでした。これからも設計の仕事に携わっていくので、今回入選したことを1つの自信にして、よりよい設計をしていきたいと思っています。

でて感じられますが、正六角形は、無限の広がりを感じさせる自然界に存在する形状です。図書館は、常に進化し、増築などの成長を意識せざるをえない施設でもあります。提案すべき施設と採用したモチーフの符合も感じられました。

無限とも思える「自然」の中で、悠久の広がりを感じさせる清々しい作品であることに、作者の感性と優しさが感じられました。今後の精進に期待いたします。



### 入選 北岡彩那 三重県立伊勢工業高等学校 3年

今回「みんなの図書館」を考えると、実際に見に行きアイデアを練ろうと思い、夏休みの一日を利用して行ってみました。その時、初めて観光客という視点で図書館を見て、図書館イコール地域住民のためという概念に疑問を持ちました。初めて訪れた人（観光客）でも使える図書館こそ「みんなの図書館」と言えるのではないだろうか。そう考えた私は地元の伊勢という観光地をモデルに図書館を制作していきしました。多くの観光客がバスを使って伊勢を巡ることに對して、バス停の位置がわかりづらい現状を考慮しながら、観光地についてもっと知ることができる場として考えました。この度は入選という賞をいただき、ありがとうございます。先生から入選という結果を聞いた時、とても安堵し、歴史あるコンクールで入選できたことに感動しました。このコンクールに参加したことで得たものはとても大きかったように思います。他のコンクールに比べて、製図の基礎がちゃんとできているかどうか重要視されていたので、高校3年間で培ったものがしっかりとできたか確かめる機会となりました。

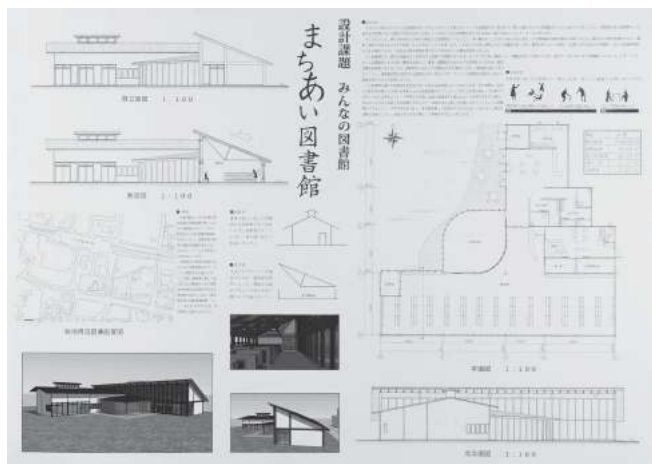
### ▲審査コメント／矢田朝士

本作品は、地域住民以外の人達にも開かれた図書館の提案である。その対象は観光客であり、しかも利用者（使用目的）の異なるバス路線の交点に乗り換え兼待合い所として図書館を設けるという面白い計画である。

北岡さんは、「施設環境の調整」「建築空間の構想」「建物運営システムの計画」と総合的かつ丁寧に考えて計画している。本来交通機関にとってマイナス要因である道路のレベル差を生かして人の動きを建物の空間的な楽しさに変換しつつ、別々のバスル

ートをスムーズに結びつけ、そこに地域の情報発信の図書館という新たな機能を付加している。

そして、私はこの構想の持つ可能性にとっても惹かれた。図書館を利用する旅行者の本のレビューは住民と旅行者とに新たな接点を持たせることが出来、また外部の人の視点によってこの地域の持つ価値を再発見出来る可能性があり、地域に新たな活力を生み出す切っ掛けとなるのではないだろうか？十分優れた計画ではあるが、建築的にまだ改良の余地がある。周囲に豊かな自然が広がる環境で、折角のロケーションの良さが生かしきれていない。諸室のボリュームを再検討し、また外部への眺望や屋上等の空間を有効的に使い、建物を利用する楽しさを創りだせば更に魅力が増すだろう。



#### ▲審査コメント／橋本 修

この作品は、昨年世界遺産に登録された「富岡製糸場と絹産業遺産群」の文化遺産の点在する群馬県のJR伊勢崎駅の南側という具体的な敷地・環境の中で、電車を待つ待合機能を活かした「まちあい図書館」として計画されている。

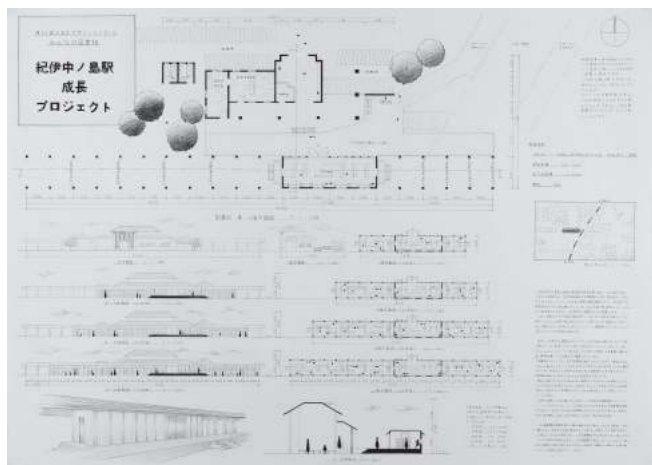
養蚕民家の特徴である棟上に換気設備（ヤグラ）を備えた「越屋根」を利用した環境計画、開放的で大きな空間を確保する為の「張弦梁」を利用した構造計画、地域の交流の場としての多目的室の設置などバランスの良い建築計画が評価された。

#### 入選 鈴木千広 群馬県立前橋工業高等学校 3年

既存の図書館の現状を想像し、どのような工夫をすれば利用が増えるのかを考えました。そこで、誰もが利用するであろう駅近くに図書館をつくることで、本に触れることが当たり前になると考えました。電車を待つ少しの時間に、友達との待ち合わせの時間に、そんな些細な時間から本に触れてもらい、本を手取る時間を増やすことを目的にこの敷地を選定しました。構造は、アットホームな雰囲気にするため木造とし、書庫・閲覧室のための大きな空間をつくるために張弦梁構法を採用しました。また、伊勢崎市では養蚕業も盛んであったことから、養蚕業民家の形態である越屋根を取り入れました。中心には、時間によって利用方法が変化する多目的室を設け、幅広い年代の方から愛される場となるよう計画しました。入選通知を受けた時は、ただただ驚きでいっぱいでした。色々とおアドバイスや指摘してくれた先生方のお陰で頂けた賞だと思っているのでとても感謝しています。今回の経験で得たものを自信にし、今後活かしていきたいです。

次のステップとしては、駅からのアプローチのあり方、建物との有機的な関わり持つ外部空間の提案や景観的な配慮などの工夫があれば駅前施設としてより魅力ある空間が生まれると思われる。

第一印象として、わかりやすいコンセプト、機能的な建築計画、バランスの良い紙面構成、丁寧に仕上げられた図面・パースや文字など、鈴木さんがこの作品に込めた思いが表れており好感が持てる。今すぐにでも実現できそうなこの「まちあい図書館」が、駅前の街づくりのひとつとして盛り込まれ、歴史遺産を併せ持つ魅力的な街とてますます発展していけばいいと願っている。



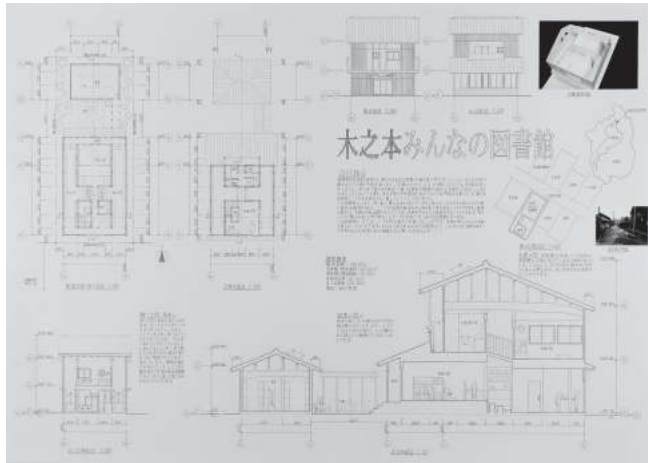
#### ▲審査コメント／河崎昌之

成長する図書館は、鉄道の軌道という、歌にある、どこまでも続いていきそうな適地に提案された。80余の応募の中で、時の経過をデザインした作品は僅かであり、この点にまず、審査員は関心をよせた。廃止されたローカル線の軌道跡に、15年後、小さな基本ユニットが建てられる。あわせて、60年後に向けての増築用の柱と屋根が用意され、以降15年間隔で拡張が繰り返される。その間、親、そして祖父母となった来館者の、幼い読み手との利用が並行する。壁面を兼ねる本棚は、市民の手で順次設けられ、蔵書もまた、彼らの持ち寄りで充実がはかれる。

#### 入選 辻 七加 大阪市立工芸高等学校 3年

今回の課題が「みんなの図書館」だと聞いた時、従来の静かで重たい雰囲気の図書館が好きだった私は、なかなかテーマが決まらず設計が進みませんでした。そこで「みんなの」という部分に注目して、その地域の人達自身がつくっていく、その地域の人たちのための図書館を提案しました。提出してから、もっと良い表現方法があったのではないかと、もっとわかりやすい文章の方が良かったのではないかと、と考えていたので、入選通知を受けた時は驚きの方が先にきて、少ししてから嬉しさを感じました。今回入選できたのは、自分の力だけではないと思うので、周りの方々への感謝を忘れずにもっと良い作品をつくっていけるように頑張りたいです。

この、空間の拡張に市民の成長と関与を重ね合わせることで、それが“みんな”への作者の思いであり、人と建物が一体となり地域社会を醸成していくという、提案のしっかりした背骨となっている。やわらかな筆致と色調で、図書館の拡張が穏やかに表現されている。節目ごとの拡がり比較し易いレイアウトである。だがそこには、同型反復ゆえの単調さも表れている。残念ながら、立・断面は、平面の直線的な展開をそのまま立ち上げた結果に留まっているように見受けられた。今後、より立体的なアプローチにも取り組んで欲しい。



### ▲審査コメント／大平滋彦

伝統的な街並みに残る町屋が改修され、蔵に眠っていた古書と、町の人々が持ち寄った本が並べられる。ここに住む夫婦は訪れる人を迎え、子どもたちに読み聞かせる。本を通じて町の人々がつながり、町の歴史が語り継がれてゆく、という「物語」が素直に心に響いた。伝統的な街並みの中にどんな建物をつくるかということよりも、一つの「物語」を紡ぎ出すことで生まれた図書館であると思う。

書架が並べられる2本の通り土間は、吹き抜けの細長い空間であるが、内部の小部屋を包み込みながらつながることで、図書館としての一体感を小さな建築の中に巧みにつくりだしている。人々は、中庭と通りの

### 入選 矢口くるみ 名古屋市立工芸高等学校3年

私は高校生活の中で図面を手書きする技術を磨いてきました。そんな技術を試してみたいと思い、工高生デザインコンクールに挑戦しました。

「みんなの図書館」ということで、本が大好きな私にとってはたまらない課題でした。周りに本の世界を語り合える友達が少なく寂しかったので、たくさんの人に本の世界を感じてもらい、共有したい!!という私自身の夢を叶えるため「木之本みんなの図書館」を設計しました。

このコンペティションを高校生活最後にしようと決めていたので、とても思い入れがあり、全力で取り組んだ作品だったので、入選したと聞いた時は心が止まるくらい驚いて、涙が出るくらい嬉しかったです。

私の本への愛が評価されたと思うと今でも涙が出てきます。審査員の方々にこの愛が届いていたら嬉しいです。

双方に視線が通うこの魅力的な通り土間を回遊しながら、気に入った本に出会うことができる。蔵の中や中庭もまた、本に親しむ素敵な場所となっているが、人の動きや声が伝わりそうなスケッチを付加することで、そこに流れる時間や空気感が表現されれば、より効果的であったと思う。入選となった作品の中では最も小さい規模であるが、小さな町に本当に求められる図書館の在り方と、それを守ってゆく人や、歴史の継承、街並みの保全など、取り組んだテーマは非常に大きく意義深いものであった。これからも「物語」が紡がれてゆくことを期待したくなる、心温まる作品である。

※入選者の感想文は誌面の関係上、要約して掲載いたしました。 写真撮影：河合止揚（アトリエ リベラ）

### ●応募学校

- ・北海道名寄産業高等学校
- ・秋田県立横手清陵学院高等学校
- ・岩手県立水沢工業高等学校
- ・茨城県立下館工業高等学校
- ・群馬県立前橋工業高等学校
- ・東京都立田無工業高等学校
- ・神奈川県立神奈川工業高等学校
- ・山梨県立甲府工業高等学校
- ・静岡県立科学技術高等学校
- ・静岡県立天竜高等学校
- ・名古屋市立工芸高等学校
- ・三重県立伊勢工業高等学校
- ・三重県立津工業高等学校
- ・大阪市立工芸高等学校
- ・大阪市立都島工業高等学校
- ・堺市立堺高等学校
- ・鳥取県立鳥取工業高等学校
- ・広島市立広島工業高等学校
- ・熊本県立熊本工業高校

### 【表彰式】



### ●審査記録

- 10月6日 予備審査：応募作品について応募規定違反の有無を調べ、その検討を行った。検討の結果、一部作品に要求図面の不備等が見られたので、予備審査結果を審査会に報告することとした。（教員委員会・工高生教育小委員会）
- 10月8日 審査会：欠席の審査員2名による事前審査を行った。
- 10月15日 審査会：欠席の審査員1名による事前審査を行った。
- 10月16日 審査会：欠席の審査員1名による事前審査を行った。
- 10月17日 審査会：審査委員6名により当日審査を行った。（審査時間13：30～16：10）

### ●審査経過

審査を開始するにあたり、本年度の応募校数、応募作品数の報告を行い、一部作品の要求図面の不備に関して予備審査報告がされた。その結果、全作品を本審査の対象として審査を行い、条件違反等に対する判断はその都度適時行うこととした。続いて、審査委員長代理より審査方針の確認があり、審査に入った。

#### ■1次審査（審査委員6名）84作品→23作品

全応募作品について、審査委員1名につき10作品を選んで投票し、事前審査の票を加え集計した。

| 得票  | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
|-----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 作品数 | 2  | 2 | 1 | 2 | 1 | 0 | 3 | 3 | 4 | 5 |

票を得た23作品を1次審査通過とした。（審査時間13：30～15：00）

#### ■2次審査（審査委員6名）23作品→入選10作品

1次審査通過作品のうち、得票数1の作品について、

投票者より理由の説明がなされた後、次のステージに残すべきかを審議した。その結果残った作品と得票数2の作品について同様に審議し、続けて得票数3の作品について・・・と段階的に審議を重ね、合計10作品を決定し2次審査通過・入選とした。その際、条件違反のあった1作品については協議の結果選外とした。（審査時間15：15～15：50）

#### ■3次審査（審査委員6名）

入選10作品→最優秀作品1点、優秀作品2点引き続き、優秀作品3点を選ぶに当たり、入選作品10点について審議し、最優秀1点、優秀作品2点を決定し審査を終了した。（審査時間15：50～16：00）  
会誌「建築と社会」への審査経過報告掲載にあたり、10点の入選作品について審査委員が分担してその評価を誌面にまとめることを約束し、審査会を終了した。（審査会終了時刻16：10）

# チラシ封入サービスのご案内

会員限定

貴社の広告チラシを「建築と社会」発送と“同封”しませんか。  
チラシをご提供下さい。

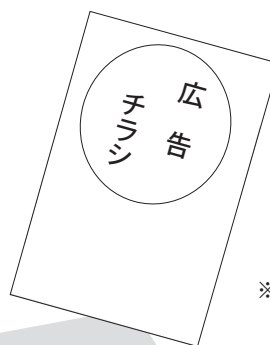
料金 1回につき **20,000円** (税別)

当協会でチラシをプリント（カラー片面）した場合20円／枚必要です。

申し込み方法：申込用紙にご記入いただきFAXまたはE-mailでお送り下さい。

お問合せは（一社）日本建築協会（担当／内山）まで

**TEL.06-6946-6981 FAX.06-6946-6984 E-mail:jigyoka@aaaj.or.jp**



※チラシサイズ：A4版  
パンフレット：20頁程度迄

申込用紙 きりとり

|                       |                  |     |
|-----------------------|------------------|-----|
| 会社名                   |                  |     |
| ご連絡先<br>(住所・担当者名・部署名) | 住所<br>担当者名       | 部署名 |
| ご連絡先 電話番号・E-mail      | 電話番号<br>E-mail : |     |

## 企画広告

## 新製品レビュー

## 介助のための L字型子扉が付いた 居室トイレ用ドア

### クロスドア®



クロスドア

#### 小松ウオール工業株式会社

<http://www.komatsuwall.co.jp/>

小松ウオール工業は、各種間仕切・鋼製軽量ドア・壁装パネルの設計・製造・販売・施工を通じて、お客様のニーズにお応えした快適空間作りのお手伝いをしております。

- 本社  
石川県小松市工業団地1-72  
TEL (0761) 21-3131
- 大阪市場開発部  
大阪市西区土佐堀2-2-4  
TEL (06) 6447-0421
- 大阪支店  
大阪市西区土佐堀2-2-4  
TEL (06) 6447-0971
- 大阪第一支店  
大阪市西区土佐堀2-2-4  
TEL (06) 6447-9261

## 誰もが使いやすい ユニバーサルデザイン

病院では、プライバシー重視の観点から病室の個室化が進んでいます。そして、排せつの自立を促し、ADL（日常生活動作）レベルの維持・向上を図るため、個室化した病室にはトイレが一つずつ配置されています。

病室トイレは、さまざまな病状の患者が利用します。そこで、単独で歩行可能な患者はもちろん、介助者を伴ってトイレを使用する車いすの患者、あるいは一人で用を足せる車いすの患者など、あらゆる人にとって今まで以上に使いやすく、介助しやすいユニバーサルデザインの病室トイレを目指して開発したのが「クロスドア」です。



介助のために子扉も開いたクロスドア(上)と通常の使用状態(下)

## 2連引き戸+開き戸を L字型にレイアウト

ドア形状は、開口部を2方向にL字型にレイアウトしたものです。

メイン扉に2連引き戸を採用しました。というのも、バリアフリードアには横に引いて開ける引き戸タイプが最適で、2連引き戸ならば従来の引き戸の約半分の戸袋部で納めることができ、居室スペースを有効活用できるからです。

また、介助用の子扉はシンプルで使いやすい開き戸を採用しました。

## 患者の状態に応じた 使い方が可能

「クロスドア」は「車いすを使用し、介助者の助けが必要な患者」「車いすを使用するが介助の必要がない患者」「単独で歩行可能な患者」といった具合に、病状が変化していく過程に応じた使い方が可能です。(右図)

## 患者目線で独自の工夫 子扉の開閉も楽々

「クロスドア」は車いすに乗る患者が一人でも使いやすいよう、利用者の目線に立って工夫を凝らしています。

例えば、2連引き戸の戸尻側にもドアハンドルを設置し、その下に鍵を取り付けたこともその一つです。これによって患者が便座に座った状態でも扉や鍵を開閉しやすくなりました。

また、補助扉の固定装置には、レバー型のサムターンを採用し、介助者の目線の位置に取り付けました。介助者は立ったまま、片手を使ってワンタッチで操作できるので、楽にスピーディーなドアの開閉が可能です。



便座に座ったままドアの開閉・ロックが可能

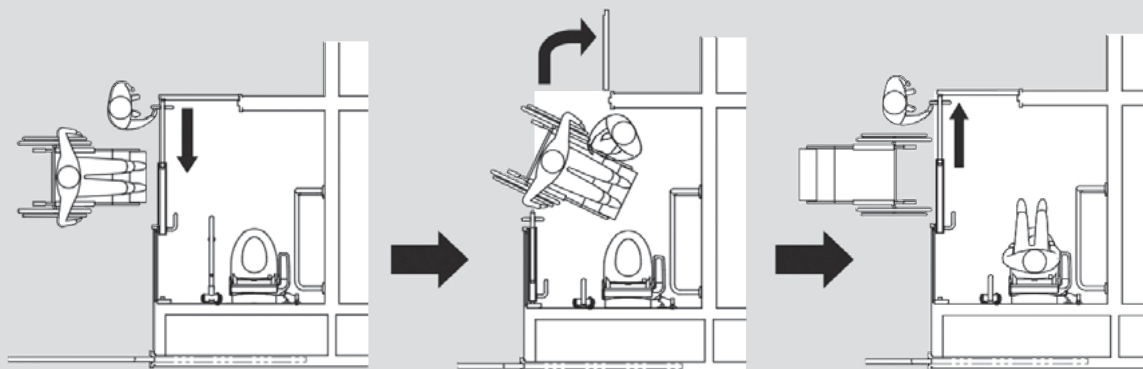


ワンタッチで子扉のロック操作が可能なサムターン

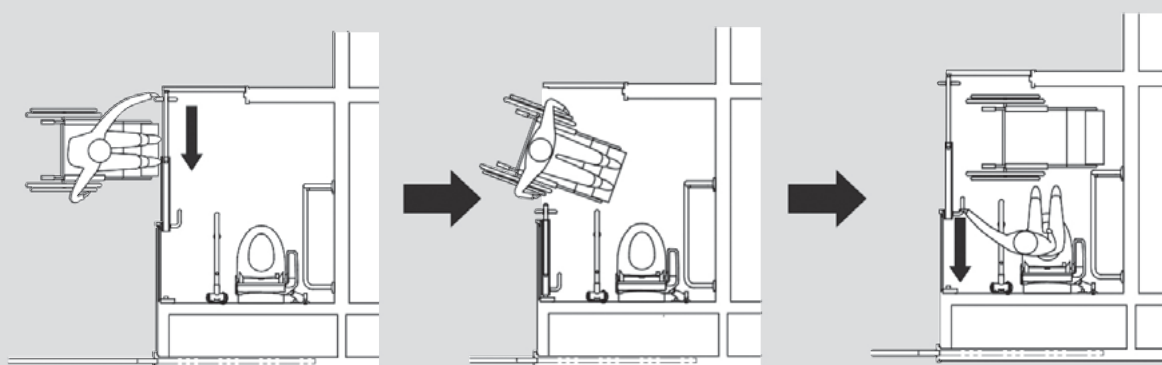


すっきりとした子扉の扉面(左)とコーナー部

介助者も車いすに付き添って中に入ることができます



車いす単独でのご使用の場合は、一人でもドアの開閉が容易に可能です



## 利用者が安全に 使用できるよう配慮

「クロスドア」では、補助扉に吊り元の指挟み防止として中心吊りヒンジを採用しています。メイン扉の戸先には指挟み防止のフロントゴムを採用。鍵には、利用者が万一トイレでトラブルに見舞われたときに外から解錠できる非常時解錠式を採用しました。

このように「クロスドア」はご利用の方はもちろん、介助する方にも安心してご利用いただけるように設計されています。病院や福祉施設、公共施設などの居室内トイレの出入り口にお勧めのドアです。



実際の納入例



## 製品掲載カタログ

本項紹介の「クロスドア」の詳細につきましては、当社の「鋼製軽量ドア」カタログに掲載されております。

## 企画広告

## 新製品レビュー

# 超速硬化ウレタン防水 クイックスプレー



## 株式会社ダイフレックス

建築および土木防水・外装材・スポーツ舗装材・舗道材・外壁塗材・塗り床材などのシステム開発・製造および販売事業を行っている会社です。

[大阪支店]  
〒531-0071  
大阪府大阪市北区中津1-11-1  
中津センタービル8階  
TEL：06-6292-0511

[本社]  
〒163-0825  
東京都新宿区西新宿2-4-1  
新宿NSビル25F私書箱第6086号  
TEL：03-5381-1555（代表）  
URL：http://www.dyflex.co.jp/

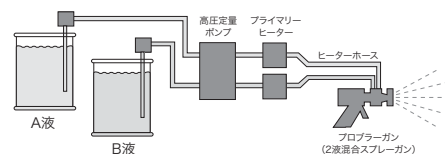
## 超速硬化ウレタン防水と特長

### ■超速硬化ウレタンとは

超速硬化ウレタン防水は、機械化コントロールシステムによる吹付け施工を行う防水工法です。超速硬化ウレタンは、吹付け後約20秒で指触ができ、約3分で硬化する特長を持ちます。そのため、立上りや複雑な形状にも比較的容易に防水層を形成できます。

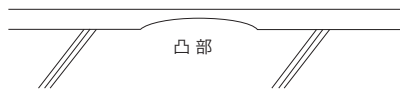
また、超速硬化ウレタンは、JIS A 6021高伸長形（旧1類）の規格値を大きく上回る高い物性を持ちます。その特性を最大限に活かすことで、新築・改修を問わず、多様化する屋上の使用目的に対応します。

<スプレーシステム図>



### 塗膜の硬化イメージ

#### 従来の塗布型ウレタン



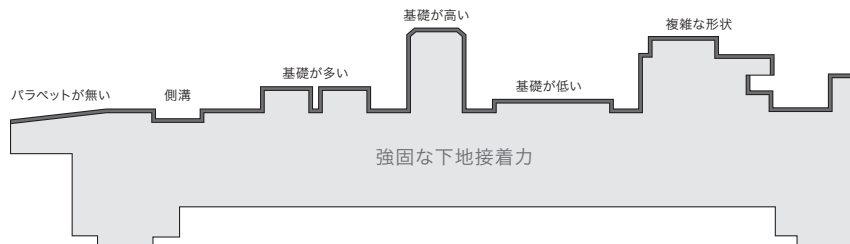
2液を混合攪拌して、コテなどの道具を用いて塗布する従来のウレタンは、セルフレベルリング性があり（水のように低い方へ流れる）、上の図のように、凸部では膜厚を確保することが困難です。そのため、数回に分けて塗布したり、立上り面は専用材を用いて塗布しています。

#### 超速硬化ウレタン



吹き付け後、数秒でゲル化するため、立面や凹凸の激しい部位でも一定以上の厚みを確保することができます。そのため、従来のウレタンでは施工が困難な部位に適用できるようになりました。

### シームレスな防水層のイメージ



短時間で指触乾燥する超速硬化ウレタンと優れた下地接着力によって、躯体形状に合せた施工が行えます。また、アゴを必要とせず、さらに防水層端部に金物等を一切使用しないため納まり性も良好です。そのため、「防水層（の機能保持）が躯体デザインを決定させる」ということはありません。

## ■メンテナンスと改修（更新）性に優れる

防水層の状況を直接目視確認でき、またピンポイントでの補修も可能です。

さらに長期維持管理には、防水層を撤去せずに行う「オーバーレイ改修（ウレタンの増し塗り）」やトップコートの塗り替えの実施により改修（更新）性が高くLCC（ライフサイクルコスト）の大幅な低減にも貢献します。

## 一般屋上・人工地盤用 クイックスプレー複合工法

### ■工法概要

下層には高い弾性と伸びを有する1成分形のウレタン防水材、表層には伸びと耐磨耗性を併せ持つ硬質タイプの「超速硬化ウレタン」を用い、耐久性・耐磨耗性に優れた工法です。露出だけでなく、保護層やウッドデッキ、さらにインターロッキングの設置も可能です。

<超速硬化ウレタン施工後>



<ウッドデッキ設置>



&lt;超速硬化ウレタン施工後&gt;



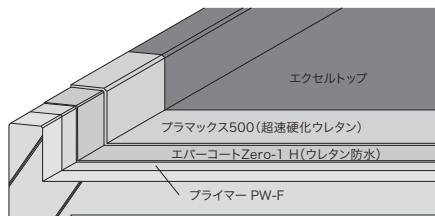
&lt;インターロッキング設置&gt;



## ■工法紹介

### ◆密着工法（歩行用・露出・ウッドデッキ）

仕様名：UPM-10工法

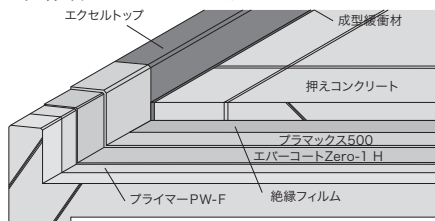


設計価格：13,100円/㎡

平均厚み：3.2mm

### ◆密着工法（重歩行用・保護コンクリート・タイル、石張り・インターロッキング）

仕様名：UPM-10C工法



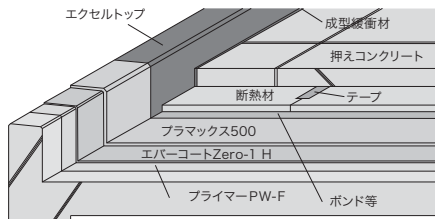
設計価格：12,200円/㎡

（押えコンクリートは別途）

平均厚み：3.2mm

### ◆密着工法（重歩行用・保護コンクリート・タイル、石張り・断熱）

仕様名：UPM-10CF工法



設計価格：16,300円/㎡

（押えコンクリートは別途）

※断熱材はスチレンフォームの35mmを標準としています。

平均厚み：3.2mm

<水盤部の押えコンクリート下にも対応できます>



## 屋上緑化防水グリーンプレイス工法

### ■工法概要

下層は高い弾性と伸びを有するウレタン防水材、上層は超速硬化ポリウレタの二重構造で形成される屋上緑化防水工法です。下地亀裂による防水層の損傷を克服し、また強靱で耐根、耐薬、耐久性に優れた高強度防水層をシームレスに形成することで緑化用防水層に求められる様々な要求に応えています。



### ■ウレタン樹脂よりも機能の高いポリウレタ樹脂

超速硬化ポリウレタは、超速硬化ウレタンと同様にシームレスな防水層を形成することができます。メンテナンス性にも大変優れています。

しかし、それだけでなく上下水道施設などの防食ライニングに適応するなど厳しい条件下でも用いられるほど強靱で、耐薬品性、耐水性、耐菌性、耐根性などさまざまな性能を有しています。

### ■自由度の高い意匠性

グリーンプレイス工法を構成している防水材は液状のため、躯体形状に合わせた施工を行うことができます。また、下地コンクリートとの接着が良好で、防水端末を金物で押える必要もなく、オーバーフロー等による防水層裏への水廻りの懸念はありません。そのため、グリーンプレイス工法は防水の施工や納まりの条件で躯体形状を指定せず、デザインに合わせた防水設計・施工が可能になります。

&lt;バラベット天端ギリギリまで植栽を施した例&gt;



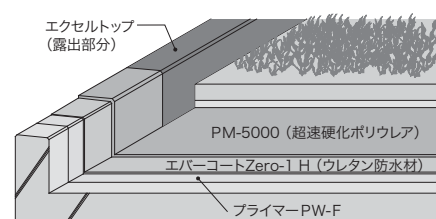
### ■耐根性能を誇る防水工法

一般的な防水材は耐根性能がなく、屋上緑化用の耐根シートが必須でした。しかし、ダイフレックスのグリーンプレイス工法は塗膜が大変強靱で、根や茎が貫通することはありません。また、アスファルト防水やシート防水のように、ジョイントがなくシームレスな防水層を形成するため、小さな根の先が入り込み、成長することもあり得ません。そのため、直接土壌を乗せることができます。

### ■工法紹介

#### ◆密着工法（緑化）

仕様名：V-UF工法



設計価格：15,000円/㎡

平均厚み：3.0mm

## information

1 生誕110年 村井正誠展  
ひとの居る場所

村井正誠は1905（明治38）年に岐阜県大垣市で生まれ、和歌山県新宮市で育った。村井が少年期を過ごした頃の新宮市では、のちに大正自由教育の一つの象徴となった文化学院を開いた西村伊作の周辺に、石井柏亭、富本憲吉など多くの芸術家が集まり、村井は小学生の頃から生活と制作を共にする彼らの姿を見て画家への憧れを抱いた。



村井 正誠《クリジフィ》  
1947/油彩、キャンバス

中学卒業後、上京した村井は文化学院大学部美術科で学び、1928（昭和3）年にフランスに渡った。そして、華やかなパリ画壇の流行には追従せず、原始美術、中世美術の素朴な表現に共感し、モンドリアンらの抽象芸術に刺激を受けながら、時代を超え、国境を越えて人間の心に響く絵画を探る本格的な制作を始める。日本の抽象絵画の先駆けとなったそれらの作品は、第二次世界大戦へと向かう不穏な世情のもとですら、変わらない人間の生命の輝きを求め、提示しようとするものであった。

村井はまた作品発表の場として長谷川三郎、山口薫らの友人と共に創立した新時代洋画展、それを発展させた自由美術家協会を創立して、戦前の日本画壇に新しい風を吹き込み、多くの若い作家たちに影響を与えた。

戦後はモダンアート協会を創立し、1951（昭和26）年第1回サンパウロ・ビエンナーレ展をはじめとする数々の国際展で活躍する一方で、母校文化学院や武蔵野美術大学で教授をつとめている。より大らかで温かな表現を求めて画風を展開し、1999（平成11）年に逝去するまで、一貫して人間をテーマに描き続けた。今回の回顧展では、とくに油彩画と並行して制作しつづけた版画作品をあわせ、村井の油彩画30点、版画70点を展示する予定である。

期 間 2月14日(日)まで  
9:30~17:00  
※入館は16:30まで

休 館 日 月曜日  
(ただし1/11は開館、1/1~4・1/12は休館)

会 場 和歌山県立近代美術館 2階展示室  
和歌山市吹上1-4-14  
TEL.073-436-8690

観 覧 料 一般510円、大学生300円  
＊高校生以下、65歳以上の方、  
障がい者手帳等をお持ちの方は無料

2 特集展示  
大坂出土の貿易陶磁

近世の大坂は、豊臣秀吉が城下町を整備し商業や加工業の保護・育成に努めたことにより、世界的にも消費・生産・流通の大都市として発展を遂げた。大坂の人々は経済的豊かさを背景に文化・芸術を生み出し、より美しいもの、より質の良いものを求めるようになる。旺盛な消費活動はいわゆる鎖国制度のもとでも発揮され、海外からさまざまな品物を輸入し、手に入れた。陶磁器もそのひとつである。

今回の展示では、これまで大阪文化財研究所が大阪市内で行った発掘調査のうち、おもに豊臣期から徳川期にかけて（16世紀末から19世紀中ごろ）、大坂城下町跡や大坂城跡で見つかった外国産の陶磁器を展示する。貿易陶磁と呼ばれるこれらは、舶来の高級食器である一方、貿易品を運ぶための容器でもあった。貿易陶磁から大坂とさまざまな国や地域とのかかわりを紹介する。



中国景徳鎮窯 青花磁器芙蓉手鉢  
(ちゅうごくけいとくちんよう せいかじきふようではち)  
中央区大坂城跡（17世紀）  
大阪市教育委員会所蔵・大阪文化財研究所保管

期 間 1月6日(水)~2月15日(月)  
9:30~17:00

※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 火曜日  
会 場 大阪歴史博物館 8階 特集展示室（常設展示場内）  
大阪市中央区大手前4-1-32  
TEL.06-6946-5728

観 覧 料 一般600円、高大生400円（常設展示料金で観覧可能）  
＊中学生以下無料  
＊大阪市内在住の65歳以上の方は無料（要証明）  
＊障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

## information

3 美と装い  
新収蔵品とともに

昨年度の新収蔵品を展示するこのたびの館蔵品展では「美と装（よそおい）」をテーマに、美人画や女性像などの人物画を中心とした日本画や油彩画他約50点を紹介する。寺島紫明の美人画《冬靄（ふゆもや）》、中西勝の人物画《大地の中の母子》などの新収蔵品4点と、上村松園《秋の粧》、伊東深水《吹雪》、梅原龍三郎《姑娘紅樓》、ギュスターヴ・クールベ《眠る草刈り女》などを展示する。



石川寅治《窓のそば》  
1912年

また同時開催として、横山大観《若葉》、菱田春草《秋林遊鹿》、富田溪仙《淀城》、西村五雲《冬暖》など、館で所蔵する近代日本画の優品を約20点展示する。

期 間 1月2日(土)～2月14日(日)

10:00～17:00

※入館は16:30まで

休 館 日 水曜日

会 場 西宮市大谷記念美術館  
兵庫県西宮市中浜町4-38  
TEL0798-33-0164

観 覧 料 一般500円、高大生300円、小中生200円  
\*20名以上の団体は各料金から100円割引  
\*ココロカード・のびのびパスポート提示の小中生は無料  
\*西宮市在住の65歳以上の方は無料（要証明提示）  
\*心身に障害のある方及び介助者1名は無料（要手帳等提示）

4 奇想の版画家 谷中安規展  
蔵出し！M氏コレクション

昭和初期、戦中から戦後にかけての激動の時代、独自の幻想的ヴィジョンを木版に刻み続けた版画家・谷中安規（1897～1946）。明治末期から昭和初期にかけて隆盛し、多くの個性的な版画家を輩出した創作版画運動にあって、とりわけ異彩を放つ作家のひとりである。

本展では、館の収蔵品のみならず、京都国立近代美術館の収蔵品、長年に渡って谷中の研究と収集に情熱を燃やし続けたM氏の珠玉のコレクションを合わせた計約170点の作品と資料を一堂に展示する。『白と黒』や『版藝術』といった創作版画誌で発表した作品から、内田百閒や佐藤春夫の著書など



谷中安規《女の顔（星神）》  
1931年頃

様々な書籍に提供した挿絵や装丁の仕事まで、比類なき谷中の版画世界を主題と技法・材質の両面から概観する。

期 間 3月6日(日)まで

10:00～18:00

（特別展開催中の金・土は20:00まで）

※入場は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日（ただし1/11は開館、1/1・1/12は閉館）

会 場 兵庫県立美術館 常設展示室（1階・2階）

神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

TEL.078-262-0901

観 覧 料 一般510円、大学生410円、高校生260円

\*中学生以下無料

\*65歳以上の方は一般料金の半額

\*障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は  
各観覧料金の半額

5 浮世絵・水彩画に見る新宿風景展  
江戸から昭和まで

新宿区立新宿歴史博物館との協働企画として、館の所蔵作品の中から堀潔の水彩画を中心に、新宿をテーマにした浮世絵、油彩画、版画、デッサンなど、バラエティに富んだ作品を展覧する。本展では、色彩豊かで歴史的記録資料としての価値も高い堀潔の水彩画約50点を戦前、前後に分け、さらに江戸の浮世絵、織田一磨の版画、佐伯祐三の油彩画などを一堂に会することで、江戸時代から昭和にかけての新宿の様子を絵画で辿っていく。

※浮世絵は会期中展示替えあり



堀潔《新宿中村屋》  
1940〔昭和15〕年頃

期 間 1月16日(土)～3月13日(日)

10:30～19:00

※入館は18:40まで

休 館 日 火曜日

会 場 中村屋サロン美術館

東京都新宿区新宿3-26-13 新宿中村屋ビル 3階

TEL.03-5362-7508

観 覧 料 一般300円

\*高校生以下無料

\*障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

本欄掲載の1～5の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手（82円）を日本建築協会事務局までお送りください。

# 謹賀新年



## 平成28年元旦

### 亀井 忠夫

日建設計  
代表取締役社長

〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4-6-2 TEL(06)6203-2361

### 近藤 康之

不二熟学工業 株式会社  
代表取締役

〒542-0081 大阪市中央区南船場2-1-1 TEL(06)6261-4321

### 千種 幹雄

株式会社 昭和設計  
代表取締役社長

〒531-0072 大阪市北区豊崎4-12-10 TEL(06)7174-8787

### 北野 晶平

ダイダゲ 株式会社  
代表取締役社長  
最高執行責任者

〒550-8520 大阪市西区江戸堀1-9-25 TEL(06)6447-8000

理事

### 佐野 吉彦

株式会社 安井建築設計事務所  
代表取締役社長

〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL(06)6943-1371代

理事

### 中井 進

日建設計コンストラクション・マネジメント  
代表取締役会長

〒112-0004 東京都文京区後楽1-4-27 TEL(03)5803-9770

会長

### 香西 喜八郎

株式会社 東畑建築事務所  
代表取締役社長

〒541-0043 大阪市中央区高麗橋2-6-10 TEL(06)6202-0391

副会長

### 設楽 貞樹

株式会社 安井建築設計事務所  
常務取締役執行役員

〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL(06)6943-1371代

### 原 眞一

コーナン建設 株式会社  
代表取締役

〒531-0075 大阪市北区大淀南1-9-10 TEL(06)6456-4311

### 小神 正志

西日本建設業保証 株式会社  
取締役社長

〒550-0012 大阪市西区立売堀2-1-2 TEL(06)6543-2553

### 立野 純三

株式会社 ユニオン  
代表取締役社長

〒550-0015 大阪市西区南堀江2-13-22 TEL(06)6532-3188



謹賀新年



平成28年元旦

設計事務所有志

## 株式会社 伊藤建築設計事務所

代表取締役会長 森 口 雅 文

代表取締役社長 小 田 義 彦

本社・名古屋事務所・エルイー創造研究室

〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-15-15 (桜通ビル) TEL (052) 222-8611

東京事務所

〒101-0021 東京都千代田区外神田3-5-12 (聖公会神田ビル) TEL (03) 5294-6211

## 株式会社 瀬戸本淳建築研究室

代表建築家 瀬戸本 淳

代表取締役COO 亀 川 尚 史

代表取締役CFO 木 幡 秋 彦

代表取締役CTO 小 島 寛 也

〒650-0024 神戸市中央区海岸通2-2-3 TEL: 078-333-0138 <http://www.jsao.co.jp>

## 株式会社 東畑建築事務所

代表取締役社長 香 西 喜 八 郎

本社 〒541-0043 大阪市中央区高麗橋2-6-10 TEL (06) 6202-0391

大阪・東京・名古屋・九州・東北

<http://www.tohata.co.jp>

日建設計

代表取締役社長 亀 井 忠 夫

東  
大  
名京  
阪  
屋102-8117  
541-8528  
460-0008東京都千代田区飯田橋2-18-3  
大阪市中央区高麗橋4-6-2  
名古屋市中区栄4-15-32TEL (03) 5226-3030  
TEL (06) 6203-2361  
TEL (052) 261-6131

## 安井建築設計事務所

代表取締役社長 佐 野 吉 彦

本社: 〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL(06)6943-1371(代表)

支社: 大阪・東京・名古屋・広島・九州

[www.yasui-archi.co.jp](http://www.yasui-archi.co.jp)

## 建設業有志



OBAYASHI

時をつくる ところで創る

大林組

取締役社長 白石 達

本社 東京都港区港南 2-15-2 TEL 03 (5769) 1111

専務執行役員 大阪本店長 鶴田 信夫

大阪本店 大阪市北区中之島 3-6-32 TEL 06 (6456) 7000

100年をつくる会社

KAJIMA CORPORATION

本社 東京都港区元赤坂1丁目3番1号

関西支店 大阪市中央区城見2丁目2番22号・マルイトOBPビル  
電話06 (6946) 3311<http://www.kajima.co.jp/>

子どもたちに誇れるしごとを。

清水建設株式会社

取締役社長 宮本 洋一

常務執行役員大阪支店長 池田 耕二

本社 〒104-8370 東京都中央区京橋二丁目16番1号 Tel. 03 (3561) 1111

大阪支店 〒541-8520 大阪市中央区本町三丁目5番7号 御堂筋本町ビル Tel. 06 (6263) 2800

For a Lively World

社長 村田 誉之  
常務執行役員 金井 隆夫  
関西支店長<http://www.taisei.co.jp/>

想いをかたちに 未来へつなぐ



TAKENAKA

竹中工務店 取締役社長 宮下正裕

〒541-0053 大阪市中央区本町 4-1-13 tel: 06-6252-1201

〒136-0075 東京都江東区新砂 1-1-1 tel: 03-6810-5000



# 戸田建設株式会社

代表取締役社長 今井 雅 則  
常務執行役員大阪支店長 光 用 薫

本社 〒104-8388 東京都中央区京橋1-7-1 TEL 東京03(3535)1354  
大阪支店 〒550-0005 大阪市西区西本町1-13-47 TEL 大阪06(6531)6095  
支店 東京・首都圏土木・千葉・関東・横浜・名古屋・札幌・東北・広島・四国・九州



夢のレンガを積みあげよう

## 都窯業株式会社

〒530-0047 大阪市北区西天満 2-8-1 大江ビル  
Tel (06)6367-0389 Fax (06)6367-5567  
工房 三重県伊賀市西山 伊州窯  
<http://www.miyakoyogyo.com> E-mail: info@miyakoyogyo.com

建材・学校・団体有志等



## 大阪工業技術専門学校

OSAKA COLLEGE OF TECHNOLOGY

建築学科・インテリアデザイン学科・大工技能学科・設備環境デザイン学科・建築設計学科(リカレント生対象)  
建築学科II部(夜間)・フレックス建築学科(夜間・単位制)・建築士専科(二級建築士受験資格取得者対象)

〒530-0043 大阪市北区天満1丁目8番24号 ☎ 0120-0910-19 🌐 <http://www.oct.ac.jp/> Tel. 06-6352-0093



## 一般社団法人 日本建築材料協会

会 長 立 野 純 三

〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-4-23 撞木橋ビル4階 TEL(06)6443-0345 FAX(06)6443-0348  
<http://www.kenzai.or.jp/>



## 一般社団法人 日本建築協会

会 長 香 西 喜八郎

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 TEL(06)6946-6981



## 一般社団法人 日本建築協会中国支部

支 部 長 高 松 隆 夫

〒732-0805 広島市中区十日市町1-1-9 (相生通り鷹匠ビル4階山陽工業(株)内) TEL (082) 232-6471



## 一般社団法人 日本建築協会東海支部

支 部 長 篠 原 佳 則

〒460-0008 名古屋市中区栄2-10-19 (名古屋商工会議所ビル9階) TEL (052) 201-2201



## 一般社団法人 日本建築協会京都支部

支 部 長 長 瀬 博 一

〒604-0944 京都市中京区押小路通柳馬場東入橘町641 京都建設会館別館 TEL (075) 211-2857



日本建築協会

## 月間の動き

平成27年11月

## 理事会

## 第2回通常理事会

11月25日（水）16：00～16：30

OMMビル会議室

出席者 香西会長ほか

議 事（1）平成27年度上半期（4月～9月）事業執行状況

## 編集委員会

## 第8回広告企画・編集合同委員会

11月5日（木）18：00～19：20

日本建築協会会議室

出席者 米井委員長ほか4名

議 事（1）12月号特集 『図面』を変える～BIMの深化が誘う建設プロセスの変革～

（2）1月号特集 都市の記憶をたどって

（3）2月号特集 非日常の棲み処（すみか）・・・寝泊まりの進化（仮）

（4）3月号特集 東海特集

（5）4月号特集 私の空間作法

（6）5月号特集 移動手段他複数案

（7）広告依頼先検討

## 第8回構造分科会

11月2日（月）18：00～19：00

日本建築協会会議室

出席者 岡田幹事ほか3名

議 事（1）構造の頁の企画

（2）11月号特集報告

## 第7回設備分科会

11月4日（水）18：05～20：00

日本建築協会会議室

出席者 橋本幹事ほか7名

議 事（1）設備の頁の企画

（2）2016年特集の企画

## 第7回法令分科会

11月18日（水）15：10～17：00

日本建築協会会議室

出席者 黒川幹事ほか2名

議 事（1）法令コーナーの企画

（2）2016年特集の企画

## 第7回作品作風小委員会

11月26日（木）19：00～20：15

日本建築協会会議室

出席者 西田小委員会委員長ほか7名

議 事（1）作品の選定

（2）作品の掲載状況、予定

（3）gallery掲載報告、予定

（4）その他

## 事業委員会

## 第5回情報見学小委員会

11月12日（木）18：00～20：00

日本建築協会会議室

出席者 豊田小委員会委員長ほか6名

議 事（1）吹田市立スタジアム見学会報告

（2）立命館大学大阪いばらきキャンパス見学会報告

（3）今後の見学先の検討

## 第10回U-35小委員会

11月9日（月）19：00～23：30

東畑建築事務所会議室

出席者 若江リーダーほか7名

議 事（1）3rd action／100周年事業

（2）次回予定／その他

## 第11回U-35小委員会

11月16日（月）19：00～23：30

出席者 若江リーダーほか3名

議 事（1）3rd action

（2）その他

## 出版委員会

## 第7回出版委員会

11月19日（木）18：00～18：40

日本建築協会会議室

出席者 西委員長ほか5名

議 事（1）＜プロのノウハウ＞と特装本の経過報告

（2）制作進行中の書籍

（3）今後の出版テーマ

## 教育委員会

## 第7回大阪府住まいづくり教育普及協議会

11月20日（金）10：30～12：00

場 所 大阪府建築士事務所協会会議室

議 事（1）出前講座実施

（2）その他

## 100周年関連事業委員会

## 第5回10年委員会

11月11日（水）18：30～20：00

（株）安井建築設計事務所会議室

出席者 設楽委員会委員長ほか7名

議 事（1）学生のための見学会報告と今後の見学先検討

（2）そぞろ歩く御堂筋 今後の展開

## 見学会

## 立命館大学大阪いばらきキャンパス見学会

11月14日（土）14：00～16：00

講 師 及川清昭氏・武田史朗氏（立命館大学）、石井靖人氏（榊山下設計）、長谷川淳（榊竹中工務店）

参加者 20名

## 表彰式

## 第61回工高生デザインコンクール表彰式

11月7日（土）13：30～16：30

綿業会館本館3階中集会場

出席者 受賞者17名（引率者6名含む）

審査員8名

委 員 谷口小委員会委員長ほか2名

## 編集委員会（平成27年度）

## ■副会長

設楽 貞樹

本多 友常

## ■編集担当理事

西 博康

松崎 公一

佐藤 榮一

杉本 浩

竹中 統一

松本 眞一

吉村 英祐

◎米井 寛

## ■副委員長

○勝山 太郎

## ■特集小委員会

## ■計画分科会

## ★計画系

飯田 匡

鈴木 克彦

△田中 直人

紅谷 昇平

松田奈緒子

三宅 次郎

守井 辰

吉村 英祐

## ★建築計画系

荒木 宏之

大西 広朗

神戸 嘉也

静 茂夫

下坂 浩和

野田 隆史

橋本 祐典

△樋口 展寛

三谷 帯介

米山 剛史

渡部 剛

## ★インテリア・住宅系

今井 充彦

川合 隆之

工藤 理隆

△黒柳 亮

酒井 雅男

塚口眞佐子

ペリー史子

間瀬 一博

## ■構造分科会

伊藤 栄治

△岡田 健

岸本 光平

司馬 勢也

瀧野 敦夫

角田 耕一

橋本 宗明

宮久保秀樹

向井 洋一

## ■設備分科会

有尾清二郎

北野 勝也

高村 聡

寺井 千佳

長澤 康弘

夏井 重行

△橋本 直樹

藤原 謙一

榊井 貴廣

宮崎ひろ志

山本 雅洋

## ■施工材料分科会

東 琢

荻巣 友貴

桜井 和男

高橋 秀一

藤丸 啓一

山口 紀宏

△吉田 正友

## ■法令分科会

磯林 雅之

岡本 亮二

杵掛 靖

△黒川 正樹

河野 学

前田 俊文

## ■作品作風小委員会

東井 嘉信

居内 章夫

池上 明

稲垣 和江

加嶋 章博

菊池 浩輔

倉橋 樹仁

倉渕奈千子

澤田 純一

高木 秀晃

鞆野 淳司

豊田 充広

▲西田 佳代

芳谷 晴彦

増田 敬彦

## ■広告企画小委員会

大谷 金由

小川 雄介

小山 昭

金築 雄

藤田 昌宏

▲前田 衛

山辻 直樹

（順不同）

◎委員長

○副委員長

▲小委員会委員長

△幹事

印 刷 2015年12月28日

発 行 2016年1月1日

発 行 人 一般社団法人日本建築協会

大阪市中央区大手前1-7-31

電 話 06-6946-6981

印刷所 榊中島弘文堂印刷所

デザイン 多田正治（多田正治アトリエ）

定 価 1230円（税込）

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

## お客様の抱える問題やニーズにより速やかに、より丁寧に対応するために

企画・デザイン、制作、製版、印刷

### 株式会社 中島弘文堂印刷所

本社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号  
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765

東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階  
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

**NACL** のアルミ表面処理

### 株式会社 日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail:sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階

TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7

TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

## コンクリートのひび割れ対策に

NETIS 登録済み  
KT-040018-V

**DENKA**  
DENKI KAGAKU KOGYO KABUSHIKI KAISHA

### 高性能膨張材

# デンカパワーCSA

JIS A 6202  
適合品

### 特 性

- ・乾燥収縮の低減
- ・自己収縮の低減
- ・水密性の向上(防水性)
- ・温度ひび割れの低減

### 主な用途例

- ・合成デッキスラブ
- ・土間スラブ
- ・RC 構造物
- ・自己充填コンクリート
- ・マスコンクリート 他

膨張材以外にも

- ・無収縮グラウト材  
(タスコン)
  - ・躯体防水材  
(シャガード)
  - ・ポリマーセメントモルタル  
(RIS シリーズ)
- など、各種混和材(剤)を  
ラインナップしています。

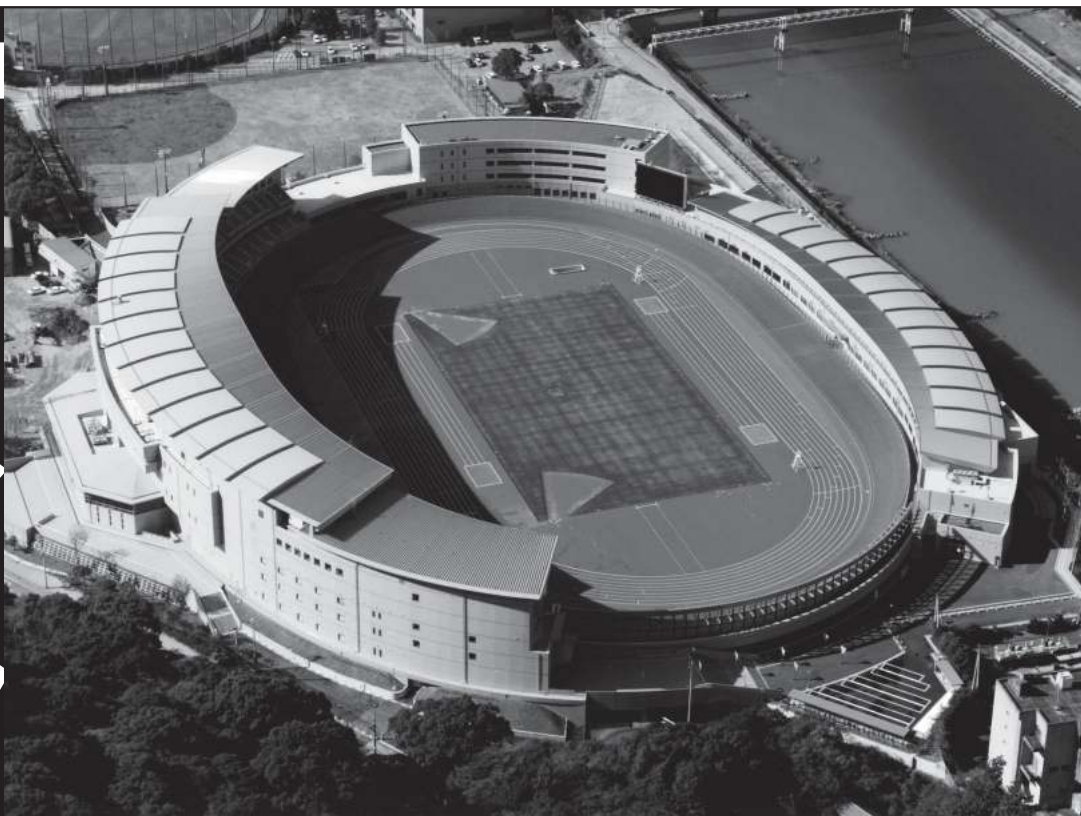
●資料のご請求お問い合わせは・・・

電気化学工業株式会社  
近畿地区販売店

### 小浦産業株式会社

〒550-0004 大阪府大阪市西区靱本町1丁目14番6号  
TEL 06-6443-6181 FAX 06-6443-6270

# 防水



## 超速硬化ウレタン防水 クイックスプレー工法



自由度の高いデザインが可能です

軽量化が図れます

安心の高物性です

工期短縮が可能です



**株式会社 ダイフレックス 大阪支店**

**DYFLEX** 〒531-0071 大阪府大阪市北区中津1-11-1 中津センタービル8階

**大阪 06-6292-0511 東京 03-5381-1555**

建築材料営業本部／札幌／仙台／新潟／さいたま／千葉／多摩／横浜／名古屋支店／広島／福岡

<http://www.dyflex.co.jp/>

# 重要なのは「今」の試験の合格実績!

## 1級建築士を1年で取得するなら総合資格学院

### 平成27年度 1級建築士 設計製図試験

**全国**  
ストレート合格者占有率  
合格者占有率

# No.1

[平成27年度 学科+製図合格]  
全国ストレート合格者の  
6割以上が当学院現役受講生!

全国ストレート合格者占有率

# 60.5%

全国ストレート合格者1,594名中、当学院現役受講生965名

他講習  
利用者  
+  
独学者  
当学院  
現役  
受講生

全国合格者の  
およそ6割が  
当学院現役受講生!

全国合格者占有率

# 56.9%

全国合格者3,774名中、  
当学院現役受講生2,149名

※全国合格者数または全国ストレート合格者数は、(公財)建築技術教育普及センターの発表に基づきます。※学科・製図ストレート合格者とは、平成27年度建築士学科試験に合格し、平成27年度建築士設計製図試験にストレート合格した方です。※総合資格学院の合格実績には、模擬試験のみの受験生、教材購入者、無料の役務提供者、過去受講生は一切含まれておりません。<平成27年12月17日現在>

### 平成27年度 1級建築士 卒業学校別実績

[平成27年度 1級建築士設計製図試験  
卒業生合格者20名以上の全学校一覧]

下記学校卒業生合格者の6割以上が当学院現役受講生!  
合格者2,161名中、当学院現役受講生1,359名

# 62.9%

| 学校名         | 合格者数 | 当学院合格者 | 当学院受講率 |
|-------------|------|--------|--------|
| 1 日本大学      | 225  | 147    | 65.3%  |
| 2 東京理科大学    | 132  | 90     | 68.2%  |
| 3 早稲田大学     | 99   | 60     | 60.6%  |
| 4 芝浦工業大学    | 78   | 53     | 67.9%  |
| 5 近畿大学      | 73   | 35     | 47.9%  |
| 6 工学院大学     | 66   | 34     | 51.5%  |
| 7 明治大学      | 54   | 37     | 68.5%  |
| 8 神戸大学      | 51   | 34     | 66.7%  |
| 9 京都大学      | 47   | 21     | 44.7%  |
| 10 京都工芸繊維大学 | 46   | 26     | 56.5%  |
| 11 金沢工業大学   | 45   | 20     | 44.4%  |
| 11 関西大学     | 45   | 25     | 55.6%  |
| 11 法政大学     | 45   | 32     | 71.1%  |
| 14 大阪工業大学   | 44   | 29     | 65.9%  |
| 15 神奈川大学    | 43   | 32     | 74.4%  |
| 15 九州大学     | 43   | 29     | 67.4%  |
| 17 東京電機大学   | 40   | 23     | 57.5%  |
| 17 東京都市大学   | 40   | 29     | 72.5%  |

| 学校名        | 合格者数 | 当学院合格者 | 当学院受講率 |
|------------|------|--------|--------|
| 17 名城大学    | 40   | 22     | 55.0%  |
| 17 広島大学    | 40   | 29     | 72.5%  |
| 21 名古屋工業大学 | 39   | 28     | 71.8%  |
| 22 東京大学    | 36   | 20     | 55.6%  |
| 23 千葉大学    | 35   | 23     | 65.7%  |
| 23 広島工業大学  | 35   | 23     | 65.7%  |
| 25 東海大学    | 34   | 20     | 58.8%  |
| 26 東洋大学    | 33   | 21     | 63.6%  |
| 26 三重大学    | 33   | 26     | 78.8%  |
| 28 熊本大学    | 32   | 20     | 62.5%  |
| 28 横浜国立大学  | 32   | 20     | 62.5%  |
| 30 福岡大学    | 31   | 20     | 64.5%  |
| 30 北海道大学   | 31   | 20     | 64.5%  |
| 32 大阪大学    | 30   | 16     | 53.3%  |
| 32 東京工業大学  | 30   | 17     | 56.7%  |
| 34 中央工学校   | 29   | 20     | 69.0%  |
| 34 名古屋大学   | 29   | 21     | 72.4%  |
| 36 鹿児島大学   | 27   | 16     | 59.3%  |

| 学校名           | 合格者数 | 当学院合格者 | 当学院受講率 |
|---------------|------|--------|--------|
| 36 千葉工業大学     | 27   | 17     | 63.0%  |
| 38 大阪市立大学     | 26   | 18     | 69.2%  |
| 38 信州大学       | 26   | 16     | 61.5%  |
| 40 大分大学       | 25   | 14     | 56.0%  |
| 40 首都大学東京     | 25   | 17     | 68.0%  |
| 40 新潟大学       | 25   | 14     | 56.0%  |
| 43 東北大学       | 24   | 13     | 54.2%  |
| 43 室蘭工業大学     | 24   | 13     | 54.2%  |
| 45 大阪工業技術専門学校 | 23   | 10     | 43.5%  |
| 46 前橋工科大学     | 22   | 17     | 77.3%  |
| 47 日本工業大学     | 21   | 11     | 52.4%  |
| 47 立命館大学      | 21   | 21     | 100.0% |
| 49 関東学院大学     | 20   | 15     | 75.0%  |
| 49 京都造形芸術大学   | 20   | 10     | 50.0%  |
| 49 慶應義塾大学     | 20   | 15     | 75.0%  |

※各都道府県合格者数・卒業学校別合格者数は、試験実施機関である(財)建築技術教育普及センターの発表によるものです。※総合資格学院の合格者数には、「2級建築士」等を受験資格として申し込まれた方も含まれている可能性があります。

平成28年度もより多くの合格者を輩出できるよう、スタッフ一丸となってサポートします!

平成28年度  
目標  
合格者占有率

**1級建築士試験**  
ストレート合格者占有率  
(学科+製図)

# 95%

最低ライン80%以上  
都道府県単位で100%を目指す

1級建築士学科試験  
合格者占有率

# 90%

2級建築士試験  
ストレート合格者占有率  
(学科+製図)

# 70%

2級建築士学科試験  
合格者占有率

# 60%

### 法定講習

法定講習サイト

検索

hotei.shikaku.co.jp

一級・二級建築士定期講習 / 管理建築士講習 / 監理技術者講習 / 第一種電気工事士定期講習 / 宅建登録講習 / 宅建登録実務講習

### 平成28・29年度 受講生募集中 無料体験入校実施中!

お気軽にお問い合わせください

1級・2級 建築士

構造設計  
1級建築士

1級・2級建築  
施工管理技士

1級・2級土木  
施工管理技士

建築設備士

設備設計  
1級建築士

宅地建物取引士

インテリア  
コーディネーター



# 総合資格学院

www.shikaku.co.jp

総合資格

検索

Facebook 「総合資格 他」で検索!

私たち総合資格学院はおかげさまで、創立35周年を迎えました。これからも有資格者の育成を通じて、業界の発展に貢献して参ります。

総合資格学院学院長 岸 隆司



梅田校 TEL.06-4709-8111

なんば校 TEL.06-6648-5511

神戸校 TEL.078-241-1711

草津校 TEL.077-566-6911

新大阪校 TEL.06-6101-1911

天王寺校 TEL.06-6771-4311

姫路校 TEL.079-224-1411

奈良校 TEL.0742-30-1511

京橋校 TEL.06-6882-8211

堺校 TEL.072-222-9311

京都校 TEL.075-253-0481

和歌山校 TEL.073-471-2711